

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第一種郵便物認可
昭和五十八年六月二十五日 印刷
昭和五十八年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六七四号



日川協加盟

No. 674

七月号

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳

選者・橘高薫風
(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句

選者・小寺正三
(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌

選者・佐々木信夫
(掲載日) 毎週月・木曜日

〈投稿規定〉

はがき一枚に、句(首)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること)。投稿随時。
自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

〈投稿先〉

〒五〇〇〇〇 大阪市北区中之島二・二 朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。



OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 オースケー

思いのままに

装うのはいいものだ、

熱い心を満たす

オーエスケージェフ

不死鳥忌

西尾 葉

今月は路郎忌である。先生の反骨精神を思い出ししている。それは、福島鉄児氏から聞いた話である。

或る年、久米南町に立派な公会堂（？）が出来て、そこへ掲げる扁額を路郎師にお願いした時に、御礼の予算が五千円しかないで、よろしく頼まれたことがあった。その時、先生は『僕の字は一万円やからどうしようもないね』『そこを枉げてお願いします』と頼まれたそうだが、話は成立しなかった。

こういった公会堂の扁額は、代議士とか知事に頼むと二つ返事で欣んで書いてくれるものである。それをしも、文学の町久米南町は、川柳家路郎に頼まれたことは洵に立派であった。久米南町は当時、川維の金城湯池であって、国鉄弓削駅頭に『俺に似よ俺に似るなと子を思ひ』の句碑が建っているところで、先生にとつては、きつてもきれないところだが、己を偽らない、あの所だから、あの人だからという安易に妥協されない毅然たるプロ精神には全く頭の下がる話であった。

昭和五十二、三年頃の豊中文化祭の時に、たまたま、塊人氏にこの話をする、即座に『いや全く感心なことだ。路郎ならこそ言えたことで、路郎の字ならこそ売れるのである。僕の字なら売れない。だから色紙や短冊を只でひよこひよこ書いてる。だが、原稿料だけは一枚幾らで勘定してるんだ。路郎は偉かったね。きつと筋を通したね』と感に入つた話ぶりであった。

クになるのを慮れられたのであろうか。清貧に甘んじておられた先生の気骨、プロ意識に今更ながらつくづくと感じ入っている次第である。

先生がよく書かれる短冊に
その日ぐらしも軒に雀がこぼるよ
という句がある。

我が家に、先生の
皆呑んでるぞビールが散るぞ夏
うそをまろめて書斎けうとし
という扁額が二面ある。何かの時に黙って先生から戴いたものである。

路郎忌や扁額の句はビール散る

路郎忌やビールのあてはうざくなり

いつしかに膝抱く姿不死鳥忌

水打って端居の微醺不死鳥忌

扁額は書斎けうとし不死鳥忌

老妻は浴衣我はステコ不死鳥忌

因みに、路郎先生は不死鳥のペンネームを使われていた。

川柳塔七月号

座右の句

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

(路郎)

私の句

老残の眼に紫の山ばかり

東野大八

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

不死鳥忌

西尾 栞 … (1)

「わらじ酒」におもう

若柳 潮花 … (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 … (4)

自選集

東野 大八 … (29)

■川柳太平記 (62) 《川柳の群像》 近藤飴ン坊

黒川 紫香選 … (32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (十二丁)

水煙抄 … (34)

秀句鑑賞

阿 萬 萬 的 … (36)

同人吟

植 山 武 助 … (49)

水煙抄

植 山 武 助 … (57)

尼緑之助自選百句

…… (50)

「わらじ酒」におもう

若 柳 潮 花

高血圧と心臓疾患のため惜しくも病床上に数多くの佳句を世に残したまま倒れられた小西無鬼さん、路郎先生の人間陶冶の詩という言葉から片時も離れては暮せなかったとも言われる無鬼さん、その遺句集を何としても御自分の手で世に残してあげたいと言われる富士子さんの切なる願いに動かされた主幹西尾栞さん、橘高薫風さん、篠山川柳会の方達の協力に依って装丁も見事に栞さんの筆による小西無鬼遺句集「わらじ酒」が風薫る三回忌に出版を見ましたことは富士子さんの喜びは申す迄もなく雲の峰の句座に居られる無鬼さんのお喜びは如何ばかりかと存じられます。

「わらじ酒」を手に致して居りますとお元気な頃の面影が浮んで来て懐しい思いで胸が一杯になります。いっお逢い致しましても静かな微笑を見せて下さる温厚なお人柄でした。それだけで本社の会なぞでお酒が一寸入りま

板尾岳人自選百句〈山百句〉

愛染帖

名句鑑賞異聞

柳言秘語

■隨想 ひつじの雜唱〈3〉

「愛」

一路集「自信」

「誘う」

初步教室

柳界展望

本社六月句会

各地柳壇（佳句地10選／藤田泰子）

編集後記

薰風・酔々・鬼遊・史好

橘高薰風選

直原七面山

鈴木村諷子

竹内紫鏑

八木千代選

山本規不風選

吉岡美房選

本田恵二朗

（52）

（54）

（58）

（59）

（60）

（62）

（63）

（64）

（66）

（68）

（72）

（83）

座右の句

散歩 散歩 こんなところに橋がある

（路郎）

私の句

ありがとございますが口から出

高鷲亜鈍

すと篠山のでかんしよ節なぞを大きな声でよく唄って下さるような方でもありました。

お酒を好まれる方だけにお酒を詠んでおられる句も数多く見つけられますが何となくほほ笑ましい感じも致します。

無鬼さんの句には難解な句はひとつも無く、どなたにでも良

くわかって頂ける句だと思います。これが無

鬼さんの句だと私は思います。栗さんの勧め

とかで手向花として富士子さんの句が出句さ

れて居ります。是非各地の皆様にもおすすめ

出来る句集かと存じます。

でかんしよで責をふさいで汗を拭き

あげ足の取り合いをして妥協して

肩の荷を降せは風の軟かく

女の子が抱いて人形らしくなり

社長から来るお流へ坐りかえ

ひと飛びを蛙熟考してのこと

血圧は薬で下げて飲み続け

神様を鈴で起して頼んどき

産湯からもう背伸びして背伸びして

酒煙草心中するなら飲めと云う

幼稚園の列と帰った日の和み

☆手向花より

喪の年を片羽で聞かん除夜の鐘

句いくつ聞えて来そう香けむり



西尾 葉選

大阪市 小出 智子

衣食住足りて茶粥を食べに行く
充実や雑巾今日も濡れている

八尾市 高杉 鬼遊

路郎忌だ史好よ酒を飲まないか

憧れの海おそろしや海の底

雀一羽埋める土が見当らぬ

無理矢理に遠出をさせる万歩計

招待状手ぶらで来いと書いてない

男から見れば女のおそろしき

もぐら叩きのもぐらにいつも笑われる

大阪市 津守 柳伸

信じあうゆとりが美味しい目玉焼

フイーリング合うても意見くい違う

見物が騒いでくれる猿の芸

迷惑を掛けない恋をひとなみに

親指である哀しさに意地を張る

ひとさし指の呪文を解いて逢いにゆく

きょうだいの縁を思う中の指

いつまでもロマンチストなくすり指

約束を二度としたりはせぬ小指

どの指もすでに欲にはつながらぬ

両方の指を合わせて知恵とする

中年以後指より洩れるものばかり

和歌山市 西山 幸

母の日の亡母とつましい五目ずし

析の音へともあれ呼吸整える

後編を誌す活字はたいせつに

忘れ上手になろうと思うタンブラー

懐に亡父の淡海節がある

ビヤガーデン開きを待っているおんな
人肌が恋しい朝の雨模様
くんし蘭咲いて忘れるペットの死

松原市

玉置重人

定年おめでとうとは哀しき言葉なり
鳩尾の底に自信を溜めて置く
雰囲気がコロツと変る美女ひとり
タクシーに値踏みをされた女連れ
よく聞けば責任の無い口達者
先生も日曜が好き共稼ぎ
他人さんを泣かした噂和の揮毫

兵庫県

遠山可住

栗植えて定年の春急がない
助手席に役に立たない妻を乗せ
切札は一枚も無い母の愛
最高の笑顔でポスター落選し
暴落へ言い分持っているキャベツ
六十年の積木はどれも未完成

桜井市

岩本雀踊子

泥舟に一度は乗って見てもよい
とりまきが味方ばかりで出る欠伸
妻病んで釦をつける木綿針
ふり向くといつも妻の目と出逢う
中ぐらいの暮し私のめし茶碗
うたた寝の本音を妻にぬすまれる

松原市

谷垣史好

灯を消せば灯がなつかしき路郎の忌
関心はアルカリ水と円相場
猫のひげ何かいたずらする気だな
月が出て内緒話はこのへんで
脳味噌がグジュグジュグジュと梅雨に入り
腕細く夏の女を憎みけり

岸和田市

高橋操子

日曜は兼高さんと旅をする
スムーズに呼べた二人のオイお前
うちとこもいつか泳ぐか鯉のぼり
裏道はれんげたんぼまっさかり
化粧などいらぬ若さと健康美
化粧塩鯛は目出度く焼上り

堺市

高橋千万子

祝い酒一票以上の顔で飲み
歩く会都会の細い足が寄り
回復期五十男のビスケット
たべられる頃には見舞減ってくる
ここからはドラマと違うわが家の灯
留守がちへ花もつたいなく香り

八尾市

大路美幸

少年に戻れぬ口笛吹いている
流れ矢の傷を忘れる旅に出る
女の小指は別れを惜しむためにある
阪神が勝っても負けてもビール飲む
扇風機お前も随分古びたね

五十坂あとなんにんを愛せるか

倉敷市

小野克枝

花作り母に嬉しい朝がある

手離してから金銀の毬となる
王様の椅子は固めのほうが良い
ラストダンスあなたは待っていてくれる

米子市 林

瑞枝

或る決意子の将来につき当り
複雑な思いで白髪染めている

ドラマめく風へガラスの靴を履く
らせん階段何処かに広い胸が待つ

言い訳をしない女の白い足袋

秘め事を持つ人形は背を見せぬ

麻酔よりさめて私は生きている

決めて来た距離くずさない白い画布

明日の顔作って今日の鏡閉ず

道連れの紐一本を抱きしめる

岡山県

嘉数兆代賀

忘れたい傷が年輪から消えぬ

乾杯のグラスを青春の絵の中に

歳月の影絵がわたしを追ってくる

八尾市 高橋夕花

雨は斜にあの日の傷を深くする

五月雨れてひとりの刻が好きになる
核家族息子も嫁もやさしすぎ

甘言へ傾き易き母の舟

新緑と言うに思想のない私

子等船出母の港は風ばかり

完全武装のなぜかむなし新緑よ

晩年の悟りをひ孫からもらう

束の間の愛かも知れぬが潮満ちる
善人になるのは明日からでよい

米子市

小西雄々

雑壇の居眠りアップして撮られ

酒も御飯もおいしい夫で救われる
小走りになって我が家の鍵をあけ

風下で妥協はしない意地一つ

島根県 堀江芳子

上品な人ヘジョークは遠慮する

聞えない程度にぼやく阿呆らしさ

もつれ糸解かす出会いと信じよう

老いて子に従うコツを話し合い

ロボットをブームの主役にはさせぬ

ひとり芝居終って涙にじむとき

つながりを金で見積る日の自虐

灯を消せば月のぬくみを抱く障子

米子市

八木千代

沸騰点水ひとつずつ踊り出す

隠れんぼ男に消えぬ遊び癖

きつと逢える一本道と信じてる

八尾市 宮西弥生

階段を上る女が好きな風

後指なんか気にせぬまだ嫁かぬ

風だつてひとり言うる眼に青葉

掌を合わすところに迷いからさめぬ

シルバーシートでゆずられてからのお友達

倉敷市 稲田豊作

入れ知恵に私の知恵が追い出され

年寄りのすかたん鴉よおかしいか

マイペース遅れた分は長寿して

誠実に生きて演技のないお人

日に何度わからぬカタカナ語に出合い

親に似ぬ子だと子供が褒められる

竹原市 小島蘭幸

父入院護送列車が行くように

手術後の父よ生きてる生きてる

手術後の父おしやべりになっている

入院の父の明るさ見て帰る

結婚記念日ゴロリゴロリと暮れにけり

父の怒りへ妹思い姉思い

美祿市 安平次 弘道

後輩に抜かれてからの酒の量

先入感刑事は過去の傷にふれ

泣きばくろ易者気になるとこで止め

罪の重さに吃水線が深くなる

馬鹿受けのギャグに本音が秘めてある

停年後のブラン書き換えさす不況

松江市 舟木与根一

都市砂漠歌にならない鯉のぼり

アクションが減って人生パートII

生活の知恵がいっぱい四畳半

訥弁の上手い演技に引っ掛り

顔だけはそっくりの三代目がつぶし

あんたあんた姉さん女房忙しい

松江市 小林孤呂二

牡丹の驕りも余生は壺の花

酔うほどに糞虫羨むときもある

男同士の話のけじめ酒になり

穴熊の手筋を部長よく使い

変化球ばかりで課長補佐どまり

墨をする心を写し墨をする

吹田市 藤村 女

短い言葉に母と娘の絆みる

手短かに会議は終えて酒で締め

栄光の陰の塩壺母が抱く

すり鉢の底にやさしい母がいる

噂されると女は強くなる

島根県 西村早苗

肩書きをなくしてからの低い腰

枯らす気で買ったのでない植木鉢

いさかいも対話もなくて夜のひとり

花一輪だまされてやるだますなら

子供の日子なし夫婦も休みとる
七月の窓思い切り欠伸する

鳥取県 川崎秋女

どの風も負けぬ私は母の樹で
離婚歴女がもう向い風

風すこし出て来ましたネ老いふたり

せめて髪洗うあしたの記念日に

しあわせを掴みそこねた木瓜の花

人がひと裁いて地球たそがれる

浜田市 中川幸一

ロボットと違いの分かるくしやみする

嘘つきが天下ご免の四月バカ

毛が三本足らぬ猿よりまだ足らぬ

ハイミスの眼には男はバカばかり

百円も安いと車で買いいに出る

スコップの重さ知ったかアルバイト

和歌山市 浦野和子

唐招提寺

万緑新芭蕉の句碑の季を愛でん

御影堂ここに和上の息使い

青春の書に光る言葉が秘めてある

妻なりの意地あり走る風の中

柿若葉雨が沁み入る大和棟

生きて居てくれるだけでよい遠い雲

和歌山市 垂井千寿子

少年の拳が握っている光

同じ殻着ても中身の違い方
道草の炎は女の方が消す

ワイングラスの底に野心を隠してる

地球儀の日本定員はみ出そう

雨降りの日の計画も多過ぎて

富田林市 岩田美代

かも知れぬ予感に重い雲の嵩

足袋真っ白とても抹茶が恋しくて

やさしさにつつぱり過ぎた慌てよう

感受性強くて淋しいことばかり

色めがねかけて見直すものがあり

裏切りが五月の彩をさけている

藤井寺市 吉岡美房

狙撃手に赤く滴る苺盛る

オルグには首切りのないはしやぎよう

軍事費も福祉も俺の税金だ

ダイヤ光る手で尚何を祈るのか

溜息をポケットにつめて逢いに行く

そして夜心の声を聞いている

羽曳野市 榎本吐来

紅薔薇にうづく記憶を一つ持つ

隠しごと葉ずれの音が耳につき

悲しみを背負う落日大き過ぎ

世事一つ頭に入れる週刊誌

似たような世帯聞き耳立ててみる

茶柱を内助の知恵が愛でて出し

大阪市 本間満津子

伝染つてもいいよと見舞のひとが言う
バラ散るとき一緒に散りたいかすみ草
人生の地図描き変えてゆく出会い
ひとり芝居きのうと同じ筋書きで
粗大ゴミ木馬はやっぱり出せなくて
追いついてからの坂道急になり

新宮市 川上溪水

健康という宝持ち職が無い
惜しまれて辞めてもすぐに忘れられ
口実は何とでもなる酒を酌み
ギリギリの暮しにゴミがよく溜り
節くれた指に似合っている軍手
無礼講の日から課長の風あたり

宝塚市 傍島静馬

明窓浄机いつでも煩杖ついている
文盲の老母にたしなみ教えられ
雑用をまめにこなして見直され
すばしこい息子に惜しいとちりぐせ
快活に見えても芯が疲れてる
最初から苦手意識に負けている

兵庫県 辻文平

さよならの街角にある婦人科医
返り血を浴び未来図を引き直す
片減りの靴で社長にコネがある
五線譜をはみ出す母の春の詩

自画像の彩が日に日に淡くなる
正体は陽炎だった水子塚

守口市 羽原静歩

入れ歯ガタガタ思想もぐらついて
笑つても泣いても女にあるポーズ
宮参りこの子をいくさにやるものか
お料理に自信男が軽く見え
ハンカチの白さに続く五十年
蛸焼きの舌は煩惱忘れとり

米子市 青戸田鶴

打ちあけて少し十字架軽くする
流されて水も謀反を考える
夢にふと影絵の街に迷いこむ
立ちすくむ想いゴッホの絵にひかれ
ぬかるみをさけぬ男に陽が当り
水中花刹那の恋にまたゆれる

米子市 野坂なみ

人と人ふれあいの鈴小さく振る
弱虫へ殊更きつい風当り
勢いに乗れば家紋が欲を出す
豊かさへますます冷える回り椅子
赤飯の笑顔よ初心忘れずに
片言に絵本の犬も饒舌り出し

岸和田市 古野ひで

折角の春へ心電図狂い出し
五月晴れもう売声のよし簾

苦勞したなぞと決して言わぬ老母

歳月は波長のあわぬ友を変え

サラ金の恐さ知ってて借る事情

付和雷同その外にいる仕掛人

高知県 松岡三吉

大将になれとは言わぬ鯉のぼり

仲人のことばに劣等生はいず

猫の恋人間の恋月おぼろ

ついて来いついて行きます夫婦箸

ながい長い化粧が終るうれしい日

酌ぐ女が變つてからのうまい酒

奈良県 香川酔々

曼陀羅に見入る五月の女たち

二上のみどりの風に身を寄せて

爛春の日傘がまわる当麻道

かげろうに半眼閉じて辻仏

おべんちゃら麻薬のように効いてくる

倉敷市 野田素身郎

子供部屋十円玉をまた拾い

張り切った分だけ空回りに終り

登校の途中にボルノ映画館

テレビで紹介されて俗化するお山

思ひ出の道もとうとう舗装され

倉吉市 奥谷弘朗

一つだけの窓に平和な朝が明け

純情が朝のドラマに貰い泣き

女房に弱気になれと教えられ

指切りに弱い親父ともう見抜き

よく知恵の回る女房の低い鼻

出雲市 原独仙

一芸に秀れ他芸も並以上

ロボットが技術誇った腕笑う

月並な訓示の中のアタカ味

社長留守窓際ねむい五月の陽

補聴器がばやくポリウム選挙カー

鳥取市 小林由多香

性格の違い夫婦として合わす

共稼ぎ夫婦のレール錆びさせぬ

再婚の夫婦で同じ趣味に凝る

父ひとり反対家の風乾き

小回りのきかぬ男の堅い椅子

島根県 堀江正朗

差し向い記憶の違うもどかしさ

緑みどり緑が記憶かき回し

白杖は恐くないのか雀の子

トタン屋根暑そう雀の足の音

胃袋に叩かれそうで箸を置く

米子市 石垣花子

むつつりを引張って来た五十年

歯をみんな抜かれるための医者通い

前身をひたすらかくす紋白蝶

押す人の心知ってる車椅子

なぐさめの風にタンポポ乗らぬ意地

岸和田市

福浦勝晴

団欒が待つたそがれの歩道橋

サラ金の話を肴で飲む屋台

晩酌の当てからこねる天の邪鬼

妻一人知ってる損益計算書

母の日も母は無心を聞いてやり

大阪市

川口弘生

父親の右傾左傾は許される

憲法より論語に弱い父だった

傾いたままの平和もヤジロベ

その昔家族会議という保身

情には弱い男のわらし酒

大阪市

中川滋雀

自画自賛白紙のままにあるロマン

風薫る寧楽七堂は史に染まり

薪能くらしの糧には遠い席

男にはかけこみ寺が見当らず

サラリーの軽さを知らぬ定期券

大阪市

西森花村

注文が無くても歌うバスガイド

ブロンズは首無し美人のように立ち

土産物提げて買い出し行た話

ぬくぬくのマンションそれ者らしい影

ねずみ取り教師も仲間もひっかかり

大阪市

江城修史

母の日の妻に今年は嫁がいる
蓮の花心に咲かせ老いの坂

四季巡る素直に世相どうあろうと

弥陀拝むたのむ明日に今日の無事

だまされてだまされぬいて浮世かな

大阪市

天正千梢

生涯のテーマ愛の重み分かりかけ

無力な実戦へ理論だけ立派

法華経を杖に六十の坂のぼる

畳の上で泳ぎ覚えただけの知恵

花の終り淋しい雨が降り

鳥取県

鈴木村諷子

走馬燈昨日も今日も明日もまた

二千憶個の星の中なる亡母の星

竹の箸でつまんでこれがのどほとけ

やけ酒じやないと己れに言いきかせ

テレビドラマおしんを見て

ハモニカのきれいな音色に生きつづけ

伊丹市

檜谷寿馬

両親へ花束嘘のつきじまい

ここだけの話に飽いて来た天井

病院で春の話を聞いてくる

甲冑を飾りて五月尊かり

薄い目の煙が似合う火葬場

神だのもしない人だが手を合わせ

大阪市

河井庸佑

口と肚違う男と見抜かれる
捨てる神拾う神のある浮世
自信ある一手も先に読まれとり
聞かぬ子へ誰に似たのかと皮肉

藤井寺市

児島与呂志

長過ぎた平和に不沈空母浮く
生き残りだんだん追いつめられる兵長
酔うているつもり女の指遊ぶ
人が寄る噂をちよつとずつ持つて
おとなしい男の嘘は見抜かれる

下関市

国弘半休門

人生のカーブでレール踏み外し
ライターで焼き切る紐なら悔いはない
石橋を叩いて損をして渡る
緑十字のバッジを着けて世話がやけ
ピエロにはなりたくないが職がない

柳井市

弘津柳慶

苦勞まだ知らず背伸びをしたまんま
停年へ過去の歩みを振り返り
花時計綺麗に春の花が咲き
面映ゆく句集の出来を繰って見る
一と区切りつけて句集を発刊し

堺市

大道美乙女

花嫁の涙見つけたお立ち酒
月下美人一夜にいのちかけて咲く
白骨を見てる妖しい深海魚

花の恋今急がねば散りそうで
小骨まで抜いて育てた子がそむく

豊中市

安藤寿美子

香たいて看病疲れ泣き疲れ
終焉の昏お酒でしめしてあげ
いさぎよく焼けて白々父の骨
菊好きな父の柩を菊で埋め
まっすぐに香煙立って迷いなし

竹原市

森井菁居

都市砂漠逃れて過疎の草いきれ
滝に打たれると聞こえる亡父の私語
三年目の浮気聖書に裁かれる
冒険が好きサルビアの赤が好き
家計簿の誇り予備費が少しある

笠岡市

松本忠三

日和見が動き出してる山が見え
捨てられた犬が首輪をかけている
打合せ済みの答へ間を置いて
末席の意見憚り様ながら
三つ指をついて女が身構える

島根県

小砂白汀

多目的ダムにすくすくニシキゴイ
如意棒にハエも生きとし生きるもの
高压に耐える骨組深海魚
やんわりと打ちこみ反響たしかめる
一言へ一粒ふえるくすり漬け

大田市

藤田 軒太楼

気をつける目明きに欲しい白い杖
下心あって酌ぎさすたのみごと
屁理屈とはかり言えない一分の理
正直に言えば言ったで叱られる
感づいた気配に策を練り直し

松江市

柳 楽 鶴 丸

ヒボクラテスご存知ですかお医者様
一方で不道德の可能性持っている
ロッキード一億人が裁判官
ひらがなの言葉で話す定年前
ぐい呑みの中の美人が恐ろしい

松江市

恒 松 叮 紅

寺庭開放ゲートボールの笑い声
部屋に琴たてかけたまま婦人部長
のし袋代筆中味の知恵も貸し
断りの文句を探すインキ壺
畑の隅で矢車草のひとり言

神戸市

中 村 ゆきをを

知恵おくれ小犬の方がよくはしやぎ
欲しいものみんな手に入れ寂しさの
長雨やドストエフスキー読み返す
老母の恩想えば重し梅雨の入り
乗りかえてまたもや老人前に立ち

京都市

都 倉 求 芽

男みな阿呆に見せてコマーシヤル

埋もれ火を煽りたてたい人の口
ガタンガタン立派な立派な高架下
定年の吊橋はげしく揺れている
すし詰めをお召列車と呼ぶ通勤

京都市

松 川 杜 的

けなげにも金魚一匹冬を越し
旅はドラマ美智子妃殿下と乗り合わせ
食べある記マッブの店が見当らず
同じ花でも楢山へ散る桜
一の字一つ先生のように書けず

京都市

山 本 規不風

言い訳に藤むらさきが揺れている
男まさりの女の嫉妬はやさし過ぎ
懺悔する家出娘という茶房

中国の旅

上海のガーテンブリッジの霧晴れず
日中合唱 赤とんぼで別れ

仙台市

川 村 映 輝

嫁に手を引かれ余所目は倅せそう
布施の高に見合う法名つけられる
八十になっても美人へ振りかえる
飲みながら血圧にふれ座が白け
あまりにも大事にされて不満なり

平田市

久 家 代仕男

五月晴れ信じた顔の葱坊主
鉄骨の無い楼閣に住む汚職

盛衰の歴史刈りこむ築地松

田植機で植えても婦女の慰労会

ロボットをタフやと呆れ夜の火花

宇部市 平田実男

銀婚式を迎えて(二句)

喧嘩するたびに絆が太くなり

抜ききれぬ妻の白髪へ感謝の目

ジャイアンツ負けた新聞読み返す

通訳を通し物足りない絆

資産税隣が多い妻の愚痴

羽曳野市 塩満敏

みの虫が花の散るのを待っている

雑草も花の季節は花をつけ

万歩計つけて散歩に出たものの

連休の出入に猿も呆れはて

列島にうどんげの花きつと咲く

倉敷市 小幡里風

黄水仙活けて別れたひとを恋う

無造作に長い髪です少女A

下手に嘘ついて善人笑わない

うわずった声でライバル栄転す

繕りかけて浮気をつなぐ嫉糸

倉敷市 藤井春日

師匠言う己を知るも芸のうち

人生は積木遊びのようなもの

お疲れネと何気なく言う妻の愛

愚痴も言い労わり合うて老夫婦

四十女鏡の顔に気が滅入り

今治市 越智一水

夜桜へ行くに老妻化粧する

美しく石を見せるも春の雨

仲よしに相談をして嫁くと決め

耐え抜いていま美しき母なるか

ゲートボール友達出来ればうわさされ

松山市 谷真風

子の出来はみな中くらいありがたし

青信号友と忙しい別れする

セーノーと娘若さのパワー見せ

親父さんなどと息子が他人めき

押入の隅で寝ていた蝮酒

諫早市 原田明春

すぐ好きになるとは仲人無理を言う

お守だけ無事にゆれてる事故現場

女房には言えない土産の忘れ場所

金持たぬ俺にどうぞと自動ドア

ホステスとの内緒話は金がいり

香川県 岡田拳法

戦争はまっぴら恫喝あざ笑い

侵されて泣くのは社会党でない

権利だけうるさい自由途上国

校舎みな立派になって非行ふえ

道德の時間は盲腸なみである

奈良市 森田 カズエ

アンブルを老眼鏡で見るナース
四と九へ縁起をかつぐ姑がいる
希望的観測などと自己欺瞞
公園の美化へ子供の良い標語
奇蹟的ですねと医者が目が和み

岡山市 川端 柳子

サスペンス非凡な人生見せてくれ
雨だれや数え切れないエピソード
玉のれんゆれて一つの破局くる
あの山を越えた心のシャボン玉
淋しくて悲しくて笑顔みせました

岡山市 時末 一灯

騙されておこう昔の日がだぶり
頷いてくれる視線はあらぬ方
消印の鮮やかに見ゆ過去の罪
水っぽい義理の涙ですぐ乾き
梅雨晴れ間えくぼの消えぬ人といて

寝屋川市 宮尾 あいき

菜種畑負けてはならぬねぎ坊主
野に咲いて忘れな草は忘れられ
髭の子があんま母の日のプレゼント
親の脛かじるに髭がじやまになり
裏話五重の塔の軒下がる

寝屋川市 江口 度
宝石がないと貴方は死にますか

ぐるになる悲しいことばだなどと思う

土産物夫婦の溝はすぐ埋まる
若者ある日思い余りて駅に立つ
風はみどりで目札かわす散歩道

大阪市 黒田 真砂

レモン絞る寡婦に明日の夢がない
モーニングコーヒー今日倅せの旅に立つ
七色のあじさい彩増す庭の雨
目も耳も足も達者で三十年
あじさいに女のかげがすき通る

大阪市 西出 楓楽

躁の日に描いてしまった蛇の足
思秋期になれば漫画を描くつもり
朽ちたくはなくて好戦的にいる
熟年に薬味ばかりがききすぎる
味の素ふってもごまかしなどできぬ

大阪市 神夏磯 道子

憑きものが落ちたら若葉伸びている
茄子漬けの色へ妻にも燃えるもの
えんどう豆に会える幸せ四季巡る
毎日の祈り化粧かも知れぬ
子や夫につくす愛だけ残ってる

大阪市 大野 武太

六十路の道草胸を病んでみる
病名がはつきりしすぎ怖くなる
七月の真昼を病んだ体温計

当分は妻に預ける小商い
二階にも銀行のあるターミナル

大阪市 岡田 ふみ

良い季節夫も娘も旅に出る

娘ら夫婦コマージュのような旅支度

浪人に黄金週間縁がない

さりげなく全員死亡と告げるアナ

B面の女が脚光浴びてくる

大阪市 那須 鎮彦

鏡のように塗る左官のお酒好き

会いたくて月も駆け出すよい道

思いやり足らぬ明日は曇り空

山里を出ようとしない黒アゲハ

信じることは雪の白さより勝る

大阪市 藤田 頂留子

額の母はたきの下でにが笑い

五十からはかけ足になって行く月日

信号は赤つかの間の町しずか

車農工商通行人は地にもぐり

だんじりばやし亡兄にあえそな祭りの灯

大阪市 欄 蘭

給料日の朝は女房のけん制球

ヨーカンの甘さ引き立つ茶の渋さ

野良犬は遠出の出来る自由もち

餅食べる時は入歯を外しとき

散り急ぐ花を惜しんで居る宴

大阪市 柳原 静香
きこえぬがやさしい言葉待つ耳よ
障害手帳秘めて女の薄化粧
口にこそ出さぬが母の日の期待

善人の父を囲んで豆ごはん
公園墓地春に死にたいなと想い

山根 いつを

みやげもう食べぬ亡母にも土産買う

風向きを心安さの妻へむけ

恋の羽根やぶれて破れて芸に艶

爪までも親の形見とじつと見る

お豆腐屋に向かぬ娘の気が変わり

橋元 美恵

嫉妬する女に桜見せられぬ

頑張ったねと褒めて柩を見送った

棘だけが残っていますバラの愛

遠くまで来た海猫が鳴いている

風呂敷のように母さん持ち出され

北 勝美

眩しさを誰が買うのかゼロ七つ

赤い旗中流意識に邪魔をされ

年金がだけが頼りの生きざまよ

日本に住めるよろこび噛みしめる

せつかちと言われる老いの五分前

老妻の特技と言った針仕事
大阪市 長谷川 春蘭

勝てました泥と汗との男泣き
約束の日時に来ない或る私信
白い杖街の情けに救われて
酔う程に怒り上戸と泣き上戸

大阪市 横地雅風

幼女から呼び止められて缶のふた
仲人の恩切る三年お中元
ネクタイを取るのも忘れた子の笑顔
絵馬も買ひみくじも引いて神頼み
声のない声聞き市長選に勝ち

大阪市 鍛原千里

一本の白髪をライバル見逃さず
プライドを捨てろと五月の空が言う
愛越えた二人に初夏の風が吹く
寡婦だから晴れる明日を信じてる
幸うすき女が好きな花言葉

大阪市 杉本智慧子

実直な人がくずさぬ膝頭
新緑のトンネルに熱く燃えてくる
満開のバラ園で想う綺麗ごと
宣伝を鵜飲みしていたなと気付き
禅寺の掃除見事に行き届き

寝屋川市 柴田英壬子

くらわんか淀川下り
とれとれの天ぶら魚の名は知らず
年下の彼をとりこにした浴衣

じんわりと熟女の浴衣糸を吐く
あの時はあれで良かった自己弁護
てっせんの紫が好き老いの意地

寝屋川市 稲葉冬葉

子を産まぬ女に負けた臍人形
ご婦人のお話に内緒がまつわる
りぼん解くときめきがあり明日があり
素顔から逃げてばかりの愚直さ
ライバルでない影絵にも傷はある

東大阪市 斉藤三十四

一杯の酒が他人の幕はらう
友達他人でないと決めている
春の宵女の嬌声飾り花
花束は楽屋で無残むしられる
カラオケが生甲斐のようお爺ちゃん

東大阪市 竹中綾珠

それぞれの子が気を使う母の日よ
慰問袋で知り合った人が来てくれる
老夫婦不惑の子の事まだ心配
給料日の楽しさもない老いひとり
クラス会の名簿から又一人消す

東大阪市 崎山美子

骨組をかくす飾りがつけてある
カロリーが気になりだした更年期
コーヒーが生活のリズムととのえる
初心にはなかった挫折Uターン

ライバルのねたみの混じる祝辞うけ

岸和田市

植山武助

あの人が来たからこの人来る予感

子供等の企画にのつた旅三日

母親にちよつと話して娘は帰り

元怖い恩師が今の夫とか

人の気を汲み汲み世間狭う住み

岸和田市

福島せつ子

ひぎの猫のどを鳴らすと重くなる

ひとすじに生きて追い風向い風

日ごろから近所仲よくと気を配り

心はずめばお化粧も冴えて来る

散歩道陽を背に受ける道選ぶ

岸和田市

島崎富志子

夜の爪切れば叱つた祖母なりし

化粧してその淋しさをカバーする

決断をしても内心揺れる恋

太ってもやせても悩む女の性

音階を少しはずして母ご機嫌

岸和田市

原さよ子

燃えいずる若葉へ意欲湧いてくる

子等と住みこの倅せを羨まれ

車から見れば自転車邪魔に見え

子供の日親子で作る竹トンボ

ソフトボール家族が組んで日曜日

岸和田市

狭間希久志

サラ金の罟を避けよけ来た夫婦

憂さ晴らしたかが立飲みコップ酒

「義母さん」と嫁が差し出す塩加減

理屈つけ酒にしている酔っている

紙コップ覚悟してます使い捨て

岸和田市

芳地狸村

信楽の女狸にある嫉妬

水郷の舟に七輪持ち込まれ

葎切りが鳴くカラオケが唄う舟遊び

お布施にも思いがけない落し穴

台本のせりふ裏から聞こえてる

和歌山市

若宮武雄

不沈空母ここは瑞穂の国なるぞッ

人殺し以外に能のない兵器

照準の眼は爛々と獣めく

一条の光この本から貰う

流れ星ああ天国の落ちこぼれ

和歌山市

福本英子

親離れた子を手繰るもつれ糸

手をひいて手の冷たさよ母を見る

裏方を天分として皺の数

未練たらたら生きてる亡夫の七回忌

花散って今日からネジを捲きなおす

和歌山市

内芝登志代

いい母を持った誇りのカーネーション
フレッシユな気分漂う嫁がくる

ときめきの想い出もある墓洗う
埋立てへ貝の住み家が気にかかり
影法師忘れてた日の有頂天

和歌山市

松原寿子

芯までは炎になれぬいちごです
コンパクトあなたがいつも視野にいる
愛一途そんな日記を織りあげる
コヨリ一本ほどの絆よ夏銀河
さりげなく乳房へ触れる風は夏

和歌山市

坂部紀久子

ころんでも砂を掴んで孫の意地
連休は他人の話米を磨ぐ
母の日の母はあんまり好きでない
合部屋へ見舞客なく寝た素振り
私にはダイヤもガラスもおんなじに

和歌山市

堀端三男

老化した記憶の中にある戦火
旧友の前で肩書き伏せて置く
よく喋る女の本音聞きもらす
終幕を飾るバックの彩を選ぶ
喜びのおすそ分けなら遠慮せぬ

米子市

雑賀美世

ペランダで母子の毬を小さくつく
家中の明かりともして一人の夜
絵日記に母子の絆溢れてる
ぬかるみを潜って生きた父の靴

なんとなく年が気になる死亡欄

米子市

田中亜弥

けんめいに生きる女へ風の向き
紋付を着ると背筋が伸びて来る
人だから間違ひもあるプロポーズ
特選の絵がどうしてもわからない
辻の風つらい噂を乗せて来る

米子市

菅井とも子

一周忌絆深める同じ紋
老眼鏡買って明るい視野を追ひ
置手紙人の温みも残される
弱点に互いに触れず平和です
原爆の絵目にやきついて離れない

米子市

寺沢みど里

球根が約束通りの花をつけ
置き去りの毬の涙を月がみた
紙バッグから旅の本音がこぼれ出る
突然に隣から出る救急車
一宿の恩から続く季の便り

米子市

政岡日枝子

駅出れば今日のいくさの風に逢う
あたためた言葉をせかす発車ベル
踊り疲れた足を檜山までひきずる
宿の下駄仕事の鬼でない素足
約束の重さ知ってる夫婦箸

米子市

桑原伊都

トンネルをぬけて明るい風に会い
素朴さと自然が囲む分教場

郵便の来め日うつろな風が抜け

ころげ行く毬に迷いは見あたらず

葉桜へ吉野の哀史しずまれり

唐津市 仁部四郎

母さんの背に当てる手が熱い

子の影をどこまで包む母の影

一瞬の一言狙う父である

父親の義務で理論を考える

階段を曲ったところに父が立つ

唐津市 浜本義美

本好きに本が嫌いな子が育ち

親の夢背負うて重しランドセル

手の鳴る方へ従いてゆけない主義主張

先生が好きで学校欠かさない

訥弁とは知らぬ男の長喋り

唐津市 浜本久仁於

最高の顔で選挙の揭示板

娘の家出夢に電話の鳴った音

春さきになれば自信もつく歩行

蟬しぐれ廃校となる夏を鳴き

花吹雪貴様と俺の青春譜

唐津市 久保正敏

鋸を二つに分けてする離婚

ウェルテルの悩みに青春閉じ込める

給料の前借り女は貢いでる
金脈の男を女見逃さず

スボンサー次第で認められる芸

唐津市 田口虹汀

年輪が示す自信の坐り胼胝

怪我をしたお蔭大事にして呉れる

褒めるのに怪我の功名などと言ひ

金偏の脆き磁石の方を向く

胎教を信じ彌勒を拝む日々

西宮市 杉浦婦美子

夜の爪月より遠く母はいる

豆腐より崩れやすきは人ごころ

茶の間からシルクロードの旅に溶け

猪口受けて水に流した顔でいる

新築へ祖母のタンスが落ち着かぬ

西宮市 妹尾春江

雪の峰はるかに亡母が坐ります

離れてる次男の嫁を賞めて去ぬ

言うだけは言うて静かに妥協する

普段着で話せばなんでもない話

娘の会話彼女彼女は母のこと

西宮市 林はつ絵

幸せを守るくらしの汗流す

つぎつぎと胸あたためる地図もらう

野仏へお天道さま浮き彫りに

ありつたけの緑の中で童にかえる

日本晴れえんそく見てるねぎ坊主

和歌山市

細川稚代

見えてますテクニクなどもういらぬ
細い指からませ絆太くなり

帯きりり女のいくさまだつづく

啖呵切る惚れた弱みは見せられず

惚れぬいて今日は家裁の門に立ち

島根県

神原秀子

れんぎょうの真つ黄いよいよ雨に映え

連休に来る者もなくふたり酒

借景のみどりと新茶の香に酔える

たんぽぽの綿手へ托す春の思慕

あれ以来ブツと切れた糸電話

島根県

錦織文子

散り急ぐ花へほんぼりの独りごと

こみあげる涙は受話器置いてから

当選へ男涙の瞳を入れる

真実一路夫唱婦隨の旅なれば

い草の香りで満たす離れ部屋

倉吉市

渡辺独歩

青春を燃やす垣塙が小さ過ぎ

髪を梳く刻の流れをとめて梳く

ライバルへ糞を小包して送る

葦酒にも時に山門目をつむる

年上の女と出会う仮面劇

倉吉市

渡辺苦句

天に風あり平生のころろざし

旅いいなア寝釈迦と並んで語る

若い日のノートに鬼というわたし

戦争の恐さを話し合うも酒

黄色い声する若いグラウンドである

団体にとてもきれいな手話の人

首のない地蔵に哀れ花吹雪

窓際の椅子で世間が見えてくる

一人旅国鉄マンの手の温くさ

造花でも内助と趣味と二つあり

吾子抱くように箭を買うて行く

連休かそうかと定退うそぶきぬ

心中の相手が先立つ成駒屋

満開は下手なマイクへ散りいそぎ

傘さしてくれた善意を雨がくれ

晩春の何事もなく一人居る

馬鹿馬鹿と書いて可笑しくなりけり

かけがえない健康をつい忘れ

少し酔うたわたしの愚痴を猫がきく

木漏れ陽に小犬一途にたわむれる

鯉のぼり子無夫婦に会話なく

会者常離牡丹崩るる日の計報

鳥取県

山口美穂

林露杖

野中御前

仲 どんたく

点滴の滴に生きる鼓動読む
娘の胸の隆起が父の眼に眩し
宝くじ番号ピタリ組違い

鳥取県 森田 布堂

世論背景日照権にある強み

ミンナキテクレテアリガトウへ旗の波（天皇誕生日）

碑の文字の中で鳴いてる雨蛙

コマーシャル何かと便利なことをいう

手料理をほめぬ夫に爛をつけ

鳥取県 清水 一保

ロボットに訳は聞くまい人不信

郷土史を問えば地蔵の唯無言

人間に昆虫啖呵を切つて死に

大宇宙諸々の愛を今日も産む

薫風に清貧大きく息を吸い

兵庫県 藤後 実男

集団の中で無口が強くなり

秋風が吹けば決心するつもり

義理人情長屋に住んでゐる絆

積み上げた積木くずれる日の怖さ

秀才のお国訛りの回り椅子

兵庫県 河原 みのる

アセアンの旅九条の勉強し

重ね着が仇か椿の散り急ぎ

よっぱどの不運な蝌蚪が掬われて

女系三代時に花粉の価値でいる

生きのびたか縮まったんか今日も無事

兵庫県 大江 秋月

香水の匂う剣士に打ち込まれ

がら悪い顔もちらほらグリーン席

普段着の儘で桜が美しい

当らないことにしといて宝くじ

幸せは喧嘩の出来る妻が居り

兵庫県 中田 白李

大切にして夫婦茶碗はすぐ欠ける

果し状抱いて女の三面鏡

縄のれんくぐれば嘘のない話し

心からドラマに笑う妻がいる

怠け者だが雨だれに身構える

鳥取市 森田 熊生

善人になつて病院から帰り

まだ亡父へ郵便がくる選挙前

子の夢をこわすうわさはふせておく

同席の子供あやして旅終る

馬鹿になるコツを覚えてから強い

出雲市 石倉 芙佐子

真実は今でも知らず風車

友達という字で飾る十八歳

夕焼に見惚れていった兄嫁で

紫の帯だけ目立つ三回忌

おとばけが上手な独楽の回りよう

出雲市 園山 多賀子

裏切らぬ握手は泥手のままでする
身の程を知って糞虫殻を着る

老人になれぬ男のベレー帽
福耳が補聴器で聞きたい話

辞書にまだ夢を拡げる送り仮名

出雲市

板垣夢醉

冷房機家の湿気をしほり出す

夏真昼寺も神社も蟬ばかり

原爆忌蟻の長蛇が兵にみえ

五十九と書いて六十に抵抗し

襲われる鳥も立場で蛾を襲う

出雲市

吉岡きみえ

おなじ一生笑ってくらす腹もでき

アバタも笑くぼただ今進行中

カラスよお前をゆるそう七回忌

子供みな寄せて仏の灯がゆらぐ

耳鳴りがして遠い過去よみがえる

松江市

梅本登美也

鍵っ子のポケットにあるハーモニカ

〇しがまとめて洗う日曜日

ふと風にのった故郷の祭笛

いやなのがつつく誘う電話口

心配が折り重なって乳が出ぬ

松江市

竹内寿美子

鼻乾く夫婦に犬が思案する

トンネルに隠れたままの父の貨車

兄嫁が忘れられない昼の月
故郷の駅乾いた風が吹く
卵焼いつも大きい兄の皿

奈良県

村上春巳

ローカル線精一ぱいの扇風機

うとうとと五月の車内アナウンス

ビヤホール五月の星に風邪をひき

キャッシュカード妻から習う降し方

妻になら掲げる白旗かくし持つ

和泉市

西岡洛酔

共白髪同じ墓穴を掘る積り

平凡な夫婦でラッキーマン好き

雑草の夢は明日を生きること

今日も晴似た者夫婦旅続く

機関車の男走らねば走らねば

和泉市

岡井やすお

選挙人無視して決める投票日

家賃上げ預貯金利子の方は下げ

日の丸もふえた天皇誕生日

母の日は父子の榨台所

横綱はコマージュシャルでは休まない

枚方市

稲葉星斗

巨神戦九回裏でテレビ消え

かんしやくもついて当ったホームラン

出て見れば保険勧める女客

実力があって一番負けてやり

静閑さ古い船場も公休日

枚方市 栗林光夫

八尾市 飯田悦郎

コップ酒心の穴へ注ぎこみ

五百円玉ぼちぼち邪魔になつてくる

銀行の金をサラ金で借りてくる

限りある命に煩惱限りなく

グレシャムの法則窓際へ押しやられ

岡山市 花田たけ志

羽曳野市 佐野白水

祝杯に酔えぬあまたのお約束

内職は電卓使うほどでなし

魂胆がある水割りの水加減

水割りで稼ぐカラオケよく回り

ひとりには回りがさせぬお人柄

岡山市 荻野鮫虎狼

和歌山市 天満三千代

下向いたまま新緑は通り過ぎ

方言で話せる友が来る列車

焼酎を呑んで話が通じ出し

野良着から妻の匂いの美しい

サラ金のこんな優しい顔があり

岡山市 岩道博友

姫路市 大原葉香

失礼な話を随筆らしく書き

表情を隠す休日写経する

大いびきまだまだ長生きする積り

勇み足計算しない溝へ落ち

責め言葉自信の影が見え隠れ

シグナルの赤を気にせず恋の道
折角の美人むなしき不親切
信じたり泣いたり笑うて恋の詩
饒舌に限度があつて豆煮える
出直しをしたが時計が遅すぎる

守口市 野呂右近

黒梓に沈むと良い面ばかり浮き
冷遇も黙って受けて居る余生
ばあちゃんの昔話で寝ない孫
集金は皆追い返す妻の留守
気乗りせぬ話背中を耳にする

町田市 竹内紫 鏑

定年は秒読み将棋すんだよう
老体の胃を撮るシーソーすべり台
古希超ゆる筆は茫々半世紀
面白い人と葬儀の日も言われ
臓物の診察に技師カバン持つ

松原市 北野久子

口添えはつんばなりとも母の役
母の日の招待どれも油もの
オープン喜びレンジ開けてから
別居して気楽になったら病むだらう
荒れた手に指輪はめたりはずしたり
アルジェリアの郷愁さそう砂おどり
新緑の濃淡うるわし飯盛山
ライラック仄かに匂うなな梅雨
胎動がきびしく母を抗議する
病室の誰彼言葉言い交し

大東市 土岐トク子

五月晴れ無為の留守居もどかしく

羽咋市 三宅ろ亭

自己嫌悪ふらり流れの岸に立つ
恥かしいことも残して古日記
今更にと思うことあり便り来る
ツバメ減る日本に愛想つかしてか

貝塚市 行天千代

倒産の軒端へ今年もつばめ来る
雑草の一と雨ことの育ちよう
木の芽時わが血圧の不安定
母の日もやっぱり母は割烹着
家庭訪問先生の受返事

河内長野市 井上喜 醉

真心で触れる方言暖かい
つっぱりも衰え五十路の坂下る
七難八苦じつと耐えてる母の道
富士山も見えず誤算の五湖めぐり
定年へロボットになった日の焦り

橋本市 森脇善太

真実を一つ伏せとく玉手箱
これ以上いいわないとまでいい聞かせ
咳一つぐらいじや妻は動かない
ほどほどの味を青年氣にいらぬ
がまんを積んで涙腺枯れている

浜田市 佐々木 裕

意気込んで妻が出掛けた主婦の会
皮肉まで言われる程に生きて来て

だまし合い暗黙のうち金送る
心もち人生背を曲げて生き
化粧する間はだまって居てと言う

高知県

赤川菊野

笑つても泣いても一人長い道
自惚れが階段一つふみはずし
想い出を追つて心へ点火する
文明が島の歴史を変えてゆき
作られた笑顔見飽きたシャンデリア

檀原市

岩井本蔭棒

無罪無罪検察は口開けたまま
無職でも玄関に靴光らせる
善意まで素直にとれぬほどねじれ
男から見ればたわいのない強さ
悪妻も居らねば淋しい台所

綾瀬市

大山と金

こうなればザック balan にものが言え
後味の悪い嘘なぞつくまいぞ
家の中もめるはつまらぬ事ばかり
嘘言ったこと真実となるおそろしさ
納得のゆくまで一節読みかえし

海南市

牛尾緑良

無愛想な朝にくらべて都会の夜
診断書まだまだ望みありそう
モーニング妻の眠りはさまたげぬ

朝を出るときに男の顔になる
白黒の写真の愛をまだ燃やす

桜井市

河合茂雄

恍惚という逃げ道が老いにある
怠けたら冬越す蟻に糧がない
孝養の目盛は金についてない
正直が馬鹿を見た日の湯ざめする
天命の一日伸びる欲を持ち

尼崎市

奥山美智子

喝采の裏で動いている謀叛
アイドルの歌手は驚くほど稼ぐ
割り切つて話せば心ひろくなる
他人だと言われてからの風当たり
母となり夜中に覚めるくせがつき

吹田市

西川景子

あるショックこわれてしまった血圧計
深呼吸を取り直す梅雨時間
皆一理あるから話もつれ出し
残雪の山にひびくや木挽き唄
少し言い過ぎて採血針迷う

交野市

山本テルミ

散りぎわをきれいに見せて桜散る
バイバイとだけ外孫あつけない
孫の手をかたく握つて交叉点
おきばりやす肩にうれしい京言葉

春こたつ話のくどい老い二人

島根県

木村はじめ

植樹祭近く舗装もやり直し
負け知らぬ男も弱い妻があり

中高生自他の命を軽んじる

加賀市

細呂木魯木

行革はどこ吹く風か天下り

神仏の動員願う破目になり

難病は屋上に立ったが後髪

先輩に恵まれ緊張はぐれてる

理想像だけに終つて齢を取り

弥次馬に混じれば本性さらけ出し

唐津市

子との親に積木くずしの話題ふえ

貯えも借金もなし草に寝る

夕映えが家へ帰れの色になる

生きざまの汚れ流して川よどみ

汗の日々遅れはじめた掛時計

衣食足り心に足らぬものがあり

摘み草で生命つないだ過去もあり

遍路路をお遍路でない旅の人

離婚話もめてる庭に咲く桜

興信所撮った写真でもめにもめ

高槻市

田崎素秋

紫陽花の性持つ女に惑わされ

大阪市

中西兼治郎

七十の妻に妬かれて嬉しかり

別れ行く男と女の交叉点

味のある言葉が妥協取り戻し

飛ぶ夢を抱いて海ねこ巣に戻り

先輩へ若さがずばり言つてのけ

一言のいや味洩らして性消えぬ

むかしの友達に出逢う通り雨

密談の額寄せ合うて汗くさし

七光りの甘え世間に疎くいる

補聴器の一瞬蛙の声と聞き

新築の庁舎市民の誇りあり

浮き沈みサラ金貸す人借りる人

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

島根県

大森孝華

大阪市

中西兼治郎

木塚素石

唐津市

岡山県

直原七面山

唐津市

木塚素石

石

唐津市

七十の妻に妬かれて嬉しかり

汗の日々遅れはじめた掛時計

摘み草で生命つないだ過去もあり

遍路路をお遍路でない旅の人

離婚話もめてる庭に咲く桜

興信所撮った写真でもめにもめ

高槻市

田崎素秋

先輩へ若さがずばり言つてのけ

一言のいや味洩らして性消えぬ

むかしの友達に出逢う通り雨

密談の額寄せ合うて汗くさし

七光りの甘え世間に疎くいる

補聴器の一瞬蛙の声と聞き

新築の庁舎市民の誇りあり

浮き沈みサラ金貸す人借りる人

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

七尾市

松高秀峰

げんげ田に母子が作る髪飾り

朝毎にドラマのおしんに拭く涙

岸和田市

清野こう

おしん見るテレビへ家族ひざ揃え
夜は雨予報の通り雨の音

西宮市

野呂 鶴汀

晩年を花蘭にかけている命

賽銭に一円玉は音もせず

断崖の松は日舞の姿なり

これ以上忘れる事もない茗荷

富田林市

中村 優

まだ貴方は倅でずっと社会記事

タッチした妻の笑顔でまるく解け

兎も角もスタートで出すVサイン

宮仕えときには謀反したい酒

豊中市

田中正坊

妻の遺影定期に入れて胸に抱く

人の世の運命は悲し会者定離

礼服にデジタル時計は合わないぞ

芽を吹いてしげる若葉に栄あれ（祝婚吟）

島根県

山根 峰雪

親戚の墓のさびれが気にかかり

改憲を叫ぶ明治の父達者

当選を頼むお布施にご仏前

今日も又非行殺人詐欺の記事

岡山市

井上 柳五郎

王手王手かさにかかって妻の攻め

好きな人避け無色へ愛想まき

若いとは言わずホープと輪をぬくめ
ボスの椅子孤独告げてるきしむ音

島根県

松本文子

花咲いた散ったでニュース忙しすぎ

まだ若いと思う時ミニをはく

四角の部屋にいるから心尖り出す

雑音として処理されるだけのこと

八尾市

山下 みつる

同情の灯を差しむけて弾を受け

走ってる青年の顔明日へむき

友が来て夫婦喧嘩を中止する

時刻表参考ですとバス遅れ

岡山市

行吉 照路

お似合いの夫婦でんでに貝拾う

独楽回し加減乗除の詩歌う

公約は道路に税金流しこみ

夫婦愛入歯でかめる料理盛り

岸和田市

吉水 照江

おしん見て自分の過去の再映か

後援会もめにもめたが当選し

いっぱい酒で親子の溝が解け

奈良県

宮川 古都路

彼一人九十九人はよその人

ぽっくり寺肌身の物に願かける

シヨツプ爺男が払う夫婦連れ

自選集

菊沢小松園

兵の墓洗うビルマの雨季憶う

山内静水

地獄にも何ぞあつたか笑い声
天下取る夢を忘れて病みつけ
許された通りにやって許される
指からませておいて金のいる話
相手次第で変る言い訳

大矢十郎

幸せでした玩具にされたころ
ご期待を裏切り熱はつづいてます
ペンを研ぐ老嫗に夢二生きつづけ
糸切歯おんなに還る小繕い
じつと掌を見るやつとふたりになれました

藤井明朗

赤を着る男へ女何を着る
落ちる事もある飛行機がよく落ちる
言葉慎めと唇へ出物
結納へ覚悟は違ふ父と母
横綱はいなくても良し相撲好き

野村太茂津

大いなる夢健康と喜寿米寿
あきらめているのに過去の夢が追う
待つことのむなしさおんなひとり住む
ときどきは孫のくらしを見て廻る
古稀からは歳をとらない化粧する

水粉千翁

老化老化老化会場の私語姦しい
理屈抜きで六人目の孫抱く歓喜
おだやかな約束絆を匂わせる
賽を振る思い回転椅子軌む

隙間洩る陽はわれわれのものの手術室
ここからを誰と語らん手術台
も一人の私が騒ぐ手術台

組の厚さを知った手術台
手術台生きねばならぬ冷えを知る

金井文秋

妻の死後

独りだけの布団を敷いて部屋広し
食べることから生活のリズム変りだす
おそなえは私のために貰うよう
親切でくれるお菜がまたダブリ
妻の分を長生きするぞたばこ断ち

市場没食子

八重満開年増女の風情に似
もう歳で白髪染めるもうるそなり
花街でまあまあぐれず子は育ち
石段を数えつ上へ歩をはこび
灸の痕妓も持病ある嘆き

新岡回天子

もう死ぬか娑婆に縁あり生き返り
窮極に來れば遺産相続考えず
救急車乗ったとこまで覚えてい
死んだことにして選者の候補続々と
悪い事の主謀まじめな顔を持ち

月原宵明

消火器が塵にまみれている平和

袖看板サラ金の名が美しい

二人来てひとり去ってゆくベンチ
逢うて来た犬正体もなく眠り
消してゆくうちに消ゴム黒に染む

本田恵二朗

ロマンらしき何ものもなく喜寿迎え
五臓六腑省略できぬものばかり
食足りた猫爪研ぎを忘ればはて
欠点の無いのが玉に傷である
鶴でない一と声だれも聞かぬふり

黒川紫香

サラ金に紙風船も疲れきる
好きだから旅の便りを送つとく
学生の鉦が転ぶ歩道橋
ライバルが憎くてならぬAランチ
子守唄などは知らない若いママ

正本水客

たんぼぼの綿毛きり雨聞いている
山三ツ葉おしたしの香に詩が生れ
トースターのように中年とび出せず
血の気まだ多く噂が従ってくる
葉げいとう一日雨が降りやまぬ

若柳潮花

母の忌に母に手向ける花を切る
ふる里は信号の付く町になり
足の爪女は背なを向けて切り
放流の稚鮎が嬉々と川登る
初舞台自分の顔に惚れている

工藤甲吉

首相参拝英霊の苦笑い

コイノボリ泳ぐや核の傘の下
一票を呉れてやるほど甘くなし
吉良邸の如し隣の御中元
人一人助けてやれぬ我と知る

河村日満

やつと歯が治ればつぎは眼の手術
札状の端で注意がすこしある
傘持つて片手拝みでおくる棺
どん底にいても女の平和主義
柳誌手に辞書を繰る日が多くなる

尼緑之助

葉桜の風に毛虫は身構える
敢て散る木の葉は春の衣替え
五月晴汗に季感をあびせられ
かげひいて水子地藏に今朝も花
反戦の裏で育てる核兵器

尼緑之助句集刊行・喜寿・句碑建立

10周年記念

川柳大会参加と山陰の旅

《三泊四日(車中一泊)》

■日程

9月23日(祝) 大阪(ナンバ球場) 22時30分発(テラックスバス) ↓ 山口へ
24日(土) 山口6時 ↓ 津和野散策 ↓ 益田(昼食) ↓ 温泉
津14・35 ↓ 出雲15・50 ↓ 玉造温泉泊
25日(日) 玉造温泉9時発 ↓ 句会出席 ↓ 皆生温泉泊
26日(月) 皆生温泉9時発 ↓ 大山寺 ↓ 蒜山高原(昼食)
↓ 大阪ナンバ17・50着
■費用 約五万円

★30名で打切らせて頂きます。申込みはお早目に

(締切8月末日)

窓口 || 板尾岳人・高杉鬼遊

★川柳大会の兼題・選者その他詳細は逐次発表致します。

川柳塔社

川柳太平記 (62)

川柳の群像

近藤 飴ン坊

東野 大八

本名福太郎。別号京魚。明治十年八月六日東京日本橋に生る。生家が老舗の商家で暮らし向きがいいところから食通で名を売り、その雑文で各新聞社に顔を知られ、川柳に出会うとすぐさま川柳関連のものを書きとばし剣花坊に招じられ、柳樽寺の大幹部となる。

「柳樽寺本山は神田甲賀町に陣を構え、井上剣花坊大和尚松子を揮い、部下を操縦する武者ぶりは天晴れ天下を三分し、その二分を領する概あり、これが幕下に飴ン坊、角恋坊はじめ文象、笑寛坊等多士済々……」(明治39年1月18日付国民新聞「昨今の川柳壇」)

とあるように柳樽寺創立時から飴ン坊、角恋坊は剣門の双壁とうたわれた。

飴ン坊が剣花坊との出会いは、剣花坊が日

本新聞に柳壇を開設した明治36年7月3日の投書からで、彼が応募の第一号だった。柳号を京魚としたのだが、剣花坊が飴ン坊とつけた。その故事来歴は不明だが、とにかく柳樽寺名物の「坊」ずくしの柳号の口あけこそ京魚改めの飴ン坊だった。

日本新聞柳壇の入選句は

――泣いているなかに位牌の子が笑い

で、これは剣花坊編「今人作家評」に収められているが、飴ン坊のこれが処女作だった。

明治38年11月の剣花坊主宰の「川柳」誌創刊号に、飴ン坊は「当世文士気質」を書き、その文学青年ぶりを披露する傍ら「川柳入門」「一句一講」「新柳樽篇」などを一挙に書きと

ばしたが、これが川柳に手を初めわずか三年

目というのだから、けだし相当なものである。ちなみに川上三太郎の柳樽寺門初登場は、明治40年の「川柳」誌の「かとかどで言葉を渡す米屋町」が初入選作品だった。

柳樽寺門に籍をおいて十年目の大正4年5月、毎日電報新聞柳壇選者となっていた飴ン坊は「寸句」と川柳を改称し、その機関誌として「アメンボ」を発刊し寸句社を興し、やがて大正13年末に「寸句春秋」と改題したが、これに刺戟されてか、角恋坊もこの頃に草詩堂を興し「草詩」を唱えた。

大正から昭和にかけて、川柳誌の全国的乱立は、川柳も新時代向きの軽文学として、伝統の狂句臭から脱皮しようと、狂句や川柳の改称運動が一種の流行となっていた。その胎動は、久良伎の「新風俗詩」幻怪坊の「短詩」を口火に、飴ン坊の「寸句」紫痴郎の「短句」禿烏の「時代詩」煙之助の「一行詩」路郎・日車の「新短歌」角恋坊の「草詩」夜叉郎の「川柳詩」六文銭の「行詩」そして昭和が軍国主義に移行した頃の「風詩」「俳詩」へと新短詩型確立運動が展開された。こうした先人達の試行錯誤のなかに、新興川柳の華麗な火花が打ち上げられていくのである。

余談はさておき、飴ン坊の寸句運動だが

「寸句とは寸鉄人刺の一・寸・拝借であり、草詩は古今三木三鳥伝の受けうり、風詩に至っては諷詩の裏がえし……」

と久良伎が「三味線草」で皮肉っている。

しかし大正末年に、鉛ン坊が選者をしていた東京毎々が寸句を敬遠したのを機に、海野夢一仏に選者の座を譲り、寸句運動の幕を下ろした。そのあと寸句を新川柳と名題を替え、昭和世代の開幕と同時に「新川柳女性一万句」を出し、続いて「新川柳分類一万句」を刊行した。

川柳界にとって一万句集は昭和二年に三太郎編のものが出ているが、歳時記をとり入れた川柳一万句集は鉛ン坊が初めてで、彼生涯にとっての大事業だった。

「近藤鉛ン坊編新川柳分類一万句」(磯部甲陽堂刊・価一円五十銭)は、昭和四年五月の発行で、B6判横綴り、約五百頁の大冊。巻頭には「川柳の作り方」序にかえて「と傍書し、鉛ン坊五ページ、水府四ページのいずれも初心者向けの問答形式のものがある。

内容は四季の歳時を六篇に分け、人事・動物・植物・飲食・軍事・学事の六篇を加え十二篇の構成で、短くて二、三行から長くて四、五十行の諸事解説文が凸版、写真版でふんだ

んにとり入れられているという往時としては稀にみる川柳歳時記である。

昭和38年10月に発行をみた「番傘川柳一万句集」のアイデアは、鉛ン坊に協力した水府の体験がものをいっていることは想像に難くない。ともあれ鉛ン坊の類題別一万句集は、わが川柳界で銘記すべき初の大事業であった。

鉛ン坊は昭和八年二月十二日に死去した。享年五十六。福寿院川柳京魚居士。この法名は西島〇丸がつけたもので、墓は東京四谷西念寺。つまり川柳人〇丸が住職をつとめる寺である。葬儀は二月十九日に行われ東京、大阪その他各地から馳せつけた川柳人三百人を越す盛儀で、このあと大阪の番傘、神戸のふあつすと、信州上田の六文銭など各社が「鉛ン坊を偲ぶ夕」を催している。

「句では三太郎、選は剣花坊、披露は鉛ン坊で、鉛さんの披露ぶりをレコードに吹き込んでおきたかった」(磯部天邪鬼)

「鉛さんは「先生」といわれるとプライと横を向くほどの「先生らしい」で、はるかの後輩の私が思い切つて「鉛さん」とよぶと大ニコニコだった。歯が抜けてたてじわのある木彫の面のようなこの人の顔は、私の死んだ親父にそっくりだった」(田中美女)

「番傘の「鉛ン坊をしのぶ会」は三月九日大阪で開かれたが、これには百樹、当百、東魚、緑天など百数十名が参加し、それぞれに故人を語ったが、水府が鉛ン坊が最後の句といわれる「猫のお椀を人に話せず」を以てて声涙ともにくだる追憶談は当夜の圧巻だった。(木村小太郎)

「鉛さんは支那服が好きで、ひょうひょうとどこへでもこれを着て会合に現れた。それで和食とは似合わぬ、天津料理にしようかとかからったもんだ。気楽を画にかいたようなお人だ」(森東魚)

といった各川柳誌上における追悼文で賑っていた。鉛ン坊の作品をつけておこう。

「無事な日であれと朝茶にかしこまり

「蛙だけ酌婦へ故郷と同じ声

「二階借屋根のトタンが暑恋

鉛ン坊の企図した寸句は、絵画というクロッキーで軽妙な人間スケッチ調を指すらしい。

★次回は吉川雉子郎

俳風柳多留廿六篇研究 (十二丁)

石田 晋一・南 得二・小野 真孝
 本多 正範・石田 成佳・大屋 六郎
 八木 敬一・鈴木 黄・多田 光

故岡田 甫

181 女郎の手を引きやつたらに曲り

石田 晋『川柳吉原志』遊女脱廓の項に入る句。そのままで句解は必要ないようにも思われるが、女郎の手を引くいい男はどこを曲っているのか。廓内で四郎兵衛に見つからぬようににも思えるし、追手に見つからぬように外を走っているようにも思われる。吉原田圃など適当かもしれない。

泥足の傾城江戸の町をきき

安九智 4

大門と田圃へ追人五六人

傍二・3

しかし、どこと限定する必要もなく、ただ見つからぬように無闇矢鱈、必死に逃けている

様をよんだものとするのがよいとも思われる。
 南 賛。追人の目を逃がれるために、街の角々でやつたらに曲る。勿論廓外。

かけ落のひるはやつべしまがる也

一四・6

石田 成『南氏説賛』柳句で脱廓といえは、お齒黒どぶを越えるか大門から男装などして遊客にまぎれ四郎兵衛の目をかすめて抜けるかのどちらかであり、馴染が手を引いていることからして廓外と思います。

多田 賛。

爰をよく越してにげたとあやめかり

岡田 賛。

182 引き出しはスウイ〜と何もなし

石田 晋『引出は遊女部屋にある空竈竈。』「スウイ〜」と非常に軽くうごくという表現が味噌。

間夫くるひ身ハ空蟬のからだんす

二一八・13

多田 賛。

岡田 同。

183 黒犬をきやんといわせて四ツ手かけ

石田 晋『先行類句として

しんのやみわんといはせて四ツ手駆け

一〇・34

がある。闇の夜を四ツ手駕籠がとばす。黒犬など見えないからけられ、踏まれるというのである。とばしているのは土手八丁か。

南〓賛。

飛んで行四手の跡できやあんく

傍三・13

多田〓賛。

岡田〓暗闇の黒犬。但し土手などでなく町の中。

184 たった十五両でおすとあとけなさ

石田晋〓「おす」は廓言葉、補助動詞で「ございます」の意。あとけなさは、

あとけない中にかぶろのあとけなさ

桜鯛二

の例から考えて、遊女をさすと思われる。遊女がいつも簡単に大金の無心をしている姿で「あとけなさ」に客があきれかえっている姿が見られる。ところで、十五両という数字に意味があるのか。

十五両十三両と二度のどら

安四亀一

この句は月見を両で表現したもののだが、本句にもその気味があるのか。単に大金の例とし

て、十五両はあげられているのか。

本多〓十五両が十五夜の暗示ととれなくはないが、礎稿例句「十五両十三両と二度のどら」と比べて、本句の十五両は即十五夜と決めるには弱いと思う。

八木〓この時代の句は、十五両↓八月十五日ととってよいと思う。

鈴木〓八月十五日の中秋の名月の吉原での行事でしよう。

十五点十三点と息子取り

頁一・10

多田〓同。

岡田〓同。

185 しほふきや天狗水茶やにらんでる

石田晋〓浅草二十軒茶屋の前にはおもちゃやがあった。その店先から、潮吹(ひよっこ)の面や天狗の面が、水茶屋の乱れた状態をにらんでいるというのである。

石田成〓浅黄裏の醜態をにらんでいる、としたいが如何でしょうか。

多田〓賛。

岡田〓同。但、浅黄裏が多かったでしょうが、それと限る必要はない。

186 たばこにしようぜと根津の文を出し

石田晋〓根津は岡場所の一で、大工等の職人

客が多い。そこで作業場で職人が休憩時に、その根津の遊女の文を読むというのである。

休憩時は煙草にするとという表現があり、まな板をたばこの時にけづらせる

三・2

などの例もそれである。文の字は金釘流の悪筆。

根津のふみもちろんの事釘の折れ

一三・22

しかし、そんな手紙でも、

かな釘の文に身を打つ根津の客

明五智4

となる。

南〓賛。仕事もおちおち手につかず。

屋根の矢を目あてに根津の文使

明五信5

多田〓賛。

かぶら矢を目当に根津の文使

一四三・34

は棟上の目。明五信5と同巧。

岡田〓棟上の目なら酔ってるし、お祝儀も出るであらう。それを狙って……。

水煙抄

黒川紫香選

尼崎市 西村 かすみ

アベックで見る星空に設計図
共稼ぎせめて夜風の窓明ける
つい昼寝風が真をくっている
女一人素顔に戻る夜の鍵
海の底海女は秘密の場所を持ち

熊本県 大川 幸子

聞き飽いた文句にころりだまされる
旧友がトラブルの種置いてゆく
セツトした髪へ心も浮いてくる
飛躍など出来ない夫のそれでいい
欠点を認め合ってる夫婦愛

尼崎市 春城 年代

着飾ってほんねの吐けぬ場所にいる
食卓に花など飾ったことがない
お寺から真っ先に来た花だより
開封をためらうわけが過去にある
根気よい方だったかと宵寝する

八尾市 高杉 千歩

それからの話は聞かぬ虹の橋
内緒話が聞こえて玉子が剥けませぬ
背伸びした暮し世間を騒がせる
キャンパスにころがす苺二つ三つ
梅雨最中画帳の彩に蘇生する

唐津市 浜本 ちよ

七人の敵より恐いわが心
春うらら老醜の爪伸び続け
エブロンを離さぬ嫁できれいい好き
これ記念あれも記念と溜めている
わが家のルーツ過去帖でかんたんに

西宮市 紀市 郁栄

帽子斜めに有利な位置を占めている
お祭りがくると亡くした子を憶う
甘口の酒なら少しつきあえる
妻に感謝して死ぬときがきつとくる
晴れやかな宴に黒い罌がある

富田林市 藤田 泰子

父米寿目深に被る中折帽

待たされて錆が出て来た小待針

無い袖を上手に振っている内助

指名手配の男は髭を剃っていた

遠まわりするのが好きなお父さん

尼崎市

角野かず子

会計報告不思議に帳尻合っている

さよならも言わずに海に消えた人

つぶやいた声をカラスにさらわれる

夫婦とも元気で無口になつてくる

ノルマだけ減っていつてる父の靴

高知県

山崎広風

適量を超えて仮面がずり落ちる

指切りの好きな少女で嘘がない

切り札の実家を妻がちらつかせ

不発弾捨てに真夏の海へ行く

退社ベルいつものリズム取り戻す

尼崎市

田中晴子

踏絵から身の上話をせぬ女

落魄の昔話をききながす

歩かねば地球の自転に追いつけぬ

かりそめの咳に疲れをふとおぼえ

証文の余白に嘘が押してある

西宮市

藤村宏子

山椒の実甘いささやきなら聞かぬ

登山電車山菜の香も乗ってくる

変身へとまどいながら赤を着る

やすらぎを忘れた棚の綿ぼこり
ひきどきをわきま茶碗洗つてる

熊本市

有働芳仙

彗星を探せば恋がしらけます

海苔を焼く位の嫉妬ようやけず

母子家庭ママに男がふと匂い

翔ぶ女降りる所に待つ男

毒舌の余韻が残るデスマスク

藤井寺市

前山とみえ

天皇の靴は平らに減ると聞く

辞書にないカタカナ言葉もてあまし

国中の旧街道を本で旅

アクティ大阪迷子の数も高く上げ

たまに遠く散りたくないか落ち椿

看護婦の白衣を脱げばジャズが好き

東江市

小山悠泉

こつこつと積木夫婦の城が出来

亡き母を想い出させるおぼろ月

ライバルに味方に欲しい奴が居る

親替り肩の荷重いモーニング

名古屋

越村枯梢

酔うほどにどいつもこいつも唯の人

虚虚実実今日も修羅場にいる男

似すぎてゐるわが子の寝顔にくすぐられ

片減りの靴を嗤うか街の灯よ

松原市

本多洋子

閑なときかける電話がみんな留守

長電話老後の話までして

誰も振り向かぬタンポポのひとり言

紙飛行機想う人まで届かない

諫早市

江副二牛

産声をしかと受け止め父となる

エプロンの白さ女に嘘がない

抱いてきた夢は都会の灯に砕け

老夫婦パントマイムで用が足り

尼崎市

丹下玉子

手回しの上手な人に先越され

淋しさに窓べから朧月を見る

バスツアー嫁のプランに乗ってゆく

仏より桜見に行く常照寺

京都市

松川芳子

母の日は杖にも感謝しておこう

母の日も父の日もない老夫婦

自信過剰老いの一徹もてあます

寡婦天国旅行観劇エトセトラ

寝屋川市

平松かすみ

体重の違う姉妹の食歩き

夜店から裸足で帰る鼻緒ずれ

男なら工事現場で高野

煩いと怒鳴れば遠慮するカエル

高槻市

竹内花代子

春を病む人あり病棟窓を開け

悪筆をさほど気にせぬ歳になり

父の膝子が奪い合う日曜日

缶ビール女一人へ泡をたて

羽曳野市

麻野幽玄

お向いの島から昼を告げる鐘

ガレージの広さに合す新車選る

嫁の荷を分断させる赤信号

隣席の美女が赤旗読み始め

和歌山市

中尾まゆみ

ペン先からつなく言葉が満ちてくる

ボーイフレンドの噂とび交う更衣室

遅い灯へ秒針かすかに高くなる

舞い降りて天女に踊る浜がない

西宮市

奥田みつ子

ネクタイに合わせて背広誂える

耳朶に女の謀反ほの紅く

午後三時セーラー服に囲まれる

倦怠期障子に映る蘭の影

尼崎市

伊藤春子

同感の声に強気の意志表示

情ある人で多くは話さない

飾り棚余生の部屋へ四季の風

気やすさの多弁のお茶に悔い残る

尼崎市

関口幸子

いい話少うしゆれるイヤリング

流行り髪インコみたいな色に染め

お隣の荷物あずかり動かれず
悪友が茶菓子を持って来いと言う

尼崎市

吉永伊三郎

好き勝手にさせてくれる若い妻

平行線でも離れずに床につく

女房の尻から鼻唄が洩れました

隣から若い夫婦の風がくる

藤井寺市

赤木和子

したいようにするのに意見求められ

七歳と五分の勝負の口喧嘩

弱気強気私らしさの裏表

何がなんだか握手の次はキスをされ

岐阜市

市川鱈魚

庭師半日思い通りに松をせめ

おだやかな訣れ少うし渋いお茶

妻に面とられてからの悪あがき

玉虫彩で逃げ足速き男たち

島根県

松本はるみ

ふる里に出逢うたようなおきな草

自販機がいばりくさって寺の前

一枚のアルミ貨にもあるうら表

姑の眼を氣にした頃の紅の彩

鳥取県

中原諷人

湯気の中かえしたくない人と居る

紙バッグ非行少女の貌でなし

断水の蛇口おんなは眠くなり

夜光虫妻の寢息で句を漁る

西宮市

西口いわゑ

好い事があって寝るのが惜しい夜

宴会が済めば聞える波の音

湯上りの夜は鏡へポーズとる

旅の宿酔いつぶれてもいい安堵

豊中市

満仲きく子

平凡なことの幸せ新茶汲む

母の日のわたしのなかに亡母がいる

葱坊主思い思いの詩をうたう

ひとり旅ドン・キホーテになってみる

熊本市

宇野昭代

屁理屈を通したくなる日の疲れ

反骨に徹し出世に遠くいる

ふる里によく似た駅に降りてみる

十二文字回わる時計のマイペース

高知県

山下登舟

藤棚の隙間に泳ぐ鯉轢

一輪の花挿してあり無人駅

それなりに悪知恵も付き子は巢立ち

糸柳風の動きを見つめつつ

大阪市

萩谷まさ

生徒一人僻地を飾る桃の花

雑念を捨てて一気に墨の跡

潤いの心に乾きがフト覗く

花愛す宏らぎの背に春の雨

大阪市 今西静子

席ゆずる好意無にする老い頑固
逃がっている恋とも知らず赤電話
花嫁はすごい才女という噂
繁昌の店ちぐはぐな昼を食べ

吹田市 井上照子

浅緑深緑着た初夏の山
夫婦かな二羽の雀がおじぎする
シャネル五番香残して女行く
鏡にはサングラスだけ濃く映り

西条市 片上明水

夢よりも本物の父より強し
笑い声聞かないままで受話器置く
逆風へ唸りを立てる風車
賽銭の音たしかめて掌を合す

尼崎市 矢萩貞子

花の季カメラに納め今日も暮れ
五階から声高に呼ぶランドセル
メーデーを主婦マンションから眺め
お流儀を活けて優しい顔になる

尼崎市 山田保蔵

睡眠薬もらっただけでよく眠り
劇場の横で待たされ雨にあう
片隅に一輪活けて四帖半
補聴器で福祉後退聞いている

大洲市 米沢暁明

ご近所のエプロンが寄る祝いごと
一票はきめているのにスピーカー
感謝していますは何時も酔うてから
豆記者の乙にすましたインタビュ

西宮市 津山冬子

母の日に娘の贅沢な京の味
花時計甘いささやき風に乗り
口車つい乗せられて損をする
湯上りのビールがうまい妻も酔い

寝屋川市 岸野あやめ

食欲が体重計に気兼ねする
ふる里で迷子になった変りよう
半分は薬で保ってる長寿国
駄々こねて見たい日庭の草を引く

今治市 矢野佳雲

大根の白さぼっくり折れ易い
盲点を持たぬトンボの目が疲れ
カラオケに凝った女の夜行性

富山市 舟渡杏花

白杵石仏を訪ねて

白杵の里風化の仏へ蝶の舞い
石仏の一体亡父の瞳と出会う
世相への憂いほとけの伏目勝ち

八尾市 宮崎シマ子

花菖蒲霊園行のバスを待ち
八十八夜の新茶がとどく五月晴れ

若いのが誘いに来るので老いられず

鳥取県

和井 観 洋

少しずつ折れてジャンケンにも負ける
持論まだ捨てず斜に髪をすく
可も不可もなく理髪店まで出向く

鳥取県

福田 あや子

風紋を踏めば貝殻唄いだす
裏木戸を開けて噂の風を入れ
なんとなく垢抜けてきて恋らしい

大阪府

北山 悟 郎

ロボットで儲けロボットに泣くだろう
無職でも仮面をかぶる時も有る
真実をぶちまけぬから皆平和

鳥取県

石谷 忠 良

ライバルが突然逝った日の虚ろ
人生の矢印八卦の灯にもらい
どの色に染めても匂う若さです

名古屋府

藤井 高 子

ブラジャーの下で妬心がむれてゆく
ペンが怒鳴って原稿紙が破れる
節のない指で若者レジャー追う

境港市

細木 歳 栄

ベビー靴蝶後になり先になり
ボンと音たて開きそうな百合の花
陽炎に思わずタツプ踏まされる

弘前市

田中 叶

昼の月サーカス去ってまた空地
電線が揺れる記憶にある故郷
父と子の会話パチンコ台のこと

大和高田市

岸本 豊平次

組の音に朝日が笑ってる
広告が嘘でなかった旅をゆく
ライバルに見せてやりたい深い椅子

伊丹市

慳谷 郁 子

出不精が桜に誘われ今日も留守
縁側で雨聞きながら花見酒
選挙など知らないことと吠える犬

岡山県

土居 耕 花

素晴らしい瞳に会って落ちつかず
ゼンマイを巻く妻が居て休まれぬ
瓢箪を磨いて父の機嫌の日

大阪府

津山 刀 水

極楽にゆけるお酒をのんでいる
待ち伏せの灰皿きちんと出してある
あくびした議員をカメラ見逃さず

芦屋市

上田 佳 秋

ぐるり皆バーマの客の散髪屋
デスマスクだけはきれいに飾りたい
鈴だらけ財布定期にキーホルダー

豊中市

小林 一 夫

恋人の鼓動を耳で確かめる
しんどくなったら逢いたい人がいる

惜別へ騒がしすぎる地下の駅

高石市 浅野房子

雪だるま思い出だけになりました

ふんづけた草がますます根を広げ
さまざまの運命線が駅を出る
窓あけて今日生きる風呼びよせる

音もなく桜をぬらす古都の雨

和歌山市 福井桂子

菜をきざみ一人暮らしの夕餉すむ

大阪市 松尾柳右子

鏡から自信もらい通勤車

花活けて女の匂い置いてゆく
紀の川を渡ればふる里そこにあり
悪玉はすぐにくつつき殖えてゆく

唐津市 神崎紫泉

メルヘンを呼んで木陰の夏帽子
体調を教えてくれためし茶わん

森口市 森川まさお

藤の花平等院は鐘の中

お隣の主婦の計をきく春一番
セーターの編目をぬける戻り寒
独り居の気ままも淋し日向ぼこ

油浮く深夜の川が音を立て

兵庫県 脇田米朝

銀行に高笑いする客がいて

守口市 結城君子

牡丹咲く庭へ誘う平和かな

おとぼけが上手になって座が丸い
未だ呆けぬつもりへ孫があっち向き
シジミ汁昔の小川のささやきか

木蓮の花の間に間に春の空

松原市 佐藤藤子

ハイビスカス黄色赤色夏のいろ

西宮市 朝山千世子

百合にバラ薫る会場牧人忌

ピンボケのレンズで子ども追っかける
童子像話しかけたい目と口と
樹齢百年幹の温みにある安堵

温もって和む砂風呂嫁姑

枚方市 二宮山久

化粧落しながら楽屋のインタビュー

羽曳野市 田中隆二

様々に髪型変えておんな生き

五月晴れ屋根より高き鯉幟
かあさんもまだまだ元気電話ベル
寒い朝妻が音だす台所

景気はどうであれ子どもは食べ盛り

水戸市 上鈴木春枝

直球へ子は投げ返す変化球

米子市 沢田千春

まろやかな夫婦となってフルムーン
夜が明けてサラ金の利子また太り

姑のワンクツションに孫をおき

岡山県

吉末 謹太郎

手のとどく処に睡眠薬がある

気休めと思う薬が手離せず

昂ぶりを人形の瞳に裁かれる

新潟県

高野 不二

マイク取る人がないから回って来

時は金なりコレクトコールで来る電話

借る方も悪いにサラ金にくまれる

西宮市

草刈 墮駄

停年の形見ペンだこ消えかかり

芥箱をあさる男にネオン映え

旅で見たサーカス道化は老けていた

竹原市

佐藤 令子

泥んこの靴と天使の微笑と

隠すから覗いてみたいサングラス

外出のドレスでカレー煮込んでる

竹原市

石原 淑子

毛虫まで生気みなぎる五月晴

嬉しくて配って回る自家野菜

釣りの夜は魚と話に舌つづみ

竹原市

岩本 笑子

さっそうと歩く真白い靴である

年だなと涙もろさを隠さない

幸福のいつも一歩手前です

島根県

堀江 百代

久しぶり帰った我が家は冷え冷えと

宍道湖でのどかに浮いた蜆舟

派手を着て少し人の目気になって

熊本市

北川 一進

メニューまだ決まらず待たす子沢山

スタンドの名物一人応援旗

花の名も憶えて蝶の選り好み

宝塚市

丸山 よし津

言い過ぎて劣等感に疼く夜

廉売の野菜まで買う百貨店

我が母校父親となり参観日

大阪市

塩田 新一郎

ゴキブリを妻ゴキブリになって追う

人ごみを嫌いながらも通り抜け

丸い野に丸い苗芋丸い穴

鳥取県

林 荒介

原色を重ねあわせて羅漢画く

灯されて螺旋階段昇り出し

十人が違った彩でバラを描き

熊本市

高野 宵草

こう借りて家を建てろとビラがくる

鏡見てハッとわが齢考える

丁寧な僧でお経が長すぎる

守口市

結城 敏夫

先ずキップ買って冒険始める気

カレーまで甘口好む亭主也

宇宙人遠過ぎて未だ来られない

吹田市 栗谷春子

人知れず息ととのえる長い坂

同窓会ほんのり老いの化粧して

汽車弁のお茶に風情のある昔

高槻市 芦田静江

目に若葉眉描いている音静か

浮いている御堂に託す千杜札

母に似た顔だんだんに母の色

尼崎市 佐藤美代子

ピーチクパーチクホームの雀お天気で

手が離れパートに誘う主婦仲間

愛すればこそその折かん本当かな

河内長野市 糸谷春草

五月晴れ高層ビルの窓を拭く

値上りのたばこちよっぴり買溜める

OLはビヤガーデンで待合せ

出雲市 河原恵美子

シヨベルカー昔昔を消して行き

といっても衝動買いつけるものおんな

親になり母の涙が解りかけ

泉南市 板根流水

塩かげん何も言わずによい男

宴果てて残灯波にただ光り

老いの旅お一人ですかと念おされ

鳥取市 野沢大漁

マル適の宿で軒の難に遭う

里帰り即席カレーにまた出会う

供養する線香無縁の墓を這い

益田市 里本たかし

ペランダの小菊震わす風があり

階段を軋ませ嫌いな人が来る

後戻り出来ない駅の灯が過ぎる

八戸市 島田昭治

盃に花ビラ浮かぶいい風情

旅は良し発車の前に飲み始め

啄木が好き薄幸などが好き

指宿市 渡辺伊津志

起重機を使って蜘蛛が下りて来る

青函の握手で別の赤字増え

庭隅に確かな春の匂いあり

島根県 東原福子

さかずきに散る花うけて春惜しむ

丹念につくろい古着陽の目見る

七十のファッション楽しく医者通い

寝屋川市 堀江光子

小包の中にたどたどしい手紙

上底は外から何となく分り

苺つぶす指先いつか母に似る

米子市 大田みさと

紙バッグ旅の香りも詰めて来る

銀時計亡兄の呟き刻んでる

アイデアで個性を競う駅の顔

富田林市

植松慶子

妹が生れて兄ちゃんらしくなり

雑踏でスリも刑事も仕事する

もらった蔵が山の話をしてくれる

大阪市

稲本凡子

美しい過去となつてゆく出逢い

宗教を変えたとやすく言うてくる

病人の言うこと父母は聞きいれる(孫入院)

八尾市

松下蕉露

女房の同窓名簿にあの子の名

モーニング数珠入れたまま披露宴

礼言って飲んで割カン払わされ

鳥取県

羽津川公乃

手軽さは温めるだけで膳にのり

なんとなく父の戒名書いてみる

定年のやっぱり日曜朝寝する

大阪市

平井露芳

人間を見飽きて動物檻で老い

宇宙から見れば人類皆メダカ

島根県

北川民子

わが城と思う女の台所

閑かさに誘われ針箱眠くなり

青森県

波ただお

小四のガールフレンドからレター来る

子供の日パパとママはワラビ採り

大阪市 朝倉利義

傘持つて行こか神経痛に聞く
咳一つしても顔見る妻がいる

弘前市 真喜内 實

農業の生き甲斐見つけた息子の眸

ダウ最高お天気快晴つづいてる

兵庫県 森脇和子

円を画く赤鉛筆が尖りすぎ

信じきる友の歩幅がくずれ出す

岡山県 藤瀬比沙子

子離れかサッサと飛んでけ鳳仙花

今日からは趣味一筋と城を明け

米子市 門脇晶子

万の水万のねがいをきいてくれ

駅という人の姿の大絵巻

大阪市 野田君枝

いい子らへ校門の春暖かし

連れ立って雨もまたよし通り抜け

高槻市 笠嶋恵美子

芍薬は律義隣へ向いて咲き

アドバルーンだけがはしゃいだ分譲地

守口市 長谷川 司

フルーツパフェ イチゴが豊富に乗りました

メロドラマ見て居てボタンまだつかず

大和郡山市 岡田 すみれ

冬に耐え可愛い花が咲き揃い

若さはいいなつくづく想う喜寿迎え

山口県 高崎雀声

トイレより見ても満月美しい
腹いせにけつたる石が大きい過ぎ

八尾市 葛幸子

譲られた席に小さく腰を掛け
おとなりの屋根までお邪魔鯉のぼり

泉佐野市 大工静子

宿坊で礼儀正して箸を持ち
点呼する消防員に花吹雪

(高野山) 鳥取市 武田帆雀

有難う他の言葉はなくてよい
棒グラフ新人キラリ風を呼ぶ

岡山県 池田半仙

とっときの言訳持っている安堵
妻の趣味次々庭の花を切る

大阪市 山本炬斉

利休忌も過ぎて雨の日の多し
愛すると言った言葉にしばらくれる

藤井寺市 前山美恵子

初めての口紅弾む恋ひとつ
水族館恐い魚とにらめっこ

大阪市 堀口欣一

母の日を母はやっぱり働いて
長堀の角におでん屋ありしころ

島根県 藤原鈴江

春雨へつぶやく宵のひとりごと
カラフルな風が嬉しい五月かな

大阪府 堀いくの

スト中止すべてがほっとさせられる
家計簿がどうにか合って春終る

寝屋川市 立床晴風

味加減ちよっぴり舌が差図する
当確へ達磨睨みが利いて来る

大阪府 小野風童

はい回るとじようがいてる安木節
電線に父が叱った風の糸

高知県 小沢幸泉

行く先を告げずに遊ぶ子に迷う
おどりおどって飲んでやっぱり花見かな

大阪府 板東倫子

パパの日になってしまった子供の日
可愛くてやがて五月蠅い孫の守り

吹田市 横山青果

何時までも若いつもりで冷奴
黙礼で友と別れた投票所

吹田市 茂見好子

軍歌しか唄わぬ夫の頑なさ
ゴルフの日いいよいよと主人起き

大阪府 田淵晴子

誰からも愛される老いになりたくて
もう一駅自信のついたハイキング

兵庫縣
捨てるには惜しい未練が棚にある
夫唱婦隨時には背中押しもする

大津市
朝風の湖面をすべる帆が一つ
端っこの花壇がカラフル駐車場

島根県
約束のごとく季節に咲いてくれ
わたしより素早い孫に音をあげる

和歌山県
鏡にも御無沙汰している農繁期
青空もいっしょに摘みとる実えんどう

大阪市
放水車火事とは別にデモを消し
連休に中流意識の旅をする

大阪市
美しき愛と言えども時に牙
出た人の声の都合で切る電話

鳴門市
神経痛先触れのある低気圧
お下りが合うてよかったが不服

大阪市
連休をやり過ごしてから行く名所
さみだれにジャガイモの芽が吹き出した

吹田市
部下連れて花のトンネル抜けて酒
西岡豊

円増貞子

安田静子

大浦ふみ

寺田裕美

松本ただし

山田松太朗

八木芳水

渡部里美

西岡豊

決断へ妻の助言も入れて立つ

高知市
角がとれ歳の所為かと気をもませ
村包む香りみかんの花祭り

姫路市
山つつじ山紫の景となり
母の日のなかった頃の親不幸

東大阪府
大胆な包丁さばきさすがプロ
正に初夏たのしくＯＬ語ってる

大阪市
七重八重花の名覚えぬ通り抜け
名のしらぬ小さな花が野に咲く

西宮市
妻と母使い分けてる我が自信
新緑に誘う友あり嵐山

青森県
月給はどうした飲んでしまったの
喧嘩する夫婦に見えぬ花の山

米子市
重い腰あげれば何とかなるものを
明日への期待に今日を安堵させ

唐津市
早起きを又も雀に先越され
どっこいしよりズムに合わせ寝起きする

大阪市
大塚節子

北川竹萌

人見翠記

三宅旭

村島秀村

松尾志保

岩淵一星

宮本佳女男

福島フユ子

大塚節子

書道展九十翁の文字若し

気がねしてかがんで見える古都のビル

藤井寺市 楠

昭子

旅帰り踏場ない程家の中
燃えている愛を占い別れさす

島根県

田中 ヒデ子

桜散り選挙談義はお茶の友
カギっ子にお帰りなさいと走り書き

千葉県

中村 有人

見当らぬ名前気になる事があり
母さんが買った一瓶調味料

鳥取県

灘尾 民子

女ひとり生きるネオンの灯に挑む
毎朝のジョギング夫婦ペアルック

橿原市

西本 保夫

ゴマスをせぬと出世は無いものか
割り切って雑用あつさり引き受ける

島根県

石田 清泉

女達手を握られて嬉しがり
人妻の媚をチラツと眼が盗む

大阪市

権安 達一郎

だまされると解つても良い女
シヤクヤクもボタンもテレビで拝見す

和歌山県

北浜 二郎

石段も一段毎の年になる
盆景で楽しむ老いの日々もあり

泉佐野市

真崎 浪速子

妻に遅れる足が昔を齒痒がり
母からの小遣で買うカーネーション

八尾市

椎尾 公子

松の内替り番こに炬燵出る
パチンコは旅でするもの時間待ち

和歌山県

山田 久子

子の便りうれしき目からあふれおち
両手いっぱい清水をくんで初夏の山

大阪府

服部 頼一

てのひらにわが人生の縮図あり
遊園地古老が寄れば回顧談

和歌山県

西村 重彦

街ゆけばよろしくよろしく選挙熱
我が苦勞子供にさせず親の愛

兵庫県

山根 左春

連れだつて山菜取りに行きました
話そうと母は片手で吾を呼ぶ

大阪市

山脇 正之

性慾りもなく夢を追うジャンボくじ
夢抱いたおしんの苦勞身に滲みる

鳥取市

若林 一止

人の事言うまい見まい真似すまい
赤旗を緑の風と逆に振り

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

阿 萬 萬 的

おもしろい夫婦でどちらもの忘れ

玉置 重人
夕食を済ますと眠くなる余生

松川 杜 的
何となく自分の事を言われているようにて面

はゆい思いがするが、その裏に円満なご夫婦の姿がひそんでいるようでほほ笑ましい句である。又こんな句が目についたのも私の齢のせいなのかも知れない。

仕送りが終ると急に老けてくる

松本 文子
子が発てば夕日が沈むだけの駅

寺 沢 みどり
肩の荷が下りるところげるように老け

平田 実男
仕送りが終わってもまだ孫がいて何かと面倒が見たくなる。おせっかいな責任感かも知れないが、老けるのを防ぐ妙薬かも知れないです。

ロボットどうぞせお前も使い捨て

河合 茂雄
妥協して弱者に生きる知恵があり

安平次 弘道
流されることも一つの知恵である

那 須 鎮彦

弱きものサラリーマンの宮仕えにも、けっこう楽しく生きる知恵もあるのですが、つまるところ使い捨てにされる運命なのかも知れない。わびしいですね。

珈琲店の一隅にあるふる里よ

小 出 智子

ゆきつけの喫茶店の隅で好きなことを喋っている。ふる里に帰った気安さに似た感じてペラペラと言葉がつづいて飛び出して来る。わかるねえ。

昨日より少し上手な今日が昏れ

西山 幸

散る事を忘れ造花の色あせる

福島 せつ子

女の作家の句に自己批判の句が多いが、幸さんの「少し上手な今日が暮れ」は明日へつづく希望の色を持たせたところ嬉しいですね。煩惱に徹しておんなよくねむり

稲葉 冬葉

おんなの方は煩惱に徹しますとよく眠れますかねえ。ところが男性になるとちと違うかも知れませんが……。おとしよりは別です。南無如来指先あたりむずかゆい

福本 英子

仏まいいりしていても人間にはいつも欲と煩惱がつきまとっている。そこを「指先あたり

むずかゆい」とは女性作家らしくきらりと流しているところが戴けます。

自転する地球に人間しがみつ

大原 葉香

この句を読んでいると何故か石川五右衛門が南禅寺の山門で春宵一刻値千金小せえと云った言葉が頭をかすめた。

倅せのまん中へんであくびする

高杉 鬼遊

お人好しの鬼遊さん、そして仲睦まじい千歩さんとの御夫妻が目に見えるような気がします。

真つ直ぐに葦も電柱も立っている

西森 花村

まっ青な大空に向って真つ直ぐに伸びる力が感ぜられます。葱坊主だって僕だって。

何一つ誇るでもなし父の海

梅本 登美也

うんそうかそうかと父の眼に戻る

森田 熊生

平凡だった父の大きさを感じたのでしょう。最後は女性陣の私の好きな句でまとめました。

紙人形帯もとけずに人を恋う

坂部 紀久子

保護色の虫でも裏は知っている

神夏磯 道子

理屈抜き男と女のあみだくじ

岩田 美代

猫柳 銀色の芽が自己主張

竹中 綾珠

句百選

助之緑尼

山菜を賞めて古刹の般若湯
仏さん りんご久しくこっち向く
遠蛙酒精は遅々としてまわり
秋の風腋の下から咳をする
奇妙な動物 地球の上に妻
灯台の夕陽神話を抱きよせる
年の瀬にかかわりはなしのど自慢
斐の川の愛情となる空と水
ダニの科に属し揚げ足取るばかり
月は三角 ニヒルな俺のかけ
わがドラマ テレビにすれば視聴ゼロ
雨がえる皆東向き朝の雨
短篇を何冊か持つ話好き
のんびり釣る海は広いな大きいな
ふるきよき絆は小さく地に這えり
間隔はあっても長い夫婦
友情即人間 右でも左でも
成人の顔見て下さい初姿
青春の賛歌ジグザグしてデモる
吹きだまりにも四季あり陽は上に
保革半々ヒットが出て来ない
カーテンは引かぬ寝所へ月のぞく
性別は背後からしばしクイズする
若さかなヒップがおどるパンタロン
欲望は生きる証しのほのおかも

潮騒の向うに遠き祖先達
自画像のデッサンまるい線が出す
石仏横を向いたら曼珠沙華
人間の歴史は欲しい物を盗る
ハイジャックこの英雄に明日がない
芋虫へ一瞬停まる蟻の列
アンコールこんどは音痴皿たたく
肩張ってみても たそがれの足
履歴書は ナシ ナシ 妻終る
花ぐもり目高の学校始業式
冷戦にハッパをかけるすきま風
返し読み遂に笑った子の葉書
シグナルが黙って通す逃亡車
クレヨン画ピカソしきりに拍手する
足を組む女に弱い差し向かい
好戦の旗は赤なり闘争中
白鳥も鴨もはしやいで冬景色
むき出しの個が走り出す町議選
千支六回別に変りもなく元旦
足一本残してバッタとび去りぬ
デッサンは風と人間冬の画布
母が来てポツリ明治の笛鳴らす
春の川アワアワアワとかっぱの尻
善人のレッテル弔詞に貼っておく
翔んで翔んでこわれた羽の決算書



断片をつなぎ合わせて恋愛中
ゴム長で奉仕に出るも寡婦の意地
セオリーの裏はやっぱり裏だった
縄張りをして隣筋で

男なら黙ってなぐる愛もある

欠伸してもひとり ひとしとしぐれ

内ゲバの殺し活字が寒くなる

能面のしろさはすでにかげをもつ

死んだとは思わぬ顔がお茶に居る

カーボンで書いて五人の子に便り

低いのも高いのもいる自衛隊

ご大事にだけの別れで切れた縁

人みんな善なり向かいあったとき

人喰ったポスター悠々御当選

赤軍の彷徨 砂漠に会う夕陽

波ざしら問答無用の声をはり

咲くまでが花のさだめか雨ですみ

満ちたりたくらしに過去が化膿する

その愛を握りかえして確かめる

農一代貰う勲章腰曲がる

草萌えて村の小径に書く童話

椰子慕情はるばる波に身をゆだね

着飾って女がかくす玩具箱

夜な夜なの灯に青春を盗まれむ

山吹きの明るさ鶏が来て座り

酒の気のはなれかけたる泪よな

いい夫婦までとは思って居りませぬ

木の芽みないとし光っていいとし

雪降る出雲製織株式会社

母ばかり使いすぎたりお元日

父と子の和みて黙す朝のお茶

あいびきの脚にもとどく稲光り

夕顔が今咲く音に風が湧き

嚙んで呑むお酒サラサラ夜半の雪

しまい風呂ほんとに春が来た欠伸

慷慨も学者としての言いまわし

積みもれかしなどは嫌な負け惜しみ

平凡の凡をこつこつ歩かんか

薬局に相談があり小さい声

反省の暴露で綴る転向記

妻の小言 正直にもほどがある

ビールからかもす波紋のラブ模様

師を思い牧水浮かべて夜の底

運と金たそがれ近いかくれんば

悪知恵に力を貸して怪我をする

口ほどにないから早い廻れ右

相互主義網は離さぬ天下り

老いのうた単細胞の欲の皮

エゴ伸びて声の高いが踏んでゆく

見たことかチャタレー夫人膝たたく

句百選

山 百 句

人 岳 尾 板

しんしんと歩けば歩くほどの峰
母の手の温みに似たり山の雪
鴨なんば好きな男は山にあり
帽子屋の犬が見ている冬の山
三月の山賑やかなりし路の臺
便りする男は今日も山にあり
山の峰カレーライスの匂いする
四ん月の水は賑やか山静か
一步一步若さの中で峰仰ぐ
金剛山男と女を愛すべし
恋人の耳から峰は雨になる
射程距離だんだん遠くなる山で
風船が割れると山は雨である
草の芽に金剛山は賑やかに
太陽と喋る男と峰歩く
目をあけて山を見ている恐怖感
山へ行く噂を聞いている雪で
母と行く山なら雪は少しある
一尺の雪では足りぬ峰々々
冬仕度父の声する山の峰
山の峰山の画廊のすばらしき
秋を読む峰の高さにある聖書
山男足のうらまでよく洗い
もう少し背伸びさせたい金剛山
蛞蝓よ山の高さを御存知か

父と行く山へ梅干持ってゆく
山に来て母の土産は山の石
エマニエル夫人を知らぬ山の肌
父の山筑前琵琶は置いてある
豆腐屋の水は山から来るそう
迎賓館出ると山の絵白くなる
陶婚の夫婦へ山から風届く
首の無い男で山に雨が降る
卑怯者山へ行く日を教えない
猫柳樹氷の中で背を丸め
罪のない男は山で欲捨て
少女の瞳山の高さを憎むなり
ネクタイに山の絵を画く息子達
ピノキオの母で噂を山に捨て
白い峰ワイングラスが欲しくなる
朝刊に金剛山は雪景色
御来光一番バスで行く男
句碑建立金剛山から八尾が見え
五〇〇回登ると山は低くなる
山の絵を画くと喜ぶ母である
近鉄が負けても山に雪がある
樹齢千年山の空気は鈴の中
母が来て山の空気を持って去ぬ
一枚の風が下から吹いてくる
黄金の風なら何時も山で逢う



借金を返すと急に山仕度
父のない男が笑う山の中
冗談の一つにわたしは山男
山小屋に岳人と書いてある石が
汽車に乗る男は山へ行く噂
河童の子金剛山へ来て遊べ
摩崖仏水を欲しがる峰一つ
山男天真爛漫水を飲む
暖冬の一樹一樹が雪想う
安万侶の噂を知っている樹氷
山の風富田林を通り抜け
母ばかり疲れて父は山にあり
十二月三十一日山へ行く
晒首少し疲れて山へゆく
紀元前金剛山は父である
旅に出る風は峠で振り向かず
山からの便りが届く父の墓
振り向かぬ男に山の風強し
少年の飼う文鳥は山へゆく
山の地図濡れても父に逢えそうで
山の峰海の青さが気に入らず
星さがす男に山は高くなる
無人駅山の向うの人を呼ぶ
山男おんなをだますこと知らぬ
山男一樹一樹へ話する

滝氷柱金剛山を守りけり
春が来て金剛山は無口なり
金剛山田舎侍なら登る
山の死よ遺言状は埋めてある
四月馬鹿金剛山は冬景色
ワイシャツの襟から入る山の風
羊羹も酒も好きです山歩く
雪便り金剛山に雪がない
山で死ぬこともあるかと酒を酌ぎ
金剛の水をうぶ湯にしたくなる
蠟燭の灯りで闇の峰照らす
金剛山父のリックに数珠がある
峰歩く男はピアノ弾き乍ら
登りたくなれば破れた傘さして
重なつて枯葉は峰を温める
金剛山笑えば墨絵が薄くなる
世界地図金剛山が立っている
此岸から手を振る父も山姿
金剛山炭焼き小屋にある茶瓶
父ひとり鬼も一匹山の道
ひとりの樹父の形見の山の地図
御来迎氷へ光り貸してやり
莫迦でよし五百の峰に樹の匂い
手品師に教えてならぬ山の峰
父の樹に逢える五〇〇へ滝があり

愛染帖

橘高薫風選

笠岡市 木山 遠二
八十路吾亡母を憶うて児に返る
陋屋や空が広くて有難し
八尾市 松下 蕉露
調停を駄込等と思うのか
階段を十三上ればサラ金屋
堺市 高橋 千万子
話したら奪われそつな愛を抱く
流転終る男小さな愛を得て
大阪市 津山 刀水
ロボットになると誠実だとほめる
どちらにも取れる笑顔で逃げられる
倉敷市 藤井 春日
老いの身は水槽の魚と似てるわい
石が浮き木の葉の沈む世として生き
京都市 都倉 求芽
人形のポーズで人間様も着る
あの人の電話鳴りようでも判り
平田市 久家 代仕男
農道も舗装めつきり嶽も瘠せ
食膳で昼の嘘さくさくらんぼ

豊中市 小林 一夫
天敵と知らず男は恋をする
人類のユーモアでしよう国連軍
大阪市 神夏磯 道子
武者人形もつ出陣はないように
晩酌のつまみばかりみやげ買う
尼崎市 伊藤 春子
序の舞へ女の葉の胡蝶蘭
かえらない愛へ造花は埃ため
町田市 竹内 紫緒
髪白くなくても覗く顕微鏡
本籍は変えぬ先祖の奮闘史
豊中市 田中正坊
亡き妻にしてやれることなし花活ける
妻逝きて僕川柳を伴侶とす
吹田市 西川 景子
吊橋をとともこわがる浮気者
君恋しかり暮れなすむ牧丹寺
岸和田市 原 さよ子
いつまでも生きるつもりの本を買う
老夫婦シャッター頼む城まつり
奈良県 村上 春巳
トンネルを出て大阪へ身構える
ジャンケンで負けて貰った残り福
岡山市 白岩 文衛
わんこそば異国の夫婦よく笑う
啄木と寝る不來方の城の草
京都市 菅井 とも子
風紋は風の想いにさからわす
彈む毬手の鳴る方は避けて行く
京都市 八木 千代

立ち止まると坂はますます坂になる
坂道でふと踊りたくなる蛙
大阪市 小出 智子
ふる里がおなじであるというだけで
茶摘唄唄わず茶摘真つ盛り
高知市 北川 竹萌
陽炎に崩れて漁師網をあむ
今治市 月原 宵明
青森市 工藤 甲吉
税務署に青息吐息見てもらい
藤井寺市 赤木 和子
エメールおんなじ月を見えています
和歌山市 西山 幸
潮が引くと亡父の戦記を置き去りに
富田林市 藤田 泰子
全盲の少年が飼う伝書鳩
鳥取県 福田 あや子
若者の思想は切れた風になる
指宿市 渡辺 伊津志
遊魂の蝶白き花いたぶられ
豊中市 満仲 きく子
桐の花亡母の半鈴こんな色
京都市 沢田 千春
森中が小人と踊る月の宵
京都市 真喜内 實
考えをまとめるための花観てる
益田市 里本 たかし
初孫が炬燵にのぼるのを許す
笠岡市 松本 忠三
どつちみち許す息子へ間をおいて
西宮市 林 はつ絵

しよふぶ湯に肩の軽さを淋しがる

米子市 雛賀美世

憶い出を深く沈めた老母の毬

高知県 山下登舟

藤棚の隙間に泳ぐ鯉職

島根県 松本文子

消えていく恋彗星は尾を引いて

島根県 榑原秀子

神妙に針持つころ五月雨るる

唐津市 田口虹汀

鯉職太平洋の風を呑み

東大阪市 三宅旭

ネコはネコなりに話をしたつもり

今治市 越智一水

吹雪の中でおしん光と陰を知る

八尾市 高橋夕花

瘠せすぎて哀しい女と見てくれる

島根県 堀江芳子

三十の息子に子供の日赤飯

萩屋川市 岸野あやめ

端正な奥様弁当食べ残し

大阪市 上江洲勝子

すかんぼしがむ士手の子を子が不思議がる

大阪市 朝倉利義

夕焼けの浄土に亡母はきつという

高知県 赤川菊野

熱の夜も孤りで耐える水枕

今治市 矢野佳雲

プラスアルファに人間の匂いする

島根県 小砂白汀

恍惚のこの安らぎよ昼の月

名古屋市 藤井高子

夕風や私の戒老録綴る

唐津市 浜本義美

ボスター美人が極く浮動票

米子市 政岡日枝子

自閉症壁から聞える子守唄

青森県 岩淵一星

里の駅歎呼の声が耳にある

伊丹市 樫谷寿馬

試験管ベビーは神を信するか

萩屋川市 堀江光子

つむじ風さくらの渦が声立てる

鳥取市 河村日満

眼に涙いっぱいこれが撲れるか

和歌山市 中尾まゆみ

野鳥よおいで農菜のない庭だから

和歌山市 浦野和子

妊って女は光る海を抱く

西宮市 松本一郎

子ばなれが出来ず子供の親ばなれ

和歌山市 若宮武雄

ははの忌や蠅がしきりに拌みよる

大阪市 川口弘生

傾いたままの平和もヤジロベエ

岸和田市 芳地狸村

衣食足りて化粧は派手になり

堺市 大道美乙女

知恵・力あつて男に運がない

尾崎市 西村かすみ

夏を描く筆洗白い雲映す

岡山市 行吉照路

蹈いて男は飛び越すことを知り

和歌山市 福本英子

藍の香が走る祭りの総ざらえ

富田林市 中村優

徳利の流れを変え幹事の眼

和歌山市 松原寿子

手鏡の視野にあなたがいとも居る

和泉市 西岡洛醉

通勤の隅で小さな夢がこつ

大阪市 萩谷まさ

満開を夢見る蕾に慈雨少し

岸和田市 古野ひで

開票にまたまた保守という世相

米子市 寺沢みど里

隙をみて隣の庭へはしる毬

島根県 木村はじめ

達磨に眼入れて公約さようなら

島根県 堀江正朗

躊躇なく使える色に黒と赤

西条市 片上明水

駅が無いまちで鰯が多く獲れ

高槻市 田崎素秋

降る程の緑談無視し象牙の塔

高知県 山下登舟

星空が見たくベッドを窓に寄せ

岡山県 土居耕花

授精士と牛とここにも春の景

吹田市 栗谷春子

方言にあたためられて旅を終え

吹田市 井上照子

午前様仕事の鬼の千鳥足

鳥取市 森 田 熊 生
わらべ唄うたい終つて鬼になる

米子市 青 戸 田 鶴
遠い日の記念指輪の小さい石

鳥取県 清 水 一 保
真剣勝負に竹光という党派

鳥取市 鈴 木 村 諷 子
喜怒も哀樂もすつぱり覆う屋根瓦

尼崎市 春 城 年 代
長い雨よしのびる髪搔き上げる

大阪市 岡 田 ふ み
コマーシャル見るよう娘のフルムーン

岡山市 川 端 柳 子
人の計や行手まっすぐ見詰める目

大阪市 松 尾 柳 右 子
税務署の前はにらんで通ります

奈良県 宮 川 古 都 路
苺狩り花と花とを摘む手つき

京都市 山 本 規 不 風
戸籍簿の一行増えている不安

唐津市 浜 本 久 仁 於
吾が校歌だけが明治の中で生き

唐津市 仁 部 四 郎
職場からまっすぐ出たい一人旅

米子市 野 坂 な み
しきたりの多い家紋に嫁がない

宝塚市 吉 田 笑 女
しこりまだ残つて朝の茶が不味い

高知県 松 岡 三 吉
生きてゐる飲んでる一升ビンが減る

寝屋川市 平 松 か す み

ニュータウン緋模様の灯が点る
松山市 谷 真 風

和泉市 岡 井 や す お
やすらぎは春風さんの傍にいる

松原市 佐 藤 藤 子
アパートを傾けそつな大轍

大阪市 中 西 兼 治 郎
おむすびコロコロ緑の風となる

富田林市 岩 田 美 代
お互いが不倫と知つて燃えている

西宮市 奥 田 み つ 子
柏餅食べて男に策がない

山口県 高 崎 雀 声
伝統を守る木地師の若い眉

奈良市 森 田 カ ズ エ
装身具程に中味のない女

唐津市 久 保 正 敏
背のびする土筆袴を剥ぎとられ

寝屋川市 柴 田 英 千 子
判押せば一枚の紙喋り出す

水戸市 上 鈴 木 春 枝
想像に任せますわと軽く逃げ

吹田市 西 岡 豊
鯉のぼり少うし慣れたランドセル

吹田市 西 岡 豊
靴そろえ素顔の妻に諭される

尼崎市 田 中 晴 子
買いかぶられて女にもどる下駄をはく

貝塚市 行 天 千 代
嘘一つつけぬ男で平社員

守口市 結 城 君 子
八重桜そえて仏壇春にする

米子市 林 瑞 枝
巢立たせて乳房の乾く菜種梅雨

宝塚市 丸 山 よ し 津
地下迷路目当ての店を探し得ず

羽曳野市 田 中 隆 二
母の日の母のない子の子守歌

岡山市 岩 道 博 友
野仏へ縁談頼む孫の守

大阪市 北 勝 美
雨もよし緑は七色塔洗う

東大阪市 市 場 没 食 子
よいよいにもならず八十路も三年目

岸和田市 福 島 せ つ 子
雨の日の好きな詩人をひとり読む

★ 豊中市中桜塚三丁目13-15
橋高薫風 (ハガキに3句)

橋高薫風 (ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「情 熱」 選者 橋高薫風

締切 7月10日

(ハガキに3句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43 NHK

発表

大阪放送局、老後をたのしく係
7月24日(日) ラジオ第一放送
午前10時から

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

植山武助

浮かれ独楽回り終ると芸がない

市川 鱈魚

華やかな現役時代は、思うがままの我が世の春、でもその席を降りねばならぬ時の惨めさ、周囲の支持あつてこそその地位である。華やかな時こそ慎ましく、後世のためにも。木から落ちた猿にならぬよう。

エリートの子が遠い人になり

材木 光子

親ならば誰しも子供が偉くなって欲しい、と願うのは当然であろう。でも偉くなったがために遠い手の届かない人になった、というのである。自分の事か、又、他人から聞かされた愚痴なのか、何れにしてもぜいたくさ不満である。それだけに子供の出世のうれしさが一層溢れて、うらやましい限りである。

神様にお礼を申すことばかり

高杉 千歩

「苦しい時の神頼み」その願い事が報われ

た。これからはお願いの毎日でなくて、お礼の毎日である。願いが成就した嬉しさをさりと「お礼を申すことばかり」で締めたところは流石です。

抽出の上から順に好きなもの

片上 明水

初々しい夢多き少女の姿が見えるようです。あなたの宝物は何でしょう。何でもない句のようですが、ほほえましい、好きな句です。素つ裸さらしたような布団干す

松本はるみ

「ドキッ」とする微妙な一駒を突いた句である。恐れ入りました。

今日は帰る足音を待つ夜の風

伊藤 春子

待たれる人は船員さん、海外出張の御主人さんかしら。何カ月も、何年も、離れて暮している姿が「今日は帰る」で待ち侘びている様が痛いほど分る。積る話を胸に（家出した誰かを待つ、なんて事は、この際思いたくはない、そうではないでしょうが）後妻まだ決めず釦は落ちたまま

野沢 大漁

充分乗気なお話とうかがえる、周囲の目を意識せず、その人に早く釦を付けて貰いなさい。ほのほのとした楽しい句です。

いつまでも割れぬ風船憎くなる

角野かず子

割れて、また新しい風船をふくらます。時は代はる。マンネリ化しないように……。

盛り場に忘れた詠りが落ちている

田中 晴子
憧れて来た都会はこんな苦じやなかった。家出少女の記事等をよく見る。都会ばかりがこの世じゃない。田舎にも素晴らしい人生があるのです。夢破れた一シーンを見るようだ。

乗客のひとり視野からはなれない

奥田みつ子

淡い恋人、通学か、通勤か、その頃を思い出しているのかしら。私にもこんな時代があった事を。片想いかしら……。いや、その人は今の御主人であるかも。

宿の下駄はいて戦は考えぬ

和井 観洋

戦争はこんりんざい一免。旅に出た時は、より以上に平和を意識する。湯につかり、ご馳走を食べ、ああ平和ですね、何時までも。自画像の自讃まずしくとも恥じず

市川 鱈魚

自分というものを堂々と表に出して世間を渡って行きたい。人生頼れるのはやはり自分どんな暮しを送っていても何の恥じることはあろう。人生はこの意気で通さなくては。

捨てて来た郷里を詩人は巧くよみ

矢野 佳雲

花言葉のひとつに望みかけてみる

中尾まゆみ

行きすりの遍路目礼して通る

山下 登舟

□□□□□□ 名句鑑賞異聞

直原七面山

昔路郎先生は毎月川雑誌上に「名句鑑賞」を書いておられました。

が、その名句の中にも、その目で見ればそれなりに欠点、疵のある句もありました。

そこで私は、その欠点を補い疵をなおしてやれば、その句は一層見栄えも良くなり内容も充実して来て、大名句に変身するのではないだろうかと思ひ、思ひ切つて先生の取り上げられた句の中から、一度に二句乃至三句ずつ疵のある句を（私の目から見ての）選び出して、その句を私なりに補強訂正しながら、原句と比較対照しつつその功罪を論じて見たらと思ひました。（大胆にも）

何故かと申しますと、そうすることに由つて私自身の勉強も大いに進み、作句力の向上も計られ、なお他の方々の作句上の参考にもなるのではないだろうか、そう思われたからです。

例えば「原句の下五が『従いて行く』と言う終止形の言葉になっているのを、未然形の『従いて行き』に変えれば、原句のもつてゐる閉鎖性は完全に霧散するばかりでなく、限

りなく幅広い展開性を見せて來、絶対にそうあつてはならない句主の自己主張も姿を消して句の堅さも程よく緩和されて、句は一挙にドラマ化されて行き、誠に奥深く味わい深いものになって來ます。

と同時にまた、鑑賞者自身が句に誘導されてその句の真只中に飛び込んで行くことが出來、ここで句主と鑑賞者の心と心は、同一化（合体）されてしまひます。

しかもなお、句はあのないやな説明句や、どうですか句や報告句と言う汚名を着る必要もありません。

また、行くが行きになったばかりで、それまで原句には見られなかつた余韻も余韻も潤いも新しく生れて來、句品も上れば落ち着きも出來て來、鑑賞者が句から受ける共感の度合も一段と高められ、その句の最大の目的であるあの感動をいやが上にも盛り上げて行くではありませんか」と言うように。

私はそう言つた観点（心構え、氣持）からペンを取り「私ならこうする」と言う題で第一回目の小論を書き編集局に送つた。（内心採り上げては貰えないだろうと思ひつつ）

ところがあんに相違して、その原稿がそのまま翌々月号に載りました。

そして日ならずして編集局から「ものがあるのので先生に原稿をお見せしたところ先生は『これは面白い。壺をよく押さえてゐて的も射ている。七面山君の言う通りだ。僕に遠

浜田久米雄追悼川柳句会

とき 昭和58年8月28日(日)11時開場
ところ 國際觀光ホテル 鳥城

岡山市駅前町二丁目3-10(岡山鉄道管理局の南、岡山駅から歩5分)

兼題 發展・窓・妥協・苦心・惡玉・教える・酒・雑吟

☆各題2句締切12時、席題なし

会費 二千元(発表誌・記念品呈)

投句料 五百円

投句先 〒701-01

岡山市久米三九二一八

行吉照路あて

8月23日必着のこと

賞 三才に呈賞

☆昼食は各自でお済ませ下さい

主催 川柳後楽吟社

應せずとどんな載せるように。皆の参考にもなるだろうから……」とおつしやいましたのでそのお積りで……と言う手紙が來ました。

私は欣喜雀躍 一気に四編をものして再投稿をした。

ところが、どうしたことか一向に発表がありません。あんなに言つて寄こしながら変だ

な一と思つていた矢先、編集局から部厚い封書が届きました。そして中に

「……あれが発表になった直後、B氏とT氏（お二人とも川雉の有力作家で、その後四五年の間に共に御逝去）が連れ立って来られ、此の件先生もご承知か」と聞かれるので、

「どんだん載せろと言われました」とお答えすると「馬鹿な!! 例え先生がどう言われようとも、七面山君はまだ新参者で、嘴の真つ黄いな作家じゃないか。」

そのチャキチャキの新参者が、こともあろうに、路郎先生が名句として折り紙をつけ評価されている句に対してあれこれとけちをつけて、私ならこうする」とは一体何事だ。不遜極まる。思い上りもいところだ。

何故原稿を先生にお見せする前に、編集局の責任で没に得なかったのかね。

今後もなお発表が続くようなら、僕等にも考えがあるよ」と言つて帰られたので放つてもおけず、いろいろ相談の結果、一応原稿をお手許まで送り返えさせて頂きます。

が、先生も一応ご賛成なので、何れ機を見て発表したいと思つておりますので、暫く保管しておいて下さい。お願いします」と言つて手紙が入つておりました。

それを読んで私は「好事魔多し」とはこんなことかなとつくづく思いました。

と同時にまた私は、あの一見思ひ上つたようなあの原稿に対して一言のお叱りもなく、

天下の川雉の紙上に堂々と発表させて下さつた先生の心根の偉大さ、心の大きさ広さ、そして新参者の私に対する恩情と恩愛の深さに思いを致し、私はただただ深く頭を垂れ、そして感泣するのみでございました。

柳言秘語

鈴木村諷子

自分の句の心は作者たる自分が一番よく知つている。句と共に私は斯う思つてこの句を作つたと、作句の心も同時に発表したら、その句の迫力も強いと思う。川柳鑑賞を読んでいると臆測による代弁のように思えることもあつて何かうつろなものを感じます。

私の言いたい作句の心とは音字の配列や句の修飾はさておいて、すつ裸になつた作者の心のうめきであり、魂の叫びなのです。読む人をして作者のそれが身辺に感じ取れる、そこに川柳としての良さがあるように思います。誰にでもわかる句、私もそういう信条だ。しかしわかり易いようでも句の真意は、作者のみにしかわからない句だつてある。

句会吟について思うことに、限られた課題、期間に作句して出す兼題、又限られた時間に

機智を競ひ合う席題作句、それを出し合つて選者の個性感覚によつて即席に優劣を分類される。私は川柳作句とはそんなものだろうかと疑ふ。勿論句会吟には句会吟としての別な意味もあろうが、ほんとうの川柳作りとは、長い時間をかけて練りに練つて、自分の感情を詠い込むものだと思う。仮りに自分なりに完璧の句が出来上つたと思つても、時間空間を変えて見直すと、まだ未完成のように思えてくる。よくテレビのタイムショック美事全問正解の方には百万円とハワイ旅行がたのしめる、あれを見て川柳作句を考え合せることがある。一瞬の間に頭の中にパツと現われてサツと消えてしまふ。川柳作句はあんなゲーム的なものであつてはならんと思う。句会で選者に褒めてもらつたり、天地人に抜ける、そんなことはあまり問題じゃない、点取虫でもない。

自分という人間が自分の句を作るんだ、下手でもいい、笑われてもいい、世間の人に見てもらうためでもない。

それくらいに矜持を持ちたいものと思う。句は人間である。作者そのもののものだ。句と作者とは不可分でなければならぬ。作者の名のない句なんか道端の石ころに等しい。

偉そうなことを書いてしまつたが、ただ私の志向を申し上げただけ、お許し願いたい。

■ 随想

ひつじの雑唱⁽³⁾

竹内紫鏡

インタビュと即答能力

まだ息を切らしている力士に向って「今のお気持はどうですか?」と質問する記者がいる。スポーツに限らず、惨事で亡くなった人の家族に、同じようにマイクを向けるインタビュアーもある。そんなとき、答える言葉は出てこないものなのに、マイクは非情である。もし川柳作家の皆さんが、何かをしてくだして「お気持は?」と訊かれる破目になったら即座に巧く答えられるだろうか。きっと、ハチが刺すような、ビリッとした名文句が言えるだろう。日頃の作句を通じて、人間の気持に関する語彙が豊富に頭に入っているからである。でも、川柳家がそんな質問を受ける機会はめったになさそうである。句は「静」、スポーツや事故はニュースになる「動」の活動だからである。

新聞記者らは、文章や見出しを作るのが商売で、第三者の眼で描写をする修養期間の長い人たちだ。迅速に作文や放送のできる能力があるのは、ネット裏にいる冷静な解説者の方ではないか。それなら、マイクを持って「誘導」してやる方が親切というものだ。今の世の中は、手紙で人に「お気持を」と問うてみても、ほとんど返事は貰えないからこそアンケートという方法があつて、○か×の答えなら回答が来る仕組みなのである。

しかし、マイクを持った方は、表情や声を伝えなければ、勤めを果たすことにならない。スポーツ選手は「マグレです……今後もしがんばります」ぐらいは言うが、それだけでも困る。誰が言うにしても、川柳の一つぐらいいはマイクを引っ込めまい。我々もしそうだったら、一句の奥行の深さを解説すれば、相手も肯き、川柳のPRの機会にもなる、というものだ。

そんなことを考えていたら、川柳作家は話に文章にワザビを利かせられるはず、と思えてきた。

俳文と柳文

川柳作家は随筆も書きなさい、と私はまず言いたい。作句家は、頭の中が「類語辞典」のようになっているはずで、それだけでも常人と違うのである。

広辞苑に載っている「俳文」の意味を読むと、「俳句趣味を帯びた文章。簡潔・洒脱で、含蓄の深いことを特色とする、云々」とある。

「柳文」というのは見かけないが、同じような定義をつけて、使いたい言葉である。

具体的な俳文の例は俳句雑誌にも載っているし、その同人を中心にした文章会もあつて軽印刷の文集を毎月発行するグループもある。読んでみると、季語は多めに出るが言葉選びに苦心したり、無駄な言いまわしはない。現代の正字も、句を作る歳月の間に身につけている。音数の違う類語を何通りか知っているから、文章のリズムを整えるのに役立っているようだ。学生や翻訳の初心者、英和辞典の訳語の一つだけを覚えてギコチない日本人（他人の発想）をつづるのは、出発点から違う感じがする。（注・筆者は技術翻訳家）

人の知っている言葉に「受容語彙」と「発表情彙」とがある。前者は、読んだとき一応の意味は解っていて、辞書を引かなくてもよい種類のもの。後者は、その何分の一かだが自分で思いつき、白紙上に書けるものをいう。英語の単語などでも似たことがあり、中学以来習った受容単語は相当あるが、英作文となるものと自力でひねり出せる発表単語はわずかなものである。

作句をする人は、従って日本語の短文は書けるはずなので、作文をやらないのは勿体ない。とは言っても、読む側では、未知の人の下手な文章を読むくらいなら、作家の書いた本を讀うよ、というかもしれない。特に、詩や歌と似た心情を書いても、當利に直結しないから、発表の場は少ない。随筆会に入つた

老人たちが、余生をなぐさめる文集を読ませ合つ、という形で実費頒布をするのを、私も知っている程度である。

川柳塔誌の中では、例えば女性同人の特集（四百字文）を拝見する。私も読書家がおられる。それぞれ人情味のこもっている文で、よく書けている。ただし、数十年をふりかえった取っておきの材料らしく、迷惘も一回限りで終りなかもされない。でも、それが書くことの第一歩なのだろう。

どこに文章を載せるかは別の問題として、何といつても習作とか互評の段階は必要である。取材も大切だが、見聞と読書を通じて頭に入力した語彙を、連想ゲームのようにみずからに「活」を入れながら、発表語彙を増やしてゆくべきものであろう。

ここで、テストを一つしてみよう。

「句」という字はおなじみのはず。そこで俳句、作句、選句……など、句が下につく熟語を、あなたはいくつ言えますか。もちろん、文脈に沿っておのずと頭に浮かぶものもありましょうが……。

答を明かしますと、『日本語尾音索引（田島・丹羽編）』では、四〇あります。例えば「句、絶句、節句、など。言われてみればアアそうか……」となる熟語、それが受容語彙なのです。

日本人が手紙離れしたり、電話をかければ長びくことの裏には、この発表語彙の不足があるように思われる。

前と同様なテストだが、「〇然」という熟

語をいくつ言えるか、と訊かれたとする。これは作句技術といくら関係がある。思案中に、猛然とか爾然とか、多数の熟語が連想されるようであれば、句が早くまとまりやすいということはいえよう。なお、現代語の「〇然」は約百ほどある。

憤然と出て悄然として帰り

といった句（ひとの句だが）が生れることにもなる。

一〇〇〇字文の会

私が職場の文芸部の世話をしたころ、俳句、短歌、詩の集まりのほかに、随筆部門を設けた。すると、各グループから希望者が参加し「千字文の会」が誕生した。十人ほどが各自の作文を毎月提出し、それを回覧することになった。「天声人語」もお手本であった。会員は、必ず評をつけて回すこと、という申し合わせが効いたようだった。回覧は、工場内の簡単な郵便によるので切手はいらない。渡航した人には、帰国後に期待をかけられたし互評のあと活版で文化会の定期刊行物にも載る道がついていた。印刷部数が三〇〇〇近くの社内文芸誌が存在した、ということが「書く習慣」を日常的に続かせたともいえる。

そいつの会社はあまり無いかもしれないが趣味と職務上の文章に共通する「発表語彙」が溜まり、歳時記の季語も身につけていった。千字でなくても、いわゆるコラムものが雑誌にあるので、私は五百字余りの小随想も試みた。学会誌（注・筆者は金属工学や粉体

工学の系統に所属）には、そんな欄があり、読者に気分転換をさせる記事として尊重されていた。私も年の功か、雑文を投ずる機会があり、川柳の素材がいくらも使えたとし、薫風萬葉ほかの諸先輩の句をおりこんだ。しかし骨子には専門上の新しい所見がまず必要である。題材は科学技術や語学などから拾うことになるが、そういう文章の大先達は寺田寅彦あたり、ということになる。

第三者の評では、竹内さんの文は「おこわ」であり、同じコラム担当の別人の文は「そうめん」であるといわれたことがある。事実そうらしく、川柳に肉づけした結果も、無駄のなさすぎる文章になってしまふのである。本稿でも紙面が許されれば、科学者の小文を載せて諸賢のご批判を仰ぎたいが、私のは人情ものでなく、理知が主題である。やはり故不二田一三夫氏のような作家の書いたものは人情の機微がクローズアップされていて、まねのできぬ柳文であった。

念のため言っておくが、川柳の作家が語彙を豊富に持つといつても、作句の成績（毎月入選率の高低）と文章力とは直接のかかわりはなさそうだ。作家や著名の文章家で川柳をやらない人は大勢いるからである。

ひょっとしたら二句組、三句組（という言い方はよくないかも知れぬ）の作者の中に筋作りが上手で、取材のコツもよく、没句の着想も復活させ、千字や二千字の文がまとめられる方もいるのではないかと期待している。

（終）

愛

八木千代選

人哀し愛と憎しみ同居して
告白をしてから無口になる愛で
心中で近松愛を凝結す
リハーサル愛のセリフを繰り返す
告白の愛へ迷惑そうな顔
天国へ行っても愛はあるだろうか
どの頁にも愛の字を見る聖書
故郷を愛し訛りを捨てきれず
手に手を触れて愛を確かめ
あの時はあれでよかった愛の鞭
愛憎の憎の涙は止どめまい
あじさいは人目を避けた愛の彩
愛潤れて女が仰ぐ北斗星
一輪ざし君の小さな愛もらう
溺愛の積木悲しい音で落ち
愛という字もありました日記帳
愛情を細かく刻んだ思いやり
樟脳の愛は細ってからわかり
結婚指輪ひとつで足らぬ怖い愛
やがて来る愛の終りへ目を閉じる
みの虫が愛した巢から旅に出る
信じてた愛のレールのきしむ音

綱引に似た愛情がまだ続く
口にする愛は白々しい響き
人形の首抜いている愛の飢え
何もかも知っていたのはおぼろ月
まだ少し愛があるので小言言う
それからの愛を月が知っていた
血を貰うこんな嬉しい愛に逢う
愛なんてこんなに脆いつむじ風
縁薄い坂で一つの愛にあう
長い目でみたら大きな愛だった
真実の愛を野良犬嗅ぎまわる
ひたむきな愛だけ知って石頭
愛一途その焦点に君が居る
愛などとうかつに信じてはならぬ
愛された日からあやとり好きになる

満津子 勝美 どんたく 素秋 柳五郎 やすお 右近 悠泉 七面山 枯梢 規不風 美恵 多賀子 三吉 芳仙 道子 久仁於 佳雲 優 美穂 司 女

愛の砂指からもれる恐しさ
私を一番愛しているわたし
愛の紐張り合って生きてます
味噌汁の愛には報わねばならぬ
手を振れば一氣に駆ける愛である

愛されたときから壺の底のぞく
地 人 天

愛ちゃんの愛は太郎のそばで老い
数え唄 十越してから愛になる
軸 母の壺かたむき溢れ愛あふれ

明水 与呂志 景子 達一郎 泰子 刀水 克枝 本蔭椿 はつ絵 武水 カズエ 静歩 里風 文子 英子

自信

山本規不風選

悪玉の自信ぐいぐい押して来る
自信過刺頭まるめて済まされぬ
食べてゆく自信あるから別れます
幸せにします自信へ従いてゆく
直感を基本でためし得た自信
絶対の上りますよと証券マン
そこからは己れの顔を伏せてゆく
末席で男自信を温める
大胆な自信で二号を志願する
自信満つ愛の一矢が的を射る
やんわりと捨て台詞言う京女
自信には遠く信心怠らず神足道子
慕おるるまでは保ちたい自信
傘寿来て芸の自信に顔の艶
自信消えた動揺の眼が落ち着かず
泳ぎ切る自信ないので橋渡る
自信なさそうに装いする打算
満開の自信へ牙が見えて来る
どん底で拾った生きて行く自信
正直に生きて心に持つゆとり
美しい悪魔に自信試される
手鏡へ稼ぐ自信の眉を引く

可住 美恵子 利義 久仁於 四郎 婦美子 枯梢 重人 正敏 義美 達一郎 三和 千世子 浪速子 里風 あやめ 福本英子 右近 頼一 弘朗 雄々

誘
う

吉岡美房選

不覚にも会費不要に誘われる
言いつてを考へながら誘い出し
誘われて男一匹瘦我慢
連休を避けて牡丹に誘われる
未だ誘う相手がいない五月晴
誘われて引立役と知る集い
国会の答弁眠気誘われる

山久
綾珠
与呂志
豊
はつ絵
森脇和子
悟郎
素身郎
倫子
みつる

誘われて誘うて花と蝶である
誘われない人に行く先で会い
誘われて螢とつちも苦い水
誘われてやつたと罪をなすり合い
バーゲンに誘われファイトかき立てる
連休のころ寝へ馬を誘われる
健康の体操嫁に誘われる
愛の手に誘われて出る車椅子森脇和子
誘われて割勘だった赤のれん
誘われて行く教会はすぐに飽き
誘われる涙は拭かぬ方がいい
誘惑に乗ってみるものこらまで
誘われて後へは引けぬ飲み仲間
誘われて金は男が払うもの

美穂
不二
尋美
美恵子
どんたく
雅風
美津枝
はじめ
兼治郎
耕花
晩明
幸一
雄々

長い眼で見て下さいと言ふ自信
自信持つ男は尻込みなどしない
水着ショーこれでもかこれでもか
自信ある教師の貌は動じない
旗を振る自信は妻のほうが持つ
点滴へ生きたる自信の花あかり
自信有る軍歌片足還らない
生きて行く自信をつけた過去の傷
自信家の優越感を笑えるか
血の出るような努力の末に得た自信
文机聖書が置いてある自信
自信なきまま仲裁の座にすわる
住
ポツクリ寺詣り不思議な自信つき

山久
綾珠
与呂志
豊
はつ絵
森脇和子
悟郎
素身郎
倫子
みつる

半分の血の繋がりにある自信
底辺を生きた自信は伏せておく
うぬぼれの羽化し自信となつて翔び
幸せが続き自信が眠くなる
自らを信ずる以上に他も信じ
人
易の灯にかざす自信をなくした手
地
どよめきのその中心にいる自信
天
学歴に小学卒と書く自信
軸
幸運を招く自信は持っている

泰子
カズエ
一止
克枝
裕
景子
女
狸村

誘い水少し狂ったタイミン
秋篠へわたしを誘う技芸天とみえ
どつちから誘うともなく手をつなぎ
誘うのが女の方である不幸
誘われる予感が紅を濃くする
誘われて誘うて友はありがたし
本当に誘うてほしい顔がある赤木和子
手鏡に誘うてほしい顔がある赤木和子
住
人形に誘われてみる落し穴
誘うのも誘われるも好き悪女たち
一枚の壁の向うにある誘い
誘われて少し翔びたいイヤリング
誘うのが下手な男を信じよう
赤木和子

芳仙
登美也
伊津志
文平
重人
刀水
可住
景子
まさ
たず子
赤木和子

川柳塔柳箋

一冊 二百円

送料 二百四十円

初歩教室

題 — 感激 —

本田恵二朗

選ばれて感激の涙頬つたう	よし津
(選ばれた感激頬つべが濡れてくる)	
いま一度あの感激と捻子をまく	桂子
(あの感激を忘れまい捻子を巻く)	
感激の波がしずまる宴のあと	幸泉
(披露宴の感激抱いて成田発ち)	
仰山な感激にとり残される	年代
(感激の波に浮いたり沈んだり)	
だるまの目揃う感激身にしみる	琴柱
(達磨の目入れる感激の手が震え)	
わが児生む感激の声無事に聞く	美恵子
(感激の乳房ゆさぶる呱呱の声)	
感激のシーン抱き合い泣くばかり	同
(感激を抱き合う姿美しい)	
感激の舞台に涙とまらない	ふみ
(感激の舞台涙が霞ませる)	
年毎に感激消えてゆく怖れ	ちよ

(年輪がふえるたび感激一つ消え)	柳右子
感激がちゃんこ鍋からあふれ出す	
感激のトロワイ知ってるあるロマン	同
(トロワイは知ってる感激の或るロマン)	
感激にむせび下積み振り返える	久子
(やり遂げた感激結果問わずおく)	同
やり遂げた感激成果は小さくとも)	
感激の紫紺の旗に舞う歓喜	まさ
(感激を紫紺の旗で包み抱く)	
感激の清い涙にある安堵	同
(感激の涙は清い彩を秘め)	
初乳を音たてて吸う吾子を抱く	一止
(初乳を音たてて吸う倅を抱く)	
オンギアアの呱呱に銘する父の肝	同
(呱呱の声父の感激盛り上げる)	
めがね拭く父感激の父子ドラマ	芳枝
(親子劇父感激のめがね拭く)	
名演技感激の渦でアンコール	同
(名演が感激の渦巻き起す)	
胸上げへ何も見えない涙の目	幸子
(胸上げをするもされるも泣き濡れる)	
感激の鼓動伝わる電話口	同
(感激の鼓動が受話器踊らせる)	
感激の極みは涙声が出ず	やすお
(感激の頂点涙も声も出ず)	
感激の引退拍手に送られる	同

(引退の感激拍手の嵐呼ぶ)	山久
感激の紅涙明日の糧とする	
再会の感激に見る共白髪	同
(再会の感激白髪を比べ合い)	
万歳に湧く逆転のホームラン	胡頹子
(逆転の快音スタンドに突き刺さり)	
魅せられた演技へ夢の酔い心地	同
(骨までも抜いてしまった名演技)	
感激を呑み込んでいる初勝利	キミ
(初勝利の感激足が地につかず)	
ほんとうの感激涙が知っている	同
(感激が涙袋を突き破り)	
やり遂げた感激静かな顔作る	實

寿馬

「やっぱり川柳」
「たかが川柳」

どちらの言葉が好き？

(やり遂げた感激静かに噛みしめる)
感激を大事に一人帰路急ぐ

同

(感激を抱きしめ急ぐかえり道)

寿美

(再会の感激むせぶ失語症)

保夫

(感激をいまより上げるタイミング)

同

(感激のシーンに早くももらい泣き)

兼治郎

(感激を忘れたわけでない離婚)

同

(感激と涙をセツトになっている涙)

芳水

(打掛けが感激震え父母の前)

勝美

(打掛けの中で震えている感激)

同

(感激のする人すぐにだまされる)

貞子

(感激も不満も遠く老いの日日)

同

(感動へ母の感激かみしめる)

武水

(母となる感激胎動抱きしめる)

昭治

(目頭に友の情けが沁む助勢)

同

(私如きへきちんと席を与えられ)

同

(不肖な私へ過ぎた席与えられ)

同

(墓にまで持って行きたい感激を)

同

(あの世までこの感激を運び度い)
童心の感激いまも生きている

同

感激にふるえ指輪がさしにくい

忠広

感激の帰国言葉が通じない

同

感激をなくしたエリート塾育ち

刀水

玉三郎感激させたり泣かせたり

同

逢えた日の感激日記にちりばめる

寿子

黒髪の手まで感激しみ通り

同

初句評師の恩情を読み返す

あや子

花束へしゅうとの方が震えてる

同

合格の感激人目ははからず

春枝

くしゃくしゃの顔が監督胸上げる

同

あの時の感激アルバム抱き続け

紀久子

感激の頬をみどりの風が撫で

同

(恵二朗短信)

年齢がどうあれ、川柳人は夢を持ち続けね

ばならない。大小どんな夢でもよい、いつで

もどこでも、自由に夢を見るという特技を身

につけねばならないと私は主張する。

題一仲間一7月20日締切(9月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

(七一一)

本田恵二朗

★

4月号71頁、作者名みのるは「みつる」の

誤りでした。訂正致します。

川柳塔社常任理事会 (6月1日)

出席者―栗・薫風・水客・紫香・潮花・太
茂津・吸江・柳宏子・萬的・酔々・鬼遊・敏
与呂志・重人・岳人・天笑・笛生・寿馬・史
好

《議事並びに報告事項》

★生々庵名誉会長、小松園氏、静馬氏を見舞
われた薫風氏より近況報告、皆さん元氣を取
り戻されている。

★58年度大阪市民文化祭川柳大会の打合せ会
(6月18日)に本社から鬼遊、与呂志両氏が
出席する。

★8月28日の浜田久米雄追悼句会(岡山)、森
田茗人忌句会(鳥取)より依頼の本社関係の
選者を協議、決定。

★5月1日のいちご狩吟行の会計報告が鬼遊
氏よりあり了る。

★羽曳野市図書館が6月1日オープン、川柳
関係図書の実に協力をお願いしたい旨、敏
氏より発言あり、本社より句集を寄贈するこ
とにする。

(史)

■7月の常任理事会は1日(金)

柳界展望

(原稿締切毎月末)

集録・香川酔々

A5判124頁、価千五百円。
208名(各10句)が参加、発行所690松江市南田町49島根県川柳協会。

■滑川市制30周年記念北陸川柳大会が7月17日12時より滑川市民会館で催される。題/S.L.・ほたるいか・滑る・川・漁港・古代・公園・売薬。会費2千円。

■主催・川柳えんぴつ社
■第27回広島平和祈念川柳大会は8月7日(日)正午より広島中央公民館(西白鳥町)で催される。題/雲・川・城・裁く・刻む・傷口・夏。会費千円(発表誌呈)主催 広島川柳会。

■弓削川柳社創立35周年・弓削平句文集「六塵」発刊記念西日本川柳大会が9月4日(日)8時30分開場で久米南町中央公民館(岡山県久米郡)で催される。

■ふあうすと川柳社副主幹山本芳伸氏が、このたび句集「老い」を発刊された。

■川柳岡山社より「吉備団子」33巻が刊行された。A5判、144頁、価千五百円、送60円。岡山県を主体とした52名が参加各10句の作品を収録している。発行所701-42岡山県邑久郡邑久町山手一四四五川柳岡山社。

■昭和57年版島根県川柳作家年鑑第四集が刊行された

引く 渡辺 蓮夫
席題選者 河村 日満
丸山弓削平

主催・弓削川柳社
■ふあうすと川柳社では、57年度ふあうすと賞作品・紋太賞作品として、次の作品を発表した。

懸り風いっそ墜れば道がある(竹原和美) 島の掟もぼんぱん船も遠ざかる(島本泰) いつまでも無い無いゲームしておれぬ(古笹原芳子) 風の音に追いつめられた泣きほくろ(坂本須磨代) 以上ふあうすと賞作品。

水ぬるむ人に心があることく(永津短夜) 爪を切る暗く漂うものがあり(松本弥知子) 海は静かで父はいくさの場所へ行く(野本素村) そば枕とつにもならぬことを聞き(奥山美智子)・ちなみに美智子さんは、本社同人、ご同慶の到りである。

▽同人・柳友消息△
▼川村好郎氏(本社相談役高石市)暫くご病氣療養中であつたが、このたび、ご快癒なされた。誠にめでたいことである。ご快癒をお

第一回 夜市川柳大会

と き 昭和58年7月31日(日)午後一時開場
と ころ 堺市南安井町一丁目一
堺市立労働会館(07222223651)
但し南海高野線堺東駅下車西南徒歩十分

「火」・「裸」・「魚」・「酒」・「波」・「夜」
当日発表
特別課題
「男」河内天笑選(7月20日まで)にハガキで投句。尚この題に限り欠席投句歓迎)
午後二時・各題三句・席題なし
表 彰 初年度夜市川柳ベストテン入賞者
賞 費 当日各題天・地・人及び佳作に呈賞五百円

ご招待 初年度各月選者各位及びベストテン入賞者者句会終了後(サロンド・ベレ)に於ける「ハワイアンディナーパーティー」にご招待

夜市川柳次年度の題と選者発表
(締切日)毎月末に変更)

1「口」谷垣 史好選58・7
2「玉」小出 智子選58・7
3「土」河村 日満選58・8
4「皮」黒川 紫香選58・9
5「種」定金 冬選58・10
6「神」八木 千代選58・11
最終「旗」西尾 栗選59・5

夜市川柳二年目。よろしくお願ひ致します。
柳社を越えて「川柳の輪」をつくりたいと考えています。尚、締切日を毎月末に変更しました。翌月号の「川柳界」で入選句を発表。

投句先 〒593 堺市堀上緑町二丁九二一
河内天笑方 堺川柳会

新 同 人 紹 介

祝いする会が、どんぐり川
柳会の世話で5月29日以前
のボランティア活動の一助
として「聴障川柳会」を発
貴荘において、栗主幹をは
じめ、塔幹部の方々他46名
の参加で、大盛会であった。
▼稲田豊作氏（倉敷市）岡
山県における身体障害者へ
のボランティア活動の一助
として「聴障川柳会」を発
貴荘において、栗主幹をは
じめ、塔幹部の方々他46名
の参加で、大盛会であった。
▼高橋操子さん（岸和田市）
6月15日、19日の5日間、
川柳作品展を岸和田市の自
らに開催された。

松 本 は る み

石 田 清 泉

岸 本 輝 水

藤 原 鈴 江

細 木 歳 栄

— 以上 生々庵・栗・薫風・白汀・芳枝推薦 —

泉会館市民ギャラリーで開
かれた。売上げ金は諸費用
を除き、公共施設に寄附さ
れた。
▼小西無鬼遺句集「わらじ
酒」が神戸新聞6月3日の
朝刊に写真入りで大きく紹
介された。

▼長野文庫氏（今治市）療
養中であるが、まだ右手が
不自由で、左手で字を書か
れている由、一日も早いこ
快癒を祈る。（一水氏報）

▼佐藤藤子さん（松原市）
ご子息（高二）が関西カヌ
ースラロームに出場大活躍
をされた由。

▼板尾岳人氏（富田林市）
現代川柳作品「山」の個人
展を三和銀行富田林店ロビ
ーにて6月いっぱい開催、
市民の好評を得た。

▼吉永伊三郎氏（尼崎いく
しま川柳会）より栗主幹句
集発刊祝賀句会へ祝電をい
ただいた。

▼内海幸生氏（八尾市）の
実父内海駒吉氏、5月2日
4時16分逝去。83歳。

▼安藤寿美子さん（豊中市）
ご尊父梶山精一氏が5月11

日老衰のため逝去。合掌。
▼山本芳伸氏去る5月15日
逝去された。氏は昭和7年
に楳元紋太氏に師事、ふあ
うすと川柳社の重鎮であつ
た。合掌。
▼河村日満氏（鳥取市）ご
令聞このたび入院なされる
由、一日も早いご回復をお
祈りします。

▽書信拝受△

▼静水・明朗・千代・満津
子、あいき、正朗、芳子、
登志代、寿美子、花子、ゆ
きを、緑之助、美乙女、和
子、美幸、道子、トク子、
のみなさん、なお誌友の高
槻市の上原逸氏より丁寧な
書信をいただく。

▽正 誤 △

▼前号P59下段五行目の句
畢竟とあるは競争に付訂正

▽句会案内△

■菜の花句会

時・7月10日（日）夕6時
場所・八尾神社境内西郷会
館（近鉄八尾駅下車）
兼題〓酒・裸・風船・弁当
・駅

■南海電鉄川柳部

時・7月28日（木）夕6時
場所・南海会館ビル本社地
下食堂
兼題〓荷物・小道具・実力

■南大阪川柳会

時・7月19日（火）夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題〓他人・力・東の間・
店頭

■駒つなぎ川柳会

時・7月25日（月）夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題〓蔭・若者・背巾・保
存

■東大阪川柳同好会

時・7月23日（土）夕6時
場所・東大阪社会教育セン
ター（近鉄布施駅下車北へ
5分長堂小学校内東口）
兼題〓虫・耳・歯・汗

本社 六月句会

会場 なにわ会館

七日 午後六時

六時に会場に入ると、やや空席が目立っている。記念句会疲れてもあるまいが、出席は七十名を割った。

宮口笛生氏のおはなしは、川柳との出会いがテーマ。昭和21年夏、今は亡き山田季賛氏と高島屋で「柳窓」という徳川夢声、吉川雉子郎らが出していた雑誌を見たのが俳句から川柳へ転向するきっかけ、というから歴史は古い。爾来、国鉄川柳界、地元・奈良川柳界で活躍されたことは知る人ぞ知る。SL機関士として国鉄生活四十年、川柳生活は三十年を越える。在職中、有給休暇の殆んどを川柳に費されたとか。

国鉄川柳史の一断面を窺い知る興味ある話の最中に会場が騒がしく、雰囲気をごわしたのは残念だった。人に迷惑をかけない、こんな最低限のマナーくらい守りたいものだ。今月の月間賞は私、史好が頂きました。

(史好記)

(受付—与呂志・敏)
(記録—幸生・射月芳)
(進行—天笑)

出席者—与呂志・寿美・重人・天笑・月子
白水・笛生・潮花・水客・勝美・滋雀・兼治郎・蕉露・紫香・満津子・道子・千万里・雅風・狸村・喜風・本蔭棒・みつ子・春蘭・美智子・右近・泰子・鬼遊・柳伸・綾珠・鎮彦
柳宏子・智子・勝晴・はつ絵・カズエ・英子
山久・洋敏・白兎・規不風・岳人・栞・頂留
葉・敏・文秋・景子・幸生・寿子・和子・糸
葉・凡九郎・薫風・トメ子・春江・律子・射
月芳・史好・悦郎・萬的・吸江・三十四・度
冬葉・英壬子・雀踊子・楓楽・酔々

席題「顔ぶれ」

斉藤三十四選

年々に顔ぶれ変る老人会
顔ぶれを気にせぬ瞳のきれいな少女
顔ぶれがそろって歯車廻り出す
顔ぶれが揃って話が下に落ち
いまにひと波乱来そな顔ぶれで
顔ぶれは揃たがみんな給料前
顔ぶれに一つ足りないカモの顔
顔ぶれに今日は和服と決めて出る
お歴々ずらりと寄付の発起人
顔ぶれを見てから妻の許可が出る
顔ぶれを見て花束を止めにする
顔ぶれに前売り券がよく売れる

兼治郎
悦郎
寿子
勝晴
天笑
満津子
鬼遊
千万里
滋雀
英子
水客
重人

ばかだなあお前顔ぶれを知ってるか
顔ぶれの舟乗り込みに時代見る
黒幕の息のかかった顔ぶれで
顔ぶれが隅によつて私語の陣
顔ぶれがだんだん若くなる補導
顔触れへブライド少し高くなる
顔ぶれが揃った頃に初発出る
二次会の流れに揃う悪の顔
顔ぶれにアテ馬らしいのが一人
フルムーン顔ぶれが寄る待合所
顔ぶれが揃うと別な力湧く
顔ぶれを見てからママは留守という
顔ぶれが揃うと勇気湧いてくる
二次会の顔ぶれ遠慮のいらぬ仲
ワルが抜け今日の顔ぶれ物足らず
顔ぶれへ傘寿の恩師涙ぐむ
生き残る顔ぶれ核が知っている
なつかしい顔ぶれ集うクラス会
顔ぶれを不安にさせた蟻の列
顔ぶれが揃うと影武者引き上げる
エリート顔ぶれ調停など出来ぬ
顔ぶれの中の悪女が指図する
顔ぶれを聞いたら足が宙に浮き
首のない顔触れ同士飲むノレン
顔ぶれにあくびを見せたオリの虎
腰を出すメスかくし持つニューメンパー
終電の顔ぶれいのち売った肩
どうにかなりませんか顔ぶれ言うてみる
顔ぶれが揃うと遮断機があがる

白兎
狸村
敏
栞
律子
水客
本蔭棒
鬼遊
重人
与呂志
天笑
度
智子
射月芳
みつ子
英壬子
滋雀
右近
鎮彦
与呂志
蕉露
紫香
道子
吸江
鎮彦
景子
はつ絵
凡九郎
悦郎

顔ぶれのゲートボールへ弾む足
顔ぶれの一人がいない通夜となり
顔ぶれをみてから変るスケジュール
いつもの席いつもの顔の悪企み
顔ぶれの一人女房が恐いやつ

席題「当日」 江口

まだまだの油断で当日来てしまい
当日になって慌てる意け者
当日になつても答出て来ない
当日を占う澄んだ青い空
姑の来る日のキツチン磨いてる
当日は自分に自分を問いつづけ
前売りも当日券も余つてる
当日は昨日の雨がウソのよう
当日は淑女の顔で来る茶会
式当日娘に咲きはる花をみる
当日は天気と幹事強気なり
当日の朝まで迷つていたお人好し
当日は槍が降つてもゆく決意
当日のアリバイがない日記帖
喜ばず計画当日まで伏せる
当日も亀はゆっくり走り出す
当日がだんだん近くなる焦り
当日の切符へのち賭けてみる
当日の天気気になる浮動票
当日は少し狂つていた時計
当日の天気は知つて雨女

度選

寿美 智子 柳宏子 滋雀 三十四
射月芳 射月芳 笛生 鎮彦 智子 凡九郎 洋敏 頂留子 潮花 楓楽 柳宏子 英子 雀踊子 本蔭棒 満津子 文秋 鎮彦 月子 寿子 満津子 悦郎 幸生

当日券もらい子供へ置き手紙
旅行日の起床ラッパは父が吹く
当日になって棺桶出来上がり
当日は八方破れでいったらか
当日は笥めしを炊くと言う
嫁がせる日の父ビエロを演じきる
当日の父は無口の影になり
当日券買ったのに徹夜して並び
当日に見せる切り札あためる
クリスマス絵になる雪が降ってくれ
有効は当日限りと小さい文字
当日は意外や髭を落して来
当日が来てはしくない別れの日
その当日心で泣いて出た軍靴
当日の覚悟を喰う手術台
当日は雨だったはず調べ室
当日券杉さま豆つぶほどに見え
当日は亀が兎になる宴で

兼題「だんご」

板尾岳人選

時代劇美女はだんごに手をつけず
総入歯だんごに挑む百面相
花を貰うだんごも欲しい労働歌
団子食へ橋山節を聞いている
きびだんご半分貰うた勝ち車
三色のだんごもうた辻地蔵
串だんごそれぞれ個性持つ寝顔
細雪だんごの皿を三つ置く
だんご屋はどこも名物と書いてある
白水 吸江 岳人 本蔭棒 水客 楓楽 滋雀 吸江 雀踊子 天笑 滋雀 萬的 狸村 滋雀 幸生 鬼遊 楓楽 度
律子 静馬 優 静歩 弘生 笛生 寿美 春江

柳都創立35周年記念川柳大会

第14回川上三太郎賞表彰
第9回白石朝太郎賞表彰

日時 昭和58年7月10日(日)10時

会場 新潟厚生年金会館大ホール

新潟市南万代町一八

会費 千五百円(記念品呈)

宿題 「根っこ」「指」 当日選者発表

「寿」

「ことば」

「乳房」

「塩」

「平野」

「征服」

「七」

「続く」

庄喜一選 渡辺和尾選 森中恵美子選 橘高薫風選 寺尾俊平選 尾藤三柳選 野谷竹路選 河口弘選 大野風柳選

特別席題

各題「句・締切11時」

講演 日本のごころ 北方文化 伊藤 文吉

賞 二十位まで

☆欠席投句は6月30日迄五百円同封

〒956新津局私書箱15号柳都川柳社宛

☆宿泊希望は6月20日まで

主催 柳都川柳社

榮養によいといわしのだんご汁
仏壇にだんごの味を聞いて見る
セーターが肘でだんごの腕まくり
ややこしい話はだんごを食べてから
おだんごをかぶるとき女は目を閉じる
許す氣になつてだんごを置いて行く
だんご鼻にすると親しい貌になる
転ばない様にだんごは串にさし
メルヘンへ月見だんごが白すぎる
蠅の止まつていただんごをくれるなり
だんご一つもらつて宝盗りにゆく
うちの子に間違ひのないだんご鼻
草だんご働きの母がいる
それはそれは涎が出そうな毒だんご
五色だんごその夜一氣に女喰う
だんご屋の元祖と本家はまだ戦さ
丸めても団子になると限らない
職人の鼻唄だんごをまるくする
お山からだんごコロコロ神信す
峠茶屋やつとだんごが三ツあり
ぎおんだんご企みのある顔でなし
団子食う顔善人を丸出しに
減相もおまへんタンゴも花が好き
えらいこっちゃだんごに入歯もつてかれ
正座してみたらしだんご食べさされ
隣りより少し大きいだんご売る
きびだんご強い男に育てよう
流水を刻みだんごの串作る
野仏に供える団子に毒はない

三十四 狸村 泰子 勝晴 冬葉 和子 弘生 笛生 美智子 榮 律子 白水 雀踊子 景子 規不風 糸葉 凡九郎 重人 弘生 吸江 水客 柳宏子 幸生 本蔭棒 度 悦郎 智子 醉々 柳宏子

酒よりもだんごほしがる父の墓
天才の鼻はいつでもだんごなり
旅好きの鬼からもらうきび団子
友達をたくさんもつてるだんご売り
みたらしを頼張りながら聖書読む
昔ばなしをいっぱい詰めてあるだんご
刑務所のおやつはいつもだんご汁
兼題「見込み」 高杉鬼遊選
ポーナスの見込み外れた梯子酒
儂ない見込み抱き続けている端株
偶然に見込みが当たる事もある
見込み違いの男と女に隙間風
柔道を見込まれ入試はかたちだけ
ポーナスを見込んで銀行やつてくる
昇給の見込みドレスを予約する
お互いに見込みはずれで仲が良い
夫婦して解ける見込みのないバズル
薔薇色の見込みに揺らぐ退職金
このたびも多分見込みのない見合い
若返る見込みとてなく蜷酒
見込みある男を潰すアドバイス
世事にうとく二と四とは行きかねる
極楽へ行ける見込みが少しある
当選の見込みなのにがよう喋り
見込まれてきたのに姑の風当り
B面に見込みいっぱい詰めてある
未だ見込みあるのか意見してくれる
つつましい見込みで老舗の名を保ち

吸江 啞駄 泰子 智子 醉々 天笑 岳人 静馬 重人 天笑 勝晴 和子 敏 道子 洋敏 泰子 規不風 どんたく 幸一 天笑 旭 本蔭棒 優 英子 水客 勝美 醉々

人柄を見込んで金を預けとく
出世払いでよろしいからと見込まれる
取立ての上手な腕を見込まれる
ムードとは見込み違いの肘鉄砲
見込まれた男修羅場に立たされる
見込みある男の顎は張つてある
見込みのない男の椅子が窓にある
切れ者が見込み違いの話する
出来過ぎてプロの仲間を慌てさせ
年金でつなぐ見込みがまた揺れる
持ちつたためつ見込み崩さぬ夫婦独楽
二千万当る見込みも立ててみる
万が一の見込みで寒いくじを買う
核ボタン見込み違いは許されぬ
見込みない子へ裏金を積んでおく
その髭にままと見込み外される
貸金庫見込み外れの株ばかり
何一つ見込みないのに生きている
上役に見込まれ仲間から外れ
死に水はきつと息子がとる見込み
夫も妻も見込み違いとあきらめる
兼題「鈍い」 阿萬萬的選
決断の鈍さが尾を引く後遺症
一オクターブ下の暮しで無事な日々
我に似た羅漢はちよつと鈍い顔
鈍いふりしてゐるがなんでも知つてる妻
鈍い男もそれなりの職を持ち
鈍い娘でも仲人おっとりしてはりま

紫香 満津子 潮花 蕉路 射月芳 三十四 雀踊子 美智子 弘生 柳伸 耕花 優 度 英子 萬的 英子 啞駄 満津子 智子 鬼遊 軒太楼 どんたく ちかし 重人 文秋 静馬

百度石鈍い男の正義感

寄付の謎鈍い仕草で切り抜ける

鈍感な育ち一粒種でいる

勘は鈍いが人柄の良い婿養子

鈍い男で通り老舗背負うてる

鈍そうな仮面を着けて敵が無い

病上り仕事の勘も鈍くなり

女房は鈍いと信じ浮気する

鈍いからあなたについてくれました

鈍いからじつくりいじめてあげましょう

欲だけは鈍っていないお婆あちゃん

鈍い手に鈍いめだかが掬われる

義理ごとに鈍く孤独の日が続き

空は青出足の鈍い浮動票

もう歳で娘の謎へ鈍くいる

反応の鈍さも明治生まれなり

どろの舟と叩いて鈍い音

おうような育ちとに鈍い子をかばい

鈍感な男をためす紙鉄砲

夏みかんに鈍い主人だと思つ

決断の鈍さを責める砂時計

おんなごころに鈍いお方を馬鹿という

定年のかげりへ眼鏡ふく鈍さ

鈍感が取得おかげで胃が丈夫

顔いてばかりで鈍い父の顔

鈍感な妻とまむしの店に寄る

鈍いのが世話やきにくる旅の宿

決心が鈍り早口になってくる

鈍いのは親ゆずりです砂時計

静歩

幸生

笛生

綾珠

柳宏子

幸生

兼治郎

洋敏

景子

和子

笛生

英子

喜風

吸江

三十四

洋敏

はつ絵

頂留子

糸葉

度

美智子

天笑

雀踊子

みつ子

規不風

耕花

英子

水客

鎮彦

鈍い音で母のいない子の土鈴鳴る

良心の痛みは鈍い皮下脂肪

木魚が鈍い音で僕を責めたてる

退院が決まって感が鈍つて来

兼題「嘘」

黒川紫香選

サングラス外せば嘘がばれそうて

くもつてる鏡で嘘を見抜けない

重態の父への嘘は救される

いちがいに嘘とは言えぬ節もあり

史跡発掘歴史の嘘もあばかれる

嘘ばかりその目が好きと言うている

嘘ひとつ見抜く人形よこを向く

美しいウソでぬけ道もつ女

サラ金は嘘を承知で貸してくれ

冗談とまちがえそんな嘘を言う

嘘ひとつ高価なツケが廻つて来

毒皿とても上手な嘘を盛る

嘘でよい好きよと言つてはしかった

結婚をして本当の年を知り

警察はうそを機械で確かめる

嘘詰めた風船がしほみだす

もう嘘はつけぬ檻の中に居る

我ながらびっくりうまく言えた嘘

ばれてる嘘にもやさしい母の耳

女今自分のウソに酔っている

胃潰瘍だよと精一杯の嘘

ここからは嘘より奇麗な眼がわらう

履歴書のどこか一行嘘があり

はつ絵

史好

白兔

萬的

萬的

軒太楼

重人

耕花

旭

萬的

満津子

寿子

千万子

洋敏

美智子

天笑

糸葉

トメ子

糸葉

兼治郎

智子

潮花

満津子

景子

千万子

本蔭棒

英子

吸江

母さんを安心させる軽いうそ

すこし嘘入ると会話生きてくる

妻にだけ知られ度くない嘘があり

ウソでよし日記きれいな過去にする

病人はもう嘘と知つて受ける

善人にとつさの嘘は出て来ない

王様の嘘を咎める者がない

あれは嘘だったと言えるときを待つ

ホステスのナンバーワシで嘘が好き

そんな嘘とうに見抜いているベッド

嘘つきの背中をねらう水鉄砲

老婆のうたた寝嘘のない姿

羽根ぶとん男の嘘が重くなる

方便の嘘で当座を丸くする

愛するがゆえの悲しい嘘を言う

カタコトの嘘にコロッと騙される

美しい瞳で嘘をつかずおく

(清記・楓葉)

小西無鬼遺句集

「わらじ酒」

□ 序文・題簽 西尾 栗

□ B 6判函入 二百六十頁

□ 頒価 二千元 (送料共)

〈申込先〉 兵庫県多紀郡篠山町小川町一

小西富士子

☆本社でもお取扱致します。

月子

洋敏

悦郎

千万子

栗

文秋

和子

満津子

洋敏

幸生

糸葉

萬的

水客

射月芳

美智子

史好

紫香

老地柳城

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。

(整理・香川醉々)

勝山双葉川柳会

鈴木 節子報

春一番りボン金魚がきりきり舞い

ハル子

二人だけ内緒にしておく良い話

頂留子

自転車に乗れず淋しいひとりばち

芙佐女

美しい指が引き立つ盆でまえ

ふみ

市場囃内緒話も詰めてくる

寿美

お花見て内緒話を聞かされる

藤子

恥ずかしい話と過去を物語る

喜美子

春慶塗のお盆に似合う九谷焼

智恵子

内緒話作って楽しい花いちもんめ

妙子

恥ずかしいと思つた日から精進し

好子

当選確実大盆なりボンが笑つて

洋子

適材適所お盆にもある大中小

秋子

宴たけなわ盆は泥鰌も掬い上げ

勝子

内緒事少し大人の気分持つ

柳子

客人の余韻が残る盆を引く

柳子

興奮が去つたら恥ずかしさが残る

楓子

耳もとの内緒ばなしに眠がある

千里

愛と言ふかたに結んであるリボン

智子

自転車に乗れるとお使い引受ける

節子

堺川柳会

河内

天笑報

友情が三分でマダム傘を貸し
銀婚の旅でうれしい夫婦傘
商人の本能ゼニを嘆きかける
苦勞して光り輝く夫婦独楽
昼下り主婦は女の顔で出る
女傘借りて歩いた京の町
本能のままに奈落へおちる欲
人前でダイヤの指輪先に出る
スーパールの売出し主婦は逞しい
共稼ぎ主婦のエプロン二枚あり
不安をふつ切る様に傘の零切る
荒削りに見えても息は抜かぬプロ
念入りに殺し文句を書いている
高級な傘を持っても忘れ癖
傘借れるなじみの店で腰をすえ
仕事持つ主婦で脱線したくなる
背のびして主婦も明日へ翔びたがる
顔中の皺を集めて念を押す
片方の乳房もつかみ母乳のむ
念入りが大きなちよんばしてしま
少年の正義輝く目を信じ
一切のパンで群衆輝きぬ
念入りに水やりすれば根が腐り
お化粧に念入れすぎて売れ残り
一円を拾った人は主婦だった

川柳翠洋会

中西兼治郎報

喜子 伸子 金太 金三郎 甘平 素灯 夢遊 山久 てるよ キミ 白兔 柳太 浩一郎 柳伸 花仔 柳宏子 千万子 笑痴 紀美女 月子 与呂志 元紀 天笑 墮駄 東雲 風童 兼治郎 綾子 素秋 光子

混雑を下に下にと肩車
問われれば決め手がなくても好きは好き
花好きの庭にいつでもくくる子猫
匂い袋あの日が淡く残つて
二人だけの花を咲かせる種袋
大好きなおばはんが居る茶店
南大阪川柳会
中川 滋雀報
ガイドさんすまないけれど眠くなる
否定する心を疑問があざ笑う
どうなるでなしと疑問のコップ酒
大人みなぐるだと思つ反抗期
どの顔もぐるに見えてる裏小路
この金を使えばおれもぐるになる
飲まぬからグルではないと言いきかせ
彼と彼このとは知らず打ちあける
ちびつこのぐるは小さな罪ですみ
母とぐるに父をうまく言いくるめ
限度ぎりぎり小さな嘘がある
ギリギリへいどむサロンパスを貼る
限られた範囲で建てる青写真
丸優の限度に遠いくらし向き
新婚へ限度を知らぬ夜の客
辛抱の限度を知らぬ母の背な
羊羹を一本買つてごまかそう
ごまかして出たが財布を忘れて来
ごまかした妻に今では騙される
殉教を語るガイドの声も落ち
ジャパンガイド芸者人力富士の山
バスガイド客には見せぬ虎の巻
モンマントルの女ガイドも秋の色
人生の疑問は皺の数で読み

泰子 照子 みつ子 宏子 景子 醉々 恒明 頂留子 雅風 楓子 久秋 文伸 柳蘭 春風 綾珠 鎮彦 柳宏子 覚然坊 勝美 喜美子 寿美 智子 慶三 千代三 信治 善信 弘生 滋雀

考える私ひとりにある疑問
まな板のくぼみに疑問なんてない
まだ疑問持つてゐるうちは死ねないよ

川柳塔からつ

浜本 義美報

鳴る神の恐怖あの世までつづき

參觀日わるさ坊主が背を丸め

恋の耳チャイムの音を聞き分ける

上役の神話崩れた特売場

上役が誘つたからと酔つてくる

よいしよこりスラムに合わせ寝起きする

人生の下り坂故まろく生き

老友と語るは子のこと死出のこと

十七字俚せそうに妻も詠む

たんぽぽが石のはずれに花をつけ

分校の窓から春が見えてくる

反戦の家武者人形を飾り

川柳しんぐう

川上

合格が遊ぶブランを練っている

合格を祝う赤飯吹き上がる

合格へ母もほんのり頬染める

合格へ受話器の母が泣いている

合格の子へ晚餐の豪華版

旧友もヒラで気楽な酒を酌ぐ

還暦もチャンづけで呼ぶクラス会

旧友と時効の悪さばらし合い

叩かれた肩旧友の名を忘れ

旧友と呑めば校歌が口に出る

半額の夫婦茶碗でいびつです

嫁き遅れ他人は半値のように言つ

半額にするからダイヤ売れ残り

半額を払うと孫の正義感

悦郎

凡九郎

虹江

素石

正敏

四郎

一竿

フユ子

紫泉

千代

忠温

広幸

久仁於

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

義美

半額のネクタイだからよく曲る
ブッシュマイクの音でとびあがり
歌手の人マイクをもつてへたな歌
マイク来てそれから曲をさがし出す
うっかりとマイクの前で独り言
手洗いへ逃げよか隣へきたマイク

金太

小五ひろし

小二ゆき子

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

倉吉川柳会

渡辺

面舵一杯風の勢い見て走る

勢いに乗れば私を止める影

勢いをみせて若鮎潮を上る

コンテスト舞台上美女の勢揃い

当確の勢いだるま座して待つ

勢いが付いてオーバーランする

勢いに乗った力作世に出する

勢力のよい方へつく風見鶏

勢いがある素直な筆運び

勢いよく覚悟の車海へとび

山火事の勢い茶の間怖がらせ

燃えさかする勢いあつて恋もする

仏壇の造花を祖母は嫌いぬき

豪勢な女系家族に立つ幟

青雲の夢ははかなく旗を巻き

造花だな蝶は大きく迂回する

余命知る造花一途に日々を消す

盗まねる造花にもあるチャーミング

造花には匂いがなくて物足らぬ

最後まで造花で欺して欲しかった

洗剤で造花若さをとり戻し

いろあせた造花悲しい息つかい

それなりの色で造花も意地をもつ

ライバルへ貌を小包みして送る

金太

小五ひろし

小二ゆき子

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

小五樹生

大鉄川柳会創立五〇年 合同句集 発刊

記念川柳大会

日時 昭和58年9月18日(日)10時開場

会場 京都駅前 ホテル佐野屋

京都府下京区東洞院堀小路上ル

電話075(371)2185(代)

大鉄川柳五十年を語る 阿萬萬の氏

柳話 宿題 「始 発」

「迎える」 宮口 笛生選

「年 輪」 植村客遊子選

「大きい」 黒川 紫香選

「金(きん)」 中尾 飛鳥選

奥田 白虎選

各題二句、締切り正午

席題なし

会費 二、〇〇〇円(合同句集・発表

誌・記念写真呈)

投句料 五〇〇円

(切手又は郵便小為替希望)

懇親宴 五、〇〇〇円

※昼食は各自でお済ませ下さい

※投句及び懇親宴申込みは8月末

日までに左記へ

大阪府北区大深町二二(一〇八

国鉄梅田貨車区 中尾飛鳥宛

電話(075)711-3709

(06)6137-1104六五

主 催 大鉄川柳会

ハネムーン赤い手帖もお供する
アリバイは手帖にあつた無罪でず
古手帖恋も昔の夢と消え
造花つけ黒服巧みに使いわけ
手帖使い分けて僕の空廻り

川柳ささやま

河原みの報

身を守る術を知つて猫の爪
守るより知らぬ女で強かつた
内職の灯が中流の座を守り
身を守るタニシで蓋を固く閉じ
実力を出して女が牛を売り
実力を可憐に見せるこはれ種
鉛筆の先に実力試される
ふところに実力があり勝ちいくさ
節くれた手で実力の土に生き
半生の寡婦のドラマを編機知る
新しい命へ尽きぬ愛を編む
誰かさんの夢を編んでる日向ぼこ
母子手帖編む楽しさを広げてる
上機嫌無い袖振った酔いがさめ
無を説く和尚お布施へ目が光り

聴障川柳

稲田

豊作報

福の種二兎を授かり日々たのし
鬼払いして福を呼び春迎え
姑さんが大好きと言うそんな福
福相と古老上手にお世辞言つ
福袋背負う大黒肩が凝り
福耳をしきりと褒めるセールスマン
身内皆まとめて暮らすも福の内
泣きごとと言うまい福が逃げるから
七福神秘を足して八福神

康子 布堂 千枝子 天雀
可住 エキオ 文平 素水 法齊 靖子 美智子 越山 久子 みのる テル ゆう他 百合子 百合一 宗一 珠

三代子 一眺 美乃留 紫葉 民栄 晴野 みつる

鉄火

人徳と陽気が招く福の神
幸福は先ず愚痴を捨て見栄を捨て
福相といわれ長者に未だなれず
福運を待つ順番に疲れきり
幸福が続いてほしい疲れ刻む
福を分け福を寄せ合う障友がいる
福相に見られてはいます二重あこ

川柳高知

川竹

春らしい噂も出ない娘を案じ
適当に距離を保つて子と平和
幸せに暮しています少し嘘
宴会へいつもの釘をまた打たれ
焼け跡の死んだ噂へまだ煙り
小の虫殺しはめになる試食する
敬老会童顔などと煽られる
雑草のいじもしつて草刈機
自由さに慣れた社会がおそろしい
再婚をすれば自由が逃げてゆく
冷飯の父に背かぬ子に育ち
入刀のケーキは離婚など知らぬ
欠点が親に似てくる子の育ち

川柳化粧槽

植村客遊子報

アカギレの痛みで天気予報する
子報にはなかった女の涙雨
しなやかな手つきでさばき媚をうる
還暦の師がしなやかに舞う舞台
めでたい日今日一日が短かすぎ
老醜と見られたくない鬚を剃り
寒椿風も無いのにこころ散る
つっぱって結局親のすねかじる

行江 柳香 文古 清枝 千代女 鼓草 松風 廣風 竹萌 菊野 佳風 青果 弘枝 春舟 登男 岩泉 幸吉 三節 草風 松風 岳詩 拍秋 笛珠 悲子 葉香 白李 永楽 龍

年金の暮らしに苦しい物価高
左遷地で見上げる星も泣いている
花簾を盛れば女の私語となる
灰皿でもみ消している怒りの手
陰口は兎角尾ひれがついて行く
古稀過ぎた受賞うれし初春迎え
洗濯を干す手に春の陽がぬく
物干して父母に手引かれシャツ乾く
大の子が生まれて妻の苦労ふえ
樽酒の匂い紅白の幕を洩れ
辛い酒甘い言葉で飲まされる
悪い所ばかり両親に似て産れ
にた川柳会
独り言聞き捨てならぬと壁の耳
西村 早苗報 客遊子 大鷹 紅月 八千代 秋月 由紀 伊江坊 さとる 越山 実男 互伸

佳句地10選 (前月号から)

藤田泰子選

猫目石見てる決心変らない
手の鳴る方へ行けば税金待っていた
バイブルと疎遠になって出世する
忙しいわりに書くことない日記
このままで冬眠したい羽根ぶとん
ボスターの折目でスター顔がみ
夫から遊びを取れば蔵が建ち
バトカーがバックミラーの中にいる
自からはとべぬ花粉にあるあせり
ずるいずるい男を新聞紙で叩く
英比古

当選がとて出来ない人も立つ
跳ね返る言葉が欲しい舌足らず
糸通す仕草もそっくり亡母に似る
冬眠の蛙げんな目を向ける
適マクそれでも出口たしかめる
厚かまし下手も一緒に名人会
投げつけるとつきに安い皿選ぶ
火の乳房女の城が何時燃える
無器用な親にしててもノ一免許
正体を化学分析せしめ政治
客間などないがお客の絶えぬ家
突然のようにポケットベルが鳴り
露天風呂いささか勇気がいりそうで
蜘蛛の巣が揺れて誰あれも来ない朝
波ごのみいきに結んだ京のひと
振りかかる火の粉へ相槌など打てず
約束も公約だから当てにせず
今こで出ればこわした事になる
金魚ゆらゆら泣かせた女をフト思ふ
川柳わがやま 堀端 三男報

登美也 考華 きみえ 千草 亀甲 幸一 夢酔 裕栄 三和 景子 花子 多賀子 寿美子 メ女 雄々 早朗 早苗 雀踊子 武雄 幸太 豊太 秀雄 信秋 紀川 紀美女 千寿子 太茂津 光代 和子

弁解は無用信する妻がいる
貫いた信念弁解など持たぬ
上役の弁解左遷を匂わせる
弁解が虚しく天井に突き当る
弁解が上手になつて立候補
明日がある男は弁解などしない
弁解せず叱られているいじらしさ
言訳がとても嫌ない父の耳
弁解をする前ちよつと迎え酒
弁解がしどろもどろの汗を拭き
三昧の音へ蛇の目が欲しい京の雨
逢いに行く気持を雨に試される
廻り道へ雨は答を返さない
雨の日の用事がちゃんと待っている
その時も雨二人の別離です
義理を欠く心へ雨の降り止まず
立ち直れそうな雨なら濡れてゆく
雨傘へ女忘れぬ色を選び
金婚へ苦節が光る祝い膳
会場へ星を探している男
焦心を苛むように小雨降る
Y・F・C川柳会 人見 記代報

勇太 正子 正博 柳宏子 紀久子 克子 凡太 英子 惠美子 天彦 きみ 庄平 寿子 善太 凡九郎 狂虎 緑良 稚代 登志代 公子 三男 記代報 たす子 忍 記代 絹子 房子 野人 節子 栗

山長川柳会 那須 鎮彦報 山長の城に咲いてる桜花
春休みひとりあそんでつまんない
桜散りネオンに照らす大阪城
不況とて守りぬかねば俺の城
城見ずに桜見ながら歌うたう
秀吉も地下で喜ぶ四百年
わが城は妻と二人で支えかね
一歩ずつ固めた人の強い城
西の丸淀君達の夢のあと
雄大な城を写して城の水
わが城は富士よりきれいな妻が居る
ふりむけば高層ビルにやすむ城
残照を映して城は孤独なり
ふるさとの古城に友をなつかしむ
わが城は日本一の富士の前
菜の花句会 高杉 鬼遊報

三男 柳伸 勝美 悦郎 幸生 凡九郎 蕉露 冬彦 鎮彦 喜風 雀踊子 千歩 頂留子 度

夕やけ小やけ明日はくに出る父よ
スーパ皿の深みになみだ落しとく
子を産んでねずみ米屋へ転居する
エゴ丸出しに境界の杭を打つ
わが家の風習ねずみも知っており
そんなに深いことは言わない夏帽子

京都塔の会

松川

杜の報

団体の旅で女房は他人顔
夏が来て川はつばめの競技場
川底に捨てたあき缶まだ光り
川風がはいるとたもをさがしてる
老妻とこれから渡る深い川
泣き言をしゃべる小川が一つある
金婚を祝つてくれた肩たたき
風雲児今宵は母の肩をもみ
肩の荷をおろせば妻も老いている
なぐさめる肩がこんなに瘦せている
肩車もモーデーの一員ぞ
無口でも酒のせいかなや本音はき
裏切も嘘もあります選挙戦
ふるさとを捨てても訛りついてくる

東大阪川柳同好会

斉藤三十四報

二浪する目的校は遠いとこ
目的はお見合だったお茶の席
目的の為に人間夜叉と化し
青年の靴目のへ一直線
就職に都合がよいと野球部へ
目的の地に着くと疲れが出る旅路
目的に手段選ばぬ獣道
目的は一つスクラム組む夫婦
目的は言わす男の人旅
目的があるから辛抱する一
目的に耐えてる街の後指
宮仕え人事異動が恐い春
奥さんが裏で人事を指図する
人事からすでに芽生えている派閥
昇格にかかわりのない雀たち
ステツプと言われ渋谷都落ち

春の陽に噴水の先が光つてる
反主流そんな子もいるすべり台
御近所のしゃべり表を掃いている
あさり貝神は素敵なデザイナー
各駅停車無口な女を許さねば
電話より老父は書くのが好きらしい
湯上りの涼は抹茶の香をのせて
カラオケを聞きあき桜散り急ぐ
美しき絆と思う姉いもと
木々芽吹く中に一本山桜
葉桜の堤防はさみ池三つ
タレントになつて名士の仲間入り
8ミリがうまく陽炎捕らえてい
陽炎の自然へ邪魔な粗大ゴミ
陽炎のいのちの中のかぞえ唄
タレントが売れて野球へ悔いはなし
タレントが本当に泣いている弔辞
走る子を陽炎ゆらゆら遠ざける
雀チユンチユン余生の庭へ来てくれる

尾浜川柳会

黒川

紫香報

孫達の罌を知りつつ買つてやり
女ですかかってみたい罌もある
渡された合鍵の謎解いてみる
鍵かけてない入口も一つある

夕花
シマ子
鬼遊
射月芳
春蘭
智子
求芽
花代子
紫香
英壬子
和友
春江
孝江
明代
水客
美穂
笛珠
如水
白李
白漢子
飛陽
潮花
芳子
杜的

光重
保
よしつぐ
清太
佳秋
紫香
かつみ
寅之助
貞吉
牧郎
弘治
新吉
夢之助
寧一
光水
弥山人
覚然坊
孤舟
三十四
綾珠
喜風
美風
滋啓
慶三
雀踊子
右近
みもの
かずを
弘生

子の嫁に人事係の知恵を借り
社の人事ライバルうまくみ合せ
新人事それから胃散がはなせない
目的は親が持つてる塾三つ
尼崎いくしま川柳会 黒川
信用があるからあとへさがれない
包装紙信用も売る高値
信用が課金の椅子を重くする
盛装の客にタクシードも華やいで
タクシードには七重の膝を八重に折る
泥酔の男に惜しい花布団
静かです耳鳴りだけが聞えます
たたかいがすすんで夫婦になつて
咳ひとつわが死にざまに罌がある
くたびれたポンプに誘ひ水が要り
留守番に相手を誘う淋しがり
お茶漬を京都訛りで誘われる
音大も出てない歌手がよく売れる
ある噂めつきり大人になつた歌手
職安に小さく座り固い椅子
白い花が好きで女でひとり住む
青い鳥探して今日も日が暮れる
平凡なそんな夫の瞳を信じ
小ビートル限度一本の連休日
他人だと言われてからの風当り
夫婦ではない切符を二枚予約する
朽ちるまでゆっくりゆっくり床研ぐ
下駄箱に下駄が一つもないわが家
隣にも待ちくたびれた顔がある
落し穴掘るのに孫の手を借りる

西宮北口川柳会

妹尾

春江報

良京
柳宏子
恒明
雅風
貞子
春子
かね子
かす子
美代子
幸子
伊三郎
牧郎
伊升
定人
すえ
晴子
保蔵
一年代
玉子
美紀子
佳秋
清太
美智子
郁栄
ハツエ
かすみ
君子
紫香

結納もすんだ母娘に風薫る
吸物の木の芽の薫り匂がある
スカイラインさつき満開風薫る
無人駅空いっぱいに風薫る
薫風の如き君去り春寒し
蘭薫る匂会の席で花つんば
五合目までバスで行っても富士登山
片道はケールブルカーで山登り
頂上が見えたか先頭唄いだし
山に弾む夫が少し憎くなる
登山家はそれぞれ巾着を抱く
登山靴山のいのちに会いに行く
更衣室の囁き会社をゆるがせる
ささやかれてみると本当かと思う
この道を歩けば過去がささやきぬ
白百合のささやきに負け折らずおく
良心の隅でささやく小悪魔
ささやきの一皿多い膳となる
ささやきの中に又逢う日を決める
ささやきがピタリと止まる咳一つ
ささやきはエデンの園の匂いする
悪口と知らず易易く耳を簪す
埋設の砂にささやく貝の唄
ささやきが耳に残っている火照り
浮草の明日を信じているつばみ
平穏な夕べに嫁の味が活き
人形へお休みなさいを言い忘れ
角取れた分迫力に欠けてくる
抵抗の力がゆるむとき 女
気紛れな風が噂を持つてくる

冬子 隆子 千世子 紫香 墮駄 伊三郎 保蔵 美津子 杜栄 郁栄 右近 婦美子 みつ子 弘生 め女 はつ絵 幽香 文平 かすみ 伊升 眉水 水声 圓歩 年代 恵 きよ子 笑女 道子 三笑子 宏子 春江

好い事があつて寝るのが惜しい夜
米子きやら木川柳会 石垣 花子報 いわえ
野仏の絵に綴られた古寺便り
さし絵から思い出たぐる幼い日
母の日の母の絵みんなモノリザに
らく書きの絵にも個性がこぼれ出る
一筆に描く絵は呼吸とめたまま
なに思ふ少女は絵から抜け出せぬ
強烈なゴッホの前に立ちすくむ
晩年の画布へ明い彩を選ぶ
鳩の絵が描けない戦火の国もある
うそのないクレヨンのは生きてる
母と子の切絵に父の顔がない
絵の奥のなみだが足を釘付ける
わかあゆ川柳会 小砂 白汀報 千代 花子 千春 日枝子 田鶴 あい子 亜弥 美世 瑞枝 とも子 なみ
今来たぞと知らせるための咳はらい
余計な口叩かせまいと咳ばらい
手も足も心も伸ばす同窓会
咳ばらいぐらゐ煙草へこたれず
むかい風に立つて残り火たやすまじ
桃一つ水子地蔵の石の上
もつれ糸いまだ解けぬに春になり
砂浜にふくらまずめの唄きそい
ゼロ歳の意地乳首を離さない
隣から意味ありそうな咳ばらい
何気ない会話の中になぞく意地
田植機に明治をさらりと聞かす姑
逆境を支え切ったのは小さい意地
知恵袋秘めてあるよう桃の種
意地すてた日から心がまるくなり
老骨の眉を走った青い意地

白汀 公女 三十四 紅溪 雪女 十吉 健 虹宵 善子女 蒼生 張賀 玉泉 曉舟 千代女 拝山 沙京 黄塵 妙子女 嗣栄 カロ女 歌子女 三石 梨花女 秀山 天心 万里歩 香夢女 彩民 高原子 狂山

咳ばらいだけで末席にいる気骨
ハワイ川柳ウイロー社 市岡 暁舟報 白汀
運命と割り切りたいに愚痴が起き
運命とあきらめ切れず泣く
運命と戦うつもり車椅子
明日知れぬ運命今日は無事にくれ
運命だよ自己の無能は棚に上げ
人生は悲喜交々のさだめなり
運命の良さは夫婦の意気が合い
善悪も人の運命とあきらめる
運命に結ばれて早や金婚か
辛かった過去は運命に頼りすぎ
運命にあやつられつつ生きている
運命の皮肉親族葛藤し
失敗へ運命ですとあきらめる
運命という悲しみに愚痴がでる
慰めは運命だからと老いた母
運命は忍の一字で拓かれる
苦勞する度に運命意地を見せ
運命は天にまかせて日々好日
運命を狂わす罌とは露しらす
ハツとするきわどいピンチ抜ける運
人生の運命左右強く生き
運命のいたずら今は遠い人
荒浪の運命背負って早や八十路
運命にまかして鳴かず飛ばすいる
運命とあきらめよとは無情なり
心一つ重い運命覆えす
はつきりと地獄極楽運命論
運命とあきらめ切れぬ捨てた恋
運命をどうのこうのと怠け者

駒つなぎ川柳會

里

小路報

雀踊子

健司

史好

射月芳

醉々

雅風

恒明

柳右子

冬葉

善信

育圓

萬的

千代三

美房

悦郎

柳宏子

頂留子

智子

柳伸

美幸

英比古

浩一郎

律子

度

規不風

一二三

翠公

覚然坊

花仔

美代

妻の愚痴酒が薬の線を超え

帰らない人が教えた酒の味

晩酌をする妻がいる暖かさ

恩人に恩が返せぬコップ酒

城北川柳會

野呂

右近報

冬二

信義

静歩

松太郎

ふみ

炉子

倫子

秀村

晴子

正之

星斗

ただし

右近

婦美子

公一

すみれ

テルミ

千世子

新一郎

笑子

道風

茂樹

八重

重彦

美恵

頼一

志保

三歳児自信を持って母をほめ

天と地の愛に芽吹いた種一つ

夜泣きそば徹夜の家を知って居る

無理を言い老母の寂しい顔を見る

嫁に行くといれしチエリーのほろ苦さ

キリストの愛は自衛すら捨てて

暴力を盾の自信なら笑う

鮮やかに見事八千代の舞扇

むらくも句會報

藤井

明報

緑之助

正朗

芳子

はじめ

峰雪

蚊声

清祥

孝華

みどり

福子

一郎

富子

百代

ヤス子

はる代

よし子

きよ子

藤子

千里

竹乃

林蔵

保子

左春

満津子

悟郎

登志代

達一郎

弘生

三十四

静子

妻の愚痴酒が薬の線を超え

帰らない人が教えた酒の味

晩酌をする妻がいる暖かさ

恩人に恩が返せぬコップ酒

愛ひとすじ叱る言葉を考える

花が散る悲しい愛の道成寺

恵まれぬ子等へ愛の手小さすぎ

客来ればすぐ手料理を出す自信

人生を愛が支えた六十年

悲しきは積木崩しの親子愛

愛しても溺れるなよとアドバイス

誰からも愛される老いになりたくて

愛されて初めて愛の深さ知る

仮借なく叱って見せる母の愛

良い悪い普通が同居してる僕

捨て石を置いて出方を見る自信

新築へ祖母のタンスが落ち着けぬ

一步踏み出せて嬉しいリハビリ

いく年も亡父母の愛あたたかし

愛してる言わないままで四十年

傘寿来て芸の自信に顔の艶

花に水やる人無くて旅止める

憑きものが落ちたら若葉唄びて居る

下積みの汗が覚えて居る自信

老人に愛の手ポスター笑みかける

毎日のけいこにやっと思ひつき

親思ふ不惑の年の愛の詩

あじさいは人目をさけた愛の色

日曜の大手伝い使い過ぎ

新緑に誘う友あり嵐山

妻の愚痴酒が薬の線を超え

帰らない人が教えた酒の味

晩酌をする妻がいる暖かさ

恩人に恩が返せぬコップ酒

愛ひとすじ叱る言葉を考える

花が散る悲しい愛の道成寺

恵まれぬ子等へ愛の手小さすぎ

客来ればすぐ手料理を出す自信

人生を愛が支えた六十年

悲しきは積木崩しの親子愛

愛しても溺れるなよとアドバイス

誰からも愛される老いになりたくて

愛されて初めて愛の深さ知る

仮借なく叱って見せる母の愛

良い悪い普通が同居してる僕

捨て石を置いて出方を見る自信

新築へ祖母のタンスが落ち着けぬ

一步踏み出せて嬉しいリハビリ

いく年も亡父母の愛あたたかし

愛してる言わないままで四十年

傘寿来て芸の自信に顔の艶

花に水やる人無くて旅止める

憑きものが落ちたら若葉唄びて居る

下積みの汗が覚えて居る自信

老人に愛の手ポスター笑みかける

毎日のけいこにやっと思ひつき

親思ふ不惑の年の愛の詩

あじさいは人目をさけた愛の色

日曜の大手伝い使い過ぎ

新緑に誘う友あり嵐山

妻の愚痴酒が薬の線を超え

帰らない人が教えた酒の味

晩酌をする妻がいる暖かさ

恩人に恩が返せぬコップ酒

愛ひとすじ叱る言葉を考える

花が散る悲しい愛の道成寺

恵まれぬ子等へ愛の手小さすぎ

客来ればすぐ手料理を出す自信

人生を愛が支えた六十年

悲しきは積木崩しの親子愛

愛しても溺れるなよとアドバイス

誰からも愛される老いになりたくて

愛されて初めて愛の深さ知る

仮借なく叱って見せる母の愛

良い悪い普通が同居してる僕

捨て石を置いて出方を見る自信

新築へ祖母のタンスが落ち着けぬ

一步踏み出せて嬉しいリハビリ

いく年も亡父母の愛あたたかし

愛してる言わないままで四十年

傘寿来て芸の自信に顔の艶

花に水やる人無くて旅止める

憑きものが落ちたら若葉唄びて居る

下積みの汗が覚えて居る自信

老人に愛の手ポスター笑みかける

毎日のけいこにやっと思ひつき

親思ふ不惑の年の愛の詩

あじさいは人目をさけた愛の色

日曜の大手伝い使い過ぎ

新緑に誘う友あり嵐山

妻の愚痴酒が薬の線を超え

帰らない人が教えた酒の味

晩酌をする妻がいる暖かさ

恩人に恩が返せぬコップ酒

愛ひとすじ叱る言葉を考える

花が散る悲しい愛の道成寺

恵まれぬ子等へ愛の手小さすぎ

客来ればすぐ手料理を出す自信

人生を愛が支えた六十年

悲しきは積木崩しの親子愛

愛しても溺れるなよとアドバイス

誰からも愛される老いになりたくて

愛されて初めて愛の深さ知る

仮借なく叱って見せる母の愛

良い悪い普通が同居してる僕

捨て石を置いて出方を見る自信

新築へ祖母のタンスが落ち着けぬ

一步踏み出せて嬉しいリハビリ

いく年も亡父母の愛あたたかし

愛してる言わないままで四十年

傘寿来て芸の自信に顔の艶

花に水やる人無くて旅止める

憑きものが落ちたら若葉唄びて居る

下積みの汗が覚えて居る自信

老人に愛の手ポスター笑みかける

毎日のけいこにやっと思ひつき

親思ふ不惑の年の愛の詩

あじさいは人目をさけた愛の色

日曜の大手伝い使い過ぎ

新緑に誘う友あり嵐山

妻の愚痴酒が薬の線を超え

帰らない人が教えた酒の味

晩酌をする妻がいる暖かさ

恩人に恩が返せぬコップ酒

愛ひとすじ叱る言葉を考える

花が散る悲しい愛の道成寺

恵まれぬ子等へ愛の手小さすぎ

客来ればすぐ手料理を出す自信

人生を愛が支えた六十年

悲しきは積木崩しの親子愛

愛しても溺れるなよとアドバイス

誰からも愛される老いになりたくて

愛されて初めて愛の深さ知る

仮借なく叱って見せる母の愛

良い悪い普通が同居してる僕

捨て石を置いて出方を見る自信

新築へ祖母のタンスが落ち着けぬ

一步踏み出せて嬉しいリハビリ

いく年も亡父母の愛あたたかし

愛してる言わないままで四十年

傘寿来て芸の自信に顔の艶

花に水やる人無くて旅止める

憑きものが落ちたら若葉唄びて居る

下積みの汗が覚えて居る自信

老人に愛の手ポスター笑みかける

毎日のけいこにやっと思ひつき

親思ふ不惑の年の愛の詩

あじさいは人目をさけた愛の色

日曜の大手伝い使い過ぎ

新緑に誘う友あり嵐山

妻の愚痴酒が薬の線を超え

帰らない人が教えた酒の味

晩酌をする妻がいる暖かさ

恩人に恩が返せぬコップ酒

愛ひとすじ叱る言葉を考える

花が散る悲しい愛の道成寺

恵まれぬ子等へ愛の手小さすぎ

客来ればすぐ手料理を出す自信

人生を愛が支えた六十年

悲しきは積木崩しの親子愛

愛しても溺れるなよとアドバイス

誰からも愛される老いになりたくて

愛されて初めて愛の深さ知る

仮借なく叱って見せる母の愛

若かりし十年前の訪問着
思い出はなつかし旅の写真帖
旅の宿聞か鐘の音も旅のもの
十年目楽しい趣味で若返る

岸和田川柳会

植山

武助報

用意する手際も亡母によく似すぎ
用意した言葉がでない好きな人
見栄もある用意された嘘一つ
学歴に小学卒と書く自信
本から落ちたスマイルは亡母と摘んだもの

ハナエ
滝子
マサコ
明朗
真柳
由高
希久志
狸村
せつ子

ベンゾールの匂いしみ込む週し読み
高額の本も目方で引きとられ
本を読む時間を呉れた闘病記
全集の背の金文字に見下され
手帳から喧嘩のタネがこぼれ落ち
ライバルを迎える用意の言葉撰る
退院の用意感謝の千羽鶴
子育ての笑いや涙なつかしむ
古手帳あの日の記憶呼び戻す
自分だけわかる符号で書く手帳

ゆづ子
富志子
武助
白光子
浪速子
ひで
甘平
さよ子
こよう
世界人

母親

佐藤 藤子

母親ってどうしてこうなんだろうと思っ
家を出る時 いっだって

「早く帰ってきなさいよ」という。
ばくだつて早く帰ろうと思っている。
けれども どうしてもおそくなる。
すると母さんは

「どうしておそかったの？」
「なにがあつたの？」
「だれといっしょだったの？」
などと 日課のように口うるさくいう。

それである日
まだ太陽があるうち帰ってやった。
そしたらこんどは
「どうしたの？」
「ぐあいでもわるいの？」
こうだ。
まったく母親ってどうしてこうなんだろう。

これはある中学生の詩です。私もこれと同
じことを言ってきたのでつい苦笑してしま
いました。子供達に読んできかせると
「お母さんといっしょだね」……
長女が高校を卒業したのをきりに私も子
離れに努力し、又、母親として、一人の女性
として、私なりに少しでも向上できたと思
っています。

日曜を兼高さんと旅をする
川柳大坂

田中

笑風報

佳い話娘と金に羽根が生え
ミニ短く短くはいて未だ一人
池の面に花片つづく鯉の群
台風が過ぎればやさしい父になる
ネジ切れた時計の前に立つ孤独
崖の花じつと孤独に耐えている
ご子算に合せて宿を決めて来る
寒椿つばる花は北を向く
宿ゆかた男心が騒ぎ出す
合掌の指の隙間に住む魔性
春の陽へやさしく廻る花時計
したたかに生きて雑草花をつけ
暖冬のもどり寒波に背を丸め
冷蔵庫宿は吞ませる位置に据え
風まかせできぬ日本の風見鶏
太陽を神だと思ふ地下勤務
商売の本音を言わぬ顔と顔
本当の素顔にもどる楽屋裏
健康の分だけ年寄歩を進め
電話口やっぱり庇っている身内
作業服嘘もかくしもない暮し
文明の進化うめく地下の街
やわらかい物踏んで来た夜の道
夫婦とは喧嘩しながら根が太り
しくさまで似て来る孫にこわくなる
川柳塔まつえ

恒松

町紅報

共かせき集金泣かせの日が暮れる
集金へ用意の小銭底をつき
集金へ女一人でいる不安
愚童

集金はしつこい程にチャイム押し
 一か八か裏目に賭けてみる度胸
 子育ての甘き裏目に追いこまれ
 これしきの裏目に負けろかコップ酒
 四面楚歌裏目か人生見失い
 愛枯れて夕陽が落ちる森の底
 慟哭の中から森が死んでゆく
 開発の波に民話の森が消え
 七人の小人が住んで森平和
 混浴へ猿が森から下りて来た
 遠縁が横やりを出す遺産分け
 ヒヤリング一面横やりともとれる
 横やりを入れて反応確かめる
 不機嫌が朝までつづいている茶漬け
 お茶漬けの音が大きい黙否権
 単身赴任茶漬けで今日をしめくくる
 川柳後案
 井上柳五郎報
 煽てたら乗る先輩で利用され
 先輩の主義にはふれずついてゆき
 先輩の愚痴に吞み干す苦い酒
 先輩の墓碑の雪をはらう傘
 先輩の座に安らげば虹が消え
 過信していたとろ舟についおぼれ
 隙のない男に過信の矢が折れる
 健康の過信に思わぬおとし穴
 保護色を過信したのが仇となり
 ライバルに先を越されていた兎
 流れ矢が過信の背に突きささり
 老人の涙ドラマに吸いこまれ
 御紋章の威力ドラマでだけのもの
 メロドラマ見ている妻の目がこわい

満江 ちかし 芳子 正朗 孝華 嘉寿子 鳳郎 由郎 多賀子 鶴丸 壮樹 通児 登美也 孤呂二 与根一 叮紅 秋月 博友 宏太 鮫虎狼 たけ志 玉水 健一 和夫 恒洋 哲郎 照路 番茶 佐加恵 隆

自作自演きょうのドラマへ身構える
 耐えぬいた亡母のドラマを墓に埋め
 地下道は歩行者天国無事故道
 地下道を抜けると五月の風に会い
 先輩を真似たお陰で出世せず
 白岩 文衛報
 柳大原
 服を着た六法全書のような父
 オハヨーとかさすがが止った配達路
 ばか話本音もチョイチョイ出るしまつ
 嫁よりは新車が欲しいとせがまれる
 年金が自転車に化け孫のせる
 風媒花馬鹿になる日の風に乗る
 花の下どのゴザも皆馬鹿がいる
 人間の馬鹿たべすぎて薬のむ
 馬鹿になれ風がささやく曲がり角
 髪の毛もなじんでくれる素直な日
 髪ゆれて少女みどりの風の中
 定年へあと幾日の靴みがく
 社長ひまマドロスバブみがいてる
 退院に夫がみがいてくれた靴
 いっしんに鍋みがいてる幼な妻
 モンペから働いてきた土が落ち
 雑草が抱きしめてる冬の土
 太陽を含んだ土に気を許し
 オエスケー川柳会 大坂 形水報
 赤目の滝同じ道でも春と秋
 街の灯が消えると猫の目が光る
 滝壺の底まで落ちて蛙浮く
 蟬の声一体となり滝の音
 滝壺へエレベーターがつれてゆく
 開発が滝の水脈断っている
 柳五郎 青銅 元一 草風 定平 克巳 美佐子 ゆくよ たくよ 巴子 玉恵 耕花 いさむ 敏子 理恵 辰江 ひでの 天信 はるみ 文衛 ゆきお やよい 地佳平 水報 一扇 聖地 形水 亜成 博泉 てまり

観光も自殺も同じ滝見つめ
 み仏の心になって滝を見る
 変りばえしない柄が良く売れて
 目前の滝に背筋がのびてくる
 大詰の舞台に滝の落ちる夏
 川柳やがわ 高田 博泉報
 一病で弱気になるを戒める
 庖丁がそば向きます冷凍魚
 減反にこの見よがしのキン草
 誕生の蛙が先ず見た戻る川
 ラケットを持てば可愛い鬼になる
 孵卵器のひよこは親を知らぬまま
 誕生を待ちわびた子に泣かされる
 嫁が来るそなた別居はせぬそう
 雨蛙にせかれて母が立つ厨
 天敵へ弱気を見せぬ雑魚の群
 神様の前で弱気になつてくる
 どうしても産むと妻の顔泣し
 乳いろを臉のうらに蓄える
 男くさい部屋で母性をくすぐられ
 札束で地盤の杭を移動させ
 表面の弱気を支えているキャリア
 弱気など言っておれない終盤戦
 七・五・三きつちり産んだ誕生日
 初孫が生まれて少女としげかとれ
 宝石の眩しさを放さない
 当選の準備体操パツタ族
 島買つて島の空気もさだまさし
 アクティー大阪で虫には眩し過ぎ
 健康な乳房が揺れるのもテニス

のぼる 千夢 秀泉 有一 入仙 博泉報 光子 かつみ あやめ 英子 一途 潮花 あいき シマ子 淳朗 静成 重鈍 弘生 琴音 三郎 晴風 博水 一眉 笑平 鉦美 勝路 小美 紫香

ビフテキを食うライバルの店を避け
弱気にはなれぬと靴の紐しめる
温室の西瓜が少し甘すぎる
東西南北麻雀だけは確かなり

打吹川柳會

奥谷

無責任時代の風が吹き荒び
以下余白責任果して酔いつぶれ
国訛りつれて都会に円く生き

京訛りテレビで親しめ聴きはれる
初出勤お国訛りで挨拶し
燃える恋ヒロイン老いて独り病む

国訛りうっかり出して笑われる
そえぬ恋燃える心が歌となり
燃えかすの灰もアク出し役にたち

燃えあとも長く尾を引くニュージャパン
何事も燃えてかれば悔いはない
過疎の里素朴がにじむ土地訛り

大会に燃えた句箋が没に冷え
笑顔して燃える想いを胸に秘め
身を燃やす星ふる夜の猫の恋

青雲の門出 涙になお燃える
反対があればあるほど燃える意地
青春を国防色に燃えた過去

富田林富柳會

藤田

笛の音が消えたあたりに遊女塚
風少し入れて自分をとりもどす
夕焼を合図仲良し散つて行き

頂上の風は匂いまで違い
風の向き変えて女が喋り出す
そよ風になつて蝶々を遊ばせる

モンローの乳房に寒い父の風

鬼遊
右近
寿馬
薫風

弘明報

諒藏
三男吉
早苗

しず子
文子
忠男

よし江
梅朗
隆堂

幸枝
吉朗
宗則

正雄
嘉寿恵
春帆

経義
弘朗
泰子報

冬二
花梢
勇

柳太
美佐子
泰子

慶子

仲よめを何時もつないでいる便り
事毎に意見の違う仲よしで
たかぶりが覚めると風が生ぬるい
明るさにあがれて来た夏の虫
良い噂明るい顔で聞き流し
刑務所を出てから消える父の砂
川岸の二人動かす風光る

川柳たけはら

森井

舊居報

ランランゆりぐみさんになりました
かげがふたはるがなくなるよ
三年生先生もお友達も新しい
めいたてですこい力をもつてな
そそよと気持ちがいい春の風
ジョッピング今日友だちのたん生
一つしかない身砂針にせかされる
六年生もつうっかりとしておれぬ

先輩の卒業さびしい春休み
とまぎの春だ中二だ先輩だ
クラスがえ私にほしい社交性
脱ぎ捨てて捨てて竹の子天にのび
姉ちゃんはいライバル父の膝母の膝
雨無情一年がかりの花散らす
高島田見上げて肩の荷が下りる
灰落ちるたばこに命ふと思つ

子守唄だんだん太くなる絆
魂をふるわせ新芽伸びはじめ
小細工をせず投げで見ろ少年よ
幸せな女がしゃべると春が来る
時刻表ときどき狂う夫婦橋
皮ジャンを着た童顔が憎めない
この狭いところであちこち向いた屋根

栄一郎

栗

美代

きぬ

与呂志

岳人

美房

小三純

昭平

昭保

小西美

小西貴子

小八仁

昭子

小六恵

二希世子

史一紀

高一愛

ひとさまのおかげ他力をいま悟る
たまさかの故郷お世話になるばかり

川柳はびきの

塩満

入学へ祖母の年金又目減り
やがて来る春を信じた花の種
須磨の浜平家ここから敗け始め
乾林のガラスだローンが終ったぞ
忙しい父はカラオケバーに居る
菜の花を赤いグラスに差して見る
良慶さん逝けど五つ子名を残し
近眼の蝶が造花に密求め
マラソンの折り返し点が見えてきた
野の花に蝶も晴着で舞を見せ
無駄話後悔しても焦げた鍋
幹事役どうにもならぬ雨が降り
病室へ入る笑顔を意用する
札束があればあったのである悩み
肩書きをかざせば人が遠ざかる
一戸建ローンローンで二十年
定年の駅で鈍行に乗りかえる
教会の屋根で雀が恋をする
コスモスが気ままな風に逆らわず
公約へ札束うごく選挙戦
花束の一つが抱えている嫉妬
次々と札束のいる娘が育つ
酔う姿人にみられていやなもの
酔いたい女は苦しさもろくにうけ
誰草も花の季節は花をつけ

シケヨ

静火

敏報

喜代子

寿美

白水

和子

与呂志

キミ

隅谷義一

伴子

龍子

美恵子

隆

美房

美代子

翠

石橋義一

第19回路郎忌七月句会

日時 七月七日(木) 午後六時
会場 なにわ会館

天王寺区石ヶ辻町19-12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

兼題 「いけにえ」

阿部 柳 太

「転向」

香川 弘生 選

「貫く」

磯野 いさむ 選

「ボタン(釦)」

西尾 某 選

各題三句以内厳守

席題 二題 当日発表

各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

8月の兼題 「割余」「引波」「笛頼」「信」

8月の本社句会は8日(月)

お 願 い

誌代その他本社へのご送金は必ず左記
会計室へお願い致します。

★郵便振替(大阪33368川柳塔社宛)を
ご利用下さるのが安く便利です。用紙は
郵便局にあります。

〒581 八尾市中田二丁目二番 高杉鬼遊方

川柳塔社会計室

● 募 集 ●

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 某 選
水煙抄(10句)黒川 紫香 選
愛染帖(3句)橘 高 薫風 選
課題吟(各題5句以内)

「率直」 江城 修史 選

「稼ぐ」 小砂 白汀 選

「見る」 柴田 英壬子 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りません。

★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十月号発表 (8月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 某 選
水煙抄(10句)黒川 紫香 選
愛染帖(3句)橘 高 薫風 選
課題吟(各題5句以内)

「支え」 松川 杜的 選

「命令」 川竹 松風 選

「宝」 川端 柳子 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。

★用紙は川柳塔社柳箋をご利用ください。

7月の常任理事会は1日(金)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十八年六月二十五日印刷
昭和五十八年七月一日発行

編集兼 発行人 中島 蓬太郎
印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(二六六) 六九一四番
振替口座大阪・二二三三六八番

昭和四十二年一月九日 第二種郵便物認可
昭和五十八年六月二十五日 印刷
昭和五十八年七月一日発行 (毎月一日発行)

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

この夏、おいしさひとりじめ……………

アイスクャンデー

宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーシカ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)
サンストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち店
泉北高島屋 南海難波駅構店
国鉄大阪駅店
大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551